3 詩文

単元のねらい

「漢文入門」「史伝」の単元によって訓読や句法など漢文読解の基礎を段階的に固めてきたことを受けて、漢詩文ならではの美的表現を学ぶために、古くから日本でも親しまれ、日本語・日本文学に大きな影響を与えた唐の詩と文章を取り上げる。

詩については、五言と七言、絶句と律詩といった形式面での違いが、それぞれの詩の表現の特徴とどのようにかかわるか、考える。また、二字・三字の意味のまとまりが組み合わされて一句が構成されること、対句による対偶の美が積極的に用いられていることを学び、漢詩読解の導入とする。

文については、古文・駢文ともに、簡潔で整然とした表現のベースに対比的発想があることを学び、主題の提示から結論に至る構成について、段落相互の関係を図示するなどして理解する。

詩と文のいずれの作品についても、制作の時代的・個人的背景を視野に入れて、描かれた状況や心情を考えることで、それぞれの作品の主眼がどこにあるか、それがいかに表現されているかを学ぶ。

全体を通じて、古文の単元で学んだ日本語・日本文学との関連性や対照性を意識し、日本語・日本文学の世界において漢詩文が果たした役割の理解への導入とする。

単元の構成

漢詩文の言語表現の特徴を、絶句・律詩・古文・駢文の四つの形式の順で学ぶ。絶句八首は主題ごとに、

季節描写から心情を浮かび上らせる「四季」、友との別れという身近な題材をうたう「送別」、離れた土地から詩によって思いを伝えようとする「望郷」にわけて、五言と七言をバランスよく配置した。律詩は、杜甫と白居易、それぞれの天分を示す名詩を一首ずつ取り上げ、律詩の構築美と深い心情表現とを味読できるようにした。日本漢詩は、漢詩が中国の事物だけでなく、日本や西洋の自然や歴史も題材とし得ることを、七言絶句二首で示した。

文は、内容面での構成がしっかりした韓愈の古文と、対句の美しさがきわだつ李白の駢文とを一篇ずつ取り上げた。

単元のまとめとなる「言語活動」においては、ここで学んだ漢詩文の表現の特徴を改めて意識させるために、漢詩らしさ、漢文らしさとは何だろうかという問いを立て、それが日本語の世界とどのようにかかわるかを探究させる。あわせて、漢詩文を学ぶ意味についても考えさせたい。

教材のねらい

1 選定の理由

漢詩になじむための導入として、季節を背景にし、古くから愛誦されてきた絶句四首「春暁」（孟浩然）「江南春」（杜牧）「秋風引」（劉禹錫）「江雪」（柳宗元）を前半に置いた。後半の四首は、「送二元二使一安西一」（王維）と「勧酒」（于武陵）はともに送別の場で作られた詩でありながら、「渭城」「陽関」を読み込む前者と、そうした固有名をいっさい排した後者との違いが鮮明であり、「涼州詞」（王翰）と「静夜思」（李白）もまた、故郷を離れた者の心情をうたう点で共通しつつ、描かれる情景は対照的であり、漢詩の表現の幅を学ぶのに適した組み合わせである。

律詩では、「春望」（杜甫）と「八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一」（白居易）によって、五言と七言それぞれの律詩ならではの構成とそれぞれの詩人の境遇に即してその心情をていねいに読解することを目指した。後者については、「名月――八月の詩」（一海知義）を「古典に関する文章」として用意し、日本文学とのかかわりについても学べる教材とした。

日本漢詩はいずれも絶句だが、「富士山」（石川丈山）は五言で日本の自然物、「鳥児塞宮」（成島柳北）は七言で西洋の建築物を主題とするように、ここでも対比がしやすいように配慮した。

文章は、古文として「雑説」（韓愈）、駢文として「春夜宴二桃李園一序」（李白）を採用した。前者は理知的な構成でありながら心情は激烈であり、後者は駢文という形式を守りながら心情は自由である。また、後者は古文の単元の「おくのほそ道」との比較を行なうことによって、日本文学との連関と相違についても学ぶことができる。

2 指導のねらい

いずれも名篇であり、暗誦にも向いている。繰り返して音読し、詩や文章の語彙やリズムになじんだ上で、表現の特徴へと理解を進める。また、季節の風物への敏感さ、友への思い、不条理な世への憤激、限られた命への愛惜など、漢詩文が普遍的なテーマを扱ってきたことに気づかせることも重要である。詩形・押韻等の基礎知識は折りに触れて整理して示し、正確に把握させるようにしたい。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4　評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕	(1)ア 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	(1)イ 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。	(1)ウ 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	(1)エ 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
春暁・江南春・秋風引・江雪（漢詩の手引き）				○	○	
送元二使安西・勧酒・涼州詞・静夜思（漢詩の手引き）						
春望・八月十五日夜…（漢詩の手引き）					○	
富士山・鳥児塞宮（漢詩の手引き）			○		○	
雑説					○	
春夜宴桃李園序					○	○
名月 ── 八月の詩						
単元の言語活動４			○			

⑵ア	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。								○
⑵イ	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	○	○	○	○	○	○		○
⑵ウ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	○	○	○	○	○	○		○
⑵エ	時間の経過による言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	○	○	○	○	○	○		○
〔思考・判断・表現〕									
B⑴ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている	○		○	○	○	○		○
B⑴イ	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	○	○	○	○	○	○		○
B⑴ウ	「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。		○	○	○	○	○		○
B⑴エ	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている			○	○	○	○		○
B⑴オ	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。	○				○	○		○
〔主体的に学習に取り組む態度〕									
	進んで漢詩のきまりと表現の特色について学び、漢詩の世界に親しみ、描かれた状況や心情を考えながら、それぞれの漢詩を読み味わい、学習課題に沿って、季節と心情の関係について、それぞれの詩を比較し、話し合おうとしている。	○							
	進んで漢詩のきまりと表現の特色について学び、漢詩の世界に親しみ、描かれた状況や心情を考えながら、それぞれの漢詩を読み味わい、学習課題に沿って、それぞれの詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、どのような違いがあるか、話し合おうとしている。		○						
	進んで漢詩のきまりと表現の特色について学び、漢詩の世界に親しみ、描かれた状況や心情を考えながら、それぞれの漢詩を読み味わい、学習課題に沿って、杜甫と白居易の当時の境遇と時代背景を調べ、二つの詩を比								○

較して、その違いがどのように表れているか、発表しようとしている。								
進んで日本漢詩を読み、我が国の文化と外国の文化との関係について理解し、描かれた状況や心情を考えながら、それぞれの漢詩を読み味わい、学習課題に沿って、富士山やヴェルサイユ宮殿を漢詩の題材とすることの効果について話し合い、発表しようとしている。					○			
進んで漢文の簡潔で整然とした表現と構成に注意しながら「雑説」を読み味わい、学習課題に沿って、描かれた状況や心情を考えながら、筆者の主張について話し合おうとしている。				○				
進んで漢文の簡潔で整然とした表現と構成に注意しながら「春夜宴桃李園序」を読み味わい、学習課題に沿って、描かれた状況や心情を考えながら、松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表しようとしている。			○					
進んで漢詩文の表現の特色について学び、漢詩文に親しみ、月に関する文学作品を調べ、学習課題に沿って、漢詩（漢文）と和歌（古文）における、月の描かれ方や作品の背景について、共通点と相違点を考えようとしている。		○						
進んで漢詩文の表現の特色についてまとめ、今までの学習を生かして、漢詩文の日本語・日本文学への影響を考察しようとしている。	○							

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

春暁・江南春・秋風引・江雪（漢詩の手引き）：季節と心情の関係について、それぞれの詩を比較し、話し合う。【〔思・表・判〕B⑵イ】

送元二使安西・勧酒・涼州詞・静夜思（漢詩の手引き）：それぞれの詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、どのような違いがあるか、話し合う。【〔思・表・判〕B⑵イ】

春望・八月十五日夜…（漢詩の手引き）：杜甫と白居易の当時の境遇と時代背景を調べ、二つの詩を比較して、その違いがどのように表れているか、発表する。【〔思・表・判〕B⑵イ】

富士山・鳥児塞宮（漢詩の手引き）：富士山やヴェルサイユ宮殿を漢詩の題材とすることの効果について話し合い、発表する。【〔思・表・判〕B⑵イ】

雑説：筆者の主張について話し合う。【〔思・表・判〕B⑵イ】

春夜宴桃李園序：松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表する。【〔思・表・判〕B⑵ウ】

単元の言語活動４「漢詩漢文の表現の特徴をつかむ」：漢詩文の日本語・日本文学への影響を考察する。【〔思・表・判〕B⑵ア】

指導計画案

指導上の重点目標	学習活動と指導上の留意点
1　簡潔な漢詩を正しく音読・読解できるようにさせる。 2　漢詩の基礎知識と唐詩の特質を理解させる。	**導入** ①　漢詩の決まりについて、理解する。「漢詩の手引き」（P一五六～一五七）を用いるなどして、簡潔に説明する。 ②　唐代の文化について知っていることを発表する。その後、指導者の説明を聞く。小・中学校で学習した知識を発表させる。指導者は唐詩が唐代文化の精華とされていることを説明する。
1　**【絶句―四季】** **【春暁】** この詩における自然に対する愛情を理解させる。	**展開** ①　**【春暁】** ①　詩の黙読。その後、範読を聞く。 ②　一斉読み。その後、指名によって音読する。 ③　五言詩のリズム「〇〇＋〇〇〇」を指摘する。 ④　詩の書き下し文を完成させる。**知技** ⑤　指名によって板書させてもよい。板書させたものはきちんと評価し、誤りがあれば添削して完成させる。 ⑥　正確に現代語訳する。**知技**【「言葉と表現」1】 ⑦　詩の表現の意味・内容が伝わるような現代語訳を工夫させる。 詩の場面展開を整理する。 優れた表現を指摘し、第四句を中心に作者の心情を考える。 詩形・押韻について確認する。【「学習のポイント」1】 押韻等、まだ分かりにくいようであれば、この段階では、指導者の側で説明してもよい。

1		1
【江南春】 この詩における自然と人間とのかかわりについて考えさせる。	展開	【江南春】 ①詩の黙読。その後、範読を聞く。 ②一斉読み。その後、指名によって音読する。 ③七言詩のリズム「〇〇＋〇〇＋〇〇〇」を指摘する。知技 ④詩の書き下し文を完成させる。知技 ⑤正確に現代語訳する。 ⑥前半の叙景の美しさについて理解する。 後半の転調の大胆さについて理解し、情景について討論する。 ⑦情景の展開を事実と見るか、幻想と見るか、自由に意見交換させる。 詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」１〕
1		
【秋風引】 この詩の自然に対する繊細な感覚を理解させる。		【秋風引】 ①詩の黙読。その後、範読を聞く。 ②一斉読み。その後、指名によって音読する。 ③詩の書き下し文を完成させる。知技 ④正確に現代語訳する。 疑問形などの句法、擬音語などに注意させ、漢和辞典を引いて現代語訳を作らせる。漢和辞典で調べる語を指定してもよい。擬音語「蕭蕭」等。 ⑤「入庭樹」の主語について考える。 ⑥「孤客最先聞」の理由について考える。 多様な答えがあり得るので、自由に討論させたい。 ⑦詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」１〕

1

【江雪】
この詩における、自然と人間に対する厳しい認識について考えさせる。

展開

【江雪】
① 詩の黙読。その後、範読を聞く。
② ① 一斉読み。その後、指名によって音読する。
③ ② 詩の書き下し文を完成させる。**知技**
④ ③ 正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。その際、第三句の表現効果に注意する。
⑤ ④ 作者と、この詩の成立の背景について理解する。
指導者は簡潔に説明する。
⑥ ⑤ 対句表現について理解する。
絶句形式には対句は必要ではないが、この詩では厳しい自然の情景を重厚に描くために用いられていることを理解させる。
⑦ ⑥ 第四句を中心に、作者が雪景色から感じたものを考える。
⑧ ⑦ 詩形・押韻について確認する。**【「学習のポイント」1】**

まとめ

① 【四季】の詩について、まとめの学習活動を行う。**思判表** **主態** **【「言語活動」1】**
ア…季節の景物と心情の関わりについて、理解する。
四首の詩について、その詩の中で象徴的な景物の表現を抜き出し、その表現が呼び起こす心情や表現相互の関係について説明する。
イ…複数の心情によって詩が構成される場合があることを、理解する。
詩の中心となる心情と、それとは異なるものの、詩の世界を構成するには不可欠の心情に注意させる。

○ テストを実施する。
○ 語句・句形問題を実施する。

1

【絶句―送別】
【送元二使安西】
この詩における美意識と、友人への態度について考えさせる。

展開

【送元二使安西】
① 詩の黙読。その後、範読を聞く。その際、句中の切れ目に注意する。「陽関三畳」といわれる名編なので、気をつけて範読する。それにならって、第三句を三回繰り返す等してもよい。
② 一斉読み。その後、指名によって音読する。
③ 詩の書き下し文を完成させる。**知技**
④ 正確に現代語訳する。〔**「言葉と表現」1**〕
⑤ 第一句から想起される情景を理解する。
⑥ 第二句の表現の特徴を理解する。
⑦ 表現の巧みさのみでなく、柳の若葉の揺れるさまを捉える美意識の高さにも注目させる。
前半に対して、後半がどのような特徴を持っているかを理解する。〔**学習のポイント」1**〕
⑧ 前半の叙景、後半の語りかけ、その二つを対比して明示する。
詩中の地名を地図上で確認し、作者の思いを理解する。
⑨ 遣唐使の旅の困難さ、シルク・ロードの旅の危険さ等、例として出すとよい。
詩形・押韻について確認する。

1	【勧酒】 この詩の、友人に対する細やかな思いを理解させる。	
1 2	【絶句―望郷】 【涼州詞】 七言絶句の特徴を理解し、正確に音読できるようにさせる。 この詩における流麗な美しさと、兵士の思いを理解させる。	

展開

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	【勧酒】 詩の黙読。その後、範読を聞く。 一斉読み。その後、指名によって音読する。 詩の書き下し文を完成させる。**知技** 重要語句、難解な表現については、あらかじめプリントを作っておき、そこで指摘されている語を漢和辞典で引かせる等工夫する。 正確に現代語訳する。〔**「言葉と表現」1**〕 華やかな感じの言葉、悲しい感じの言葉を指摘し、詩の流れを考える。 前半の華やかさと後半の悲哀感への移行を、板書等を利用して明示する。 友人に対する思いがどう表現されているか考える。〔**「学習のポイント」1**〕 「不須辞」という無理強いと、「足」別離」という悲哀感との対応を、板書等によって明示する。 全員に訳詩を作らせ、数名が発表する。 現代語訳でもよい。参考としてあげている井伏鱒二の訳を紹介するとよい。 詩形・押韻について確認する。	
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	【涼州詞】 詩の黙読。その後、範読を聞く。 一斉読み。その後、指名によって音読する。 詩の書き下し文を完成させる。**知技** 正確に現代語訳する。〔**「言葉と表現」1**〕 正確な現代語訳をするために、「莫レ笑」「幾人回」に注意させる。 第一・二句について、その華麗なイメージを理解する。〔**「学習のポイント」1**〕 全体にエキゾチックで華麗な名詞が並んでいることに注意させる。 第三・四句について、転調の様子を理解する。〔**「学習のポイント」1**〕 詩形・押韻について確認する。	

1	
【静夜思】 この詩の、月を見て望郷の思いを書きたてられた心情を理解させる。	
展開	**まとめ**
①詩の黙読。その後、範読を聞く。 ②一斉読み。その後、指名によって音読する。 ③詩の書き下し文を完成させる。**知技** ④正確に現代語訳する。 ⑤作者のいる具体的な状況を想像してみる。 望郷の詩であることを理解させる。 ⑥詩形・押韻について確認する。**〔「学習のポイント」1〕**	① 〔送別〕〔望郷〕の詩について、まとめの学習活動を行う。**思判表　主態**〔「言語活動」1〕 **ア**送別の二首に見える「君」が誰を指すかに注意する。 **イ**「涼州詞」の「君」が誰を指すか、詩の読者を想定しながら、考える。 **ウ**「静夜思」における月光がどのような働きをしているかを考える。 **ア**どちらの「君」もこれから旅立つ友人を指していることを理解させる。**イ**「君」は、この詩が誰に向けて書かれているかによって解釈が異なることを理解させる。**ウ**漢詩においては、古くから、月が離れた土地にいる人同士の思いをつなぐものとして描かれてきたことを理解させる。
	○テストを実施する。 ○語句・句形問題を実施する。

1	【律詩】 【春望】 この詩における、深い家族愛と社会意識を理解し、漢詩の表現力の高さを理解させる。	
		展開
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	詩の黙読。その後、範読を聞く。 一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。 詩の書き下し文を完成させる。**知技** 正確に現代語訳する。 作者と、この詩の成立の背景について説明する。 指導者は簡潔に説明する。 対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴、用語の特徴を指摘する。**〔「言葉と表現」1〕** 対句について、必要な説明を行う。 全体の展開を理解し、作者の家族への思い、社会・国家への思いを理解する。 家族への思いを述べた表現、社会への思いを述べた表現を、それぞれノートにまとめさせる。 作品の優れているところ、日本文学への影響などを調べ、討論する。**知技** 詩形・押韻について確認する。	

1		
【八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九】 この詩における、友人に対する心情の深さを理解させる。	**展開**	**まとめ**
	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧	①
	【八月十五日夜、禁中独直、対月憶元九】 詩の黙読。その後、範読を聞く。 一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。 詩の書き下し文を完成させる。**知技** 正確に現代語訳する。 「三五夜」という掛け算の表現、「新月」「故人」など現代語と違う用法の語などに注意させる。 作者と、この詩の成立の背景について説明する。 指導者は簡潔に説明する。 対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴を理解する。**〔「言葉と表現」1〕** きわめて緊密な対句表現で、それぞれが特色を持ったものであることを確認させる。 全体の流れから、作者の友情の深さがどのように表現されているかを理解する。 共に月を見ているに違いないという思いと、友の身に対する不安とが交錯していることに注意させる。 詩形・押韻・対句について確認する。	［律詩］の詩について、まとめの学習活動を行う。**知技　思判表　主態**　**〔「言語活動」1〕** **ア**「一春望」を書いた当時の杜甫の境遇と時代背景を調べる。 **イ**「八月十五日夜…」を書いた当時の白居易と元稹の境遇と時代背景を調べる。 詩と時代の関わりについて、杜甫と白居易の共通点と相違点について考える。 **ア**八世紀の中国の状況と、安禄山の乱とこの詩の関係に注意させる。**イ**白居易と元稹は科挙による新興官僚として官位を上昇させつつ、権臣や宦官との軋轢もあり、それが元稹の左遷を招いたことに注意させる。**ウ**杜甫と白居易の官僚としてのありかたの違いをまず把握させ、八世紀から九世紀にかけての時代の変化にも気づかせる。
		○ ○
		テストを実施する。 語句・句形問題を実施する。

【日本漢詩】 【富士山】 日本漢詩文の歴史を理解させる。 この詩の、比喩表現による情景描写の特徴を考察させる。	1 2	
展開		
【富士山】 日本漢詩文の歴史を理解する。知技 日本漢詩文を通史的に確認する。中国との関係も補足説明する。 詩の黙読。その後、範読を聞く。 一斉読み。その後、指名によって音読する。 詩の書き下し文を完成させる。知技 正確に現代語訳する。 富士山の情景を、比喩を使ってどのように表現しているか考察する。〔「学習のポイント」1、「言語活動」1〕 江戸時代の漢詩人が抱いた富士山のイメージと、現代において我々が抱くイメージとの相違点と共通点が的確に把握できるように、指導者が補足説明をする。 詩形・押韻について確認する。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	

1	展開	まとめ
【烏児塞宮】 この詩の、漢詩で、西洋の建築物を表現することによって生じている特徴を考察させる。	【烏児塞宮】 ①　作詩の背景について確認する。 ②　「作者」「出典」等を参照する。 ③　その後、範読を聞く。 ④　詩の黙読。その後、指名によって音読する。 ⑤　一斉読み。その後、指名によって音読する。 ⑥　詩の書き下し文を完成させる。知技 ⑦　正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。 「鳳輦」「淑姫」「錦帳」が漢文では何を連想させるか、考える。〔「学習のポイント」1〕 ⑧　漢和辞典を使って語彙を調べさせる。 ⑨　西洋的な要素がこの詩に見られるか、見られるとすればそれによってどのような効果があるか、考える。〔「言語活動」1〕 詩の主題となる感慨（感慨）はどのようなものか、考える。〔「言葉と表現」1〕 懐古や詠史を主題とする文学作品を思い起こさせる。 詩形・押韻について確認する。	①　〔日本漢詩〕の詩について、まとめの学習活動を行う。知技 思判表 主態〔「言語活動」1〕 ア漢詩の表現を日本にふさわしいものにする工夫について考える。 イ漢詩の表現を西洋にふさわしいものにする工夫について考える。 ウ同時に、漢詩としての普遍的な表現がどちらの詩にも含まれていることを確認する。 ○　テストを実施する。 ○　語句・句形問題を実施する。

【雑説】
諷喩で書かれている点に注意して内容を理解させる。
作者の主張を考察させる。

1
2

導入

① 中国の散文の特徴について理解する。
「雑説」は、唐代の古文復興運動を代表する優れた散文であることを理解させる。

展開

① 韓愈について理解する。
「作者」「出典」を参照する。
② 「雑説」の構成と主張を理解する。
世の中の現状に対する作者の主張・憤懣・感慨が述べられていることを理解させる。
③ 範読を聞いて、音読する。
正確な現代語訳をもとに、要旨をノートにまとめ発表する。
④ 予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。
⑤ 否定形・限定形・受身形・反語形・詠嘆形・疑問形を理解する。 知技
⑥ 「天下無馬。」の「馬」はどのような馬のことか考える。
文脈から考えさせ、一、二名に指名する。
⑦ 「伯楽」「千里馬」「奴隷人」「常馬」は、それぞれ何を例えているかを考える。
諷喩文であることに注意して全体を読解し直し、それぞれ何に例えているかを考えさせる。
⑧ 本文の構成を図にまとめる。 思判表 「学習のポイント」1

まとめ

① 作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか話し合う。 思判表 主態 「言語活動」1
誰を、何を批判しようとしたのかを考えさせる。導入で触れた彼の境遇などをあわせて考えるとよい。
○ テストを実施する。
○ 語句・句形問題を実施する。

【春夜宴桃李園序】 対句の妙を味わい、理解させる。 本文に現れた李白の人生観を理解させる。 『おくのほそ道』の冒頭部分を比較読みさせる。	1 2 3	
展開		
範読に従って繰り返し音読する。 指導者の範読、指名読みを繰り返して、読めない漢字などを確認させる。また、音読によって文章のリズムを味わわせる。	①	
一文ずつ解釈していく。知技 予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。	②	
四字句・六字句を摘出させ、その布置配列を検討し、それがどのような表現効果を見せているかを考える。 思判表〔学習のポイント1〕	③	
四六体の修辞について、その斉整美や音調美を、他の例をあげて補説する。 「浮生若夢」と断じた李白は、その悲しみを払拭するため、どのように対処しようとするのかを考える。 快楽として、景色の美・肉親との歓談・美酒等と共に、詩作が挙げられていることに注意させる。	④	
まとめ		
松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表する。知技 思判表 主態〔言語活動1〕	①	
○テストを実施する。 ○語句・句形問題を実施する。	○ ○	

1 2 3 **【名月――八月の詩】** 漢詩文の表現の特色について学び、漢詩文に親しむ。 月に関する文学作品を調べる。 漢詩（漢文）と和歌（古文）における、月の描かれ方や作品の背景について、共通点と相違点を考える。		
導入	**展開**	**まとめ**
①	① 月を見て遠く離れた人や場所を思う文学作品にはどのようなものがあるか、調べる。 知技 思判表 〔「学習のポイント」1〕 百人一首から月の出てくる歌を取り上げさせて、この問いに当てはまるかどうかを考えさせてもよい。漢詩や和歌などの伝統的な文学作品に限定せず、生徒に馴染みのあるラノベやアニメ、ゲーム、映画、ドラマのシーンなどを広く自由に紹介させてもよい。 ② 漢詩（漢文）と和歌（古文）で、月の描かれ方や作品の背景にどのような共通点と相違点があるか、五六ページ「単元の言語活動3」も参考にして、比較する。 知技 思判表 主態 〔「学習のポイント」2〕 月に対する見方、作者の社会生活、両国の地理感覚と自然環境の違いなどに目を向けさせる。	○ テストを実施する。
作品全体を通読する。		

【単元の言語活動４　漢詩漢文の表現の特徴をつかむ】

1　漢詩文の表現の特色についてまとめさせる。
2　漢詩文の日本語・日本文学への影響を考察させる。

導入	展開	まとめ
❶	❶	❶
ワークシートと振り返りシートを配布する。 活動の目的を説明する。	漢詩らしい表現の特徴について考える。知技 ①この単元の漢詩から、漢詩らしいと感じられる句もしく聯を一つ選ぶ。 ②選ばれた句（聯）について、なぜ漢詩らしいと感じられるのか、この教科書に掲載されている和歌と比較しながら発表し、話し合う。	漢詩や漢文の表現方法が日本語・日本文学にどのように生かされているか、あるいはどのように異なっているか、この教科書掲載の漢詩の和訳（一四八ページ・一五〇ページ）も参考にして、まとめて発表する。知技　思判表 主態 ①生かされている点と異なっている点について、一つずつ例をあげる。 ②あげられた例を分類して、漢詩や漢文の表現の特徴について、図表にしてまとめ、発表する。
	❷	○
	漢文特有の言い回しや比喩の特徴について考える。知技 ①この単元の漢文から、漢文らしいと思われる言い回しや比喩を一つ選ぶ。 ②選ばれた言い回しや比喩の中に現代日本語の実用文や論説文に取り込まれているものがあるか、話し合う。	振り返りシートに記入する。

参考文献

❀ 教師用

▽注釈書

「唐詩選評釈」森槐南　冨山房　昭十三
「唐詩選」（岩波文庫）前野直彬　昭三十七
「唐詩選」（新釈漢文大系）目加田誠　明治書院　昭四十
「唐詩選」（中国古典選）高木正一　朝日新聞社　昭四十
「杜牧」（漢詩大系）市野沢寅雄　集英社　昭四十
「唐詩三百首」目加田誠　平凡社　昭四十六
「三体詩」一～四（中国古典選29～32）村上哲見　朝日新聞社　昭五十三
「唐詩三百首詳解」田部井文雄　大修館　昭六十三
「唐詩の風景」（講談社学術文庫）植木久行　平十一
「唐詩物語－名詩誕生の虚と実と」植木久行　大修館書店　平十四

○李白

「唐詩選　新版」（新書漢文大系）目加田誠　明治書院　平十四

○李白

「李太白詩集」（続国訳漢文大成）久保天随　国民文庫刊行会　昭三
「李白」（漢詩大系）青木正児　集英社　昭四十
「李白詩選」（岩波文庫）松浦友久　平九
「李白と杜甫の事典」向嶋成美　大修館　令元

○杜甫

「杜詩」（岩波文庫）鈴木虎雄　昭和三十八
「杜甫」（漢詩大系）目加田誠　集英社　昭四十
「杜甫全詩訳注」（講談社学術文庫）下定雅弘・松原朗　平二八

○白居易

「白楽天」（漢詩大系）田中克己　集英社　昭三十九
「白氏文集」（新釈漢文大系）岡村繁　明治書院　昭六十三
「白楽天詩選」（岩波文庫）川合康三　平二三

▽入門書

「中国の名詩鑑賞４　初唐」田森襄　明治書院　昭五十
「中国の名詩鑑賞６　中唐」松浦友久・田口暢穂　明治書院　昭五十一
「中国の名詩鑑賞７　晩唐」小川昭一　明治書院　昭五十一
「中国の名詩鑑賞５　盛唐」中島敏夫　明治書院　昭五十三
「漢詩入門はじめのはじめ」安藤信廣　東京美術　平元
「わたしの唐詩選」（文春文庫）中野孝次　平十五
「唐詩概説」（岩波文庫）小川環樹　平十七
「漢詩百首－日本語を豊かに」（中公新書）高橋睦郎　平十九
「詳講　漢詩入門」（ちくま学芸文庫）佐藤保　令元

▽日本漢詩

「五山文学集　江戸漢詩集」（日本古典文学大系）山岸徳平　岩波書店　昭四十一
「日本漢詩鑑賞辞典」（角川小辞典）猪口篤志　角川書店　昭五十五
「詩集日本漢詩　一」富士川英郎・松下忠・佐野正巳　汲古書院　昭六十二
「江戸詩人選集　一」上野洋三　岩波書店　平三

「海外見聞集」（新日本古典文学大系明治編）松田清　他　岩波書店　平二十一
「幕末維新パリ見聞記」（岩波文庫）井田進也校注　平二十一

※生徒用

「新唐詩選」（岩波新書）吉川幸次郎・三好達治　昭二七
「漢詩入門」（岩波ジュニア新書）一海知義　平十
「漢詩ー美の在りか」（岩波新書）松浦友久　平十四
「漢詩への招待」（文春文庫）石川忠久　平十七
「唐詩選ビギナーズクラシック」（角川ソフィア文庫ービギナーズ・クラシックス中国の古典）　角川学芸出版　深沢一幸　平二十二
「日本漢詩への招待」鈴木健一　東京堂出版　平二十五
「漢詩の扉」（角川選書）齋藤希史　平二十六

【絶句ー四季】

春暁

孟浩然

作者

孟浩然

六八九年〜七四〇年。盛唐の詩人。字も浩然。襄州襄陽の人。若い頃は何度か科挙に応じたが全て落第し、諸国を放浪して帰郷、襄陽郊外の鹿門山に隠棲した。四十歳のとき、都へ出て名士の家に出入りし、張九齢・王維らと交わった。この頃、王維の仲介によって玄宗皇帝にまみえたが、玄宗に献上した詩の言葉が不興を買い、仕官することができなかったという。その後、また郷里に戻り、張九齢が荊州刺史に左遷されると、その従事となるが、ほどなくして辞任した。江南を放浪して再び帰郷して隠棲するが、背中のできものがもとで死んだという。自然詩を得意とし、東晋の陶淵明の風をついで、自然の中での暮らしを明朗に描いている。王維らと共に「王孟韋柳」と称され、李白・王昌齢らとも交わりがあった。文集に「孟襄陽集」がある。

出典

唐詩選

七巻。明の李攀竜が編集したとされる唐詩の選集。唐詩四百六十五首を詩体別に編集したもの。李攀竜（一五一四年〜一五七〇年）は、字は于鱗、号は滄溟。山東省済南の人。明代中期以降の文壇の主流となった「嘉靖七子」（「後七子」とも呼ぶ）の中心人物。詩の価値を決定するのは「格調」（詩文の風格と調子。詩形・リズム・修辞などを通じて、詩の外に現れるおもむき）であるとし、格調の最も高いものとして盛唐の詩、ことに杜甫・李白を評価し、「文は秦漢、詩は盛唐」という主張をした。その主張に沿って、盛唐を中心とした唐詩の選集「唐詩選」が刊行された。「唐詩選」は、五言古詩十四首、七言古詩三十二首、五言律詩六十七首、五言排律四十首、七言律詩七十三首、五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首、計四百六十五首からなる唐詩の選集である。作家の数は、合わせて百二十八人。最も多く作品を選ばれているのは杜甫で、五十一首。以下、李白三十三首、王維三十一首、岑参二十八首と、いずれも盛唐の詩人である。中・晩唐詩は格調が低いとして極端に冷遇され、白居易・杜牧にいたっては一首もとられていない。選ばれた作品は、雄渾にして壮大なものが多く、明・清代の中国や江戸時代の日本に大きな影響力を持った。ただし、「唐詩選」は偽書で、李攀竜が歴代の詩を選んで編集した「古今詩刪」から唐代の一部分を抜き出して出版したものである、等という説もある。そうであるとしても編者は同じであり、李攀竜の説に沿った、手頃で優れた唐詩の選集として評価され、現在も愛読されている。「春暁」は巻六所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐詩選」（目加田誠著）によった。

主題

春の心地よい眠りからふと目覚めた私は、昨夜の雨風を思い出し、散った花のことを思いやる。

構成

第一（起）・二（承）句…深い眠りから目覚めると、鳥の声が聞こえてくる。（現在・事実）
第三（転）句…昨夜は雨風が強かった（ことを思い出す）。（過去・回想）
第四（結）句…花はどれほど散ったのか（と心配する）。（現在・心情）
〈詩形・押韻〉 詩形―五言絶句。　押韻―「暁」（第一句）・「鳥」（第二句）・「少」（第四句）。上声十七篠韻。（ただし、「暁」は、漢音ケウ。ゲウは、慣用音。）

訓読と現代語訳

①春眠　暁を覚えず
②処処　啼鳥を聞く
③夜来　風雨の声
④花落つること　知る多少

① 春の眠りは心地よく、夜が明けたことさえ気づかなかった。
② ふと目覚めると、あちらこちらで鳥の鳴き声が聞こえてくる。
③ 思えば、昨夜は雨風の音が強かった。
④ 花は、いったいどれほど散ってしまったことだろうか。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 漢詩の決まりについて、理解する。

❷ 唐代の文化について知っていることを発表する。その後、指導者の説明を聞く。

❶P一五六～一五七「漢詩の手引き」を利用する。小・中学校で学んだ初歩的知識を整理する。詩形・押韻程度にとどめ、声調や平仄（ひょうそく）については、専門的になるので、指摘するのみとしたほうがよい。

❷小・中学校で学習した知識を発表させる等して、唐詩学習の動機付けとする。指導者は、唐詩が、漢詩の全盛時代・黄金時代といわれるほど、盛んであったことを説明する。

唐王朝が南北朝の分裂時代を終わらせ、当時における世界最大級の大帝国を築いたこと、シルク・ロードを中心とする国際国家だったことを示す。その大帝国を治めるため進んだ官僚機構を作り、官僚になるための試験「科挙」の制度が整えられ、その試験科目に詩作が課せられ、唐詩の隆盛を招いたことを理解する。

唐代の文化を学ぶため、日本は「遣唐使」を派遣したこと、奈良時代の文化は唐文化の圧倒的影響下にあったこと等を指摘する。

■展開

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。知技(1)イ・ウ〔「言葉と表現」1〕
❺詩の場面展開を整理する。
❻優れた表現を指摘し、第四句を中心に作者の心情を考える。
❼詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶「啼鳥（ていちょう）」の歴史的仮名遣いに注意させる。詩の教材であるから、ことに音の持つ意味が大きいので、範読は丁寧に、ゆっくりと読むようにする。

❷きちんと声を出して丁寧に読むよう指示する。

❸書き下し文にさせ、二、三名の生徒に板書をさせる。

【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。以下、全ての詩に共通する。

❹「処処」「夜来」など、読み方と意味を確認させる。「多少」は疑問形であることに注意させ、一応の訳を作らせる。漢和辞典で語意を確かめてから訳すよう指導する。前半二句と後半二句に分けて、指名した生徒に訳を発表させる。誤りを正して訳を完成させる。

【評価】同音異義語の意味の違いを調べ、現代語訳に反映できているか、確認する。

❺「構成」参照。

❻生徒の側から、優れた表現と考えられるところを指摘させる。指導者の側から示してもよい。作者の自然への愛情、自然の中で生きる自由な心情を理解する。

❼詩形・押韻については、最初の作品であり、生徒も慣れていないので、質問して答えさせるのが難しそうであれば、指導者が説明してしまってもよい。

発問例

●一四八ページ

問　**「不レ覚レ暁」（第一句）とは具体的にどういうことか。**

答　夜が明けたことにも気がつかない。

補　「覚」の意味を正確に理解させる。そのため、漢和辞典を引いて調べるよう指示してもよい。「覚」を「おぼユ」と訓読するために、「おぼえる・記憶する」などと取り違えることがある。「覚」が、「気づく・感じる」意であることを理解させ、なおかつ、訓読と訳との間には距離があることを指摘しておく。

問　**「処処聞二啼鳥一」（第二句）について、**

「処処」とはどのような意味か。

[2] [1]

[中][A]「聞二啼鳥一」とあるが、作者はどこで聞いているか。

[易][B]「聞二啼鳥一」とあるが、作者はどこで聞いているのか、適切なものを次の中から選べ。

(ア)朝の庭で
(イ)夜の床の中で
(ウ)朝の床の中で
(エ)朝の書斎で読書をしながら

答　[1]あちらこちらで
[2][A]朝の床の中で

問　**第二句（承句）で、作者はどのような朝の情景を想像しているか。**

[B](ウ)

答　ふと目覚めると鳥のさえずりがあちらこちらで聞こえ、もう夜が明けていることを感知している。同時に、平和な鳥の鳴き声から、穏やかに晴れ上がっていることを想像している。

問　**「風雨声」（第三句）を聞いて、作者はどのようなことを心配しているのか。**

答　花はどれほど散っただろうか、ということ。

問　**「花落（ルコト）知多少」（第四句）とはどのような意味か。**

答　花はどれほど散っただろうか。

問　**この詩に歌われた心情として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)春のけだるさを厭う情。
(イ)落花を楽しむ情。
(ウ)春の鳥を悲しむ情。
(エ)落花を惜しむ情。

答　(エ)

問　**作者の自然への愛情が最もにじみ出ているのは、どの部分か。**

答　後半の二句。特に第四句（結句）。

補　鳥の声を聞いて、穏やかな朝の訪れを感じた作者は、しかし逆に昨夜の風雨のことを思い出し、花がたくさん散ってしまったの

語句の研究

●一四八ページ

4春眠　春の眠り。春の心地よい眠り。

4不レ覚レ暁　夜が明けたのにも気がつかない。「覚」は、感じる、気づく。「暁」は、明け方。夜明け。

5処処　あちらこちらで。

5聞　きこえる。（無意識のうちに）きこえてくる。「聴」が、（意識して）きく、の意であるのに対して、「聞」は、（意識していないのに）きこえる意である。

5啼鳥　鳥の鳴き声。また、鳴いている鳥。ここでは前者。「啼」は、声を張り上げて鳴く意。

6夜来　昨夜。「来」は、ここでは時間を表す語に付き、「おおよそその頃」の意を表す助字。また「来」は、ある時点から一定の時間がたつ意とも考えられる。その場合、「夜来」は、昨夜から（今朝まで）の意。

6風雨声　雨風の音。「声」は、音。

7花落知多少　花は、いったいどれほど散ってしまったことだろうか。さぞ多いことだろう。「多少」は、「いったいどれほど…だろうか」の意を表す疑問詞。疑問詞の上に

ではないかと心配する。そこに自然への思いやりがにじみ出ている。同時に、その自然の中で毎日を生きる自分の日々の暮らしを、肯定的に捉え返している。自然に抱かれる暮らし方に、充実感を感じている。

問 ◉ **作者は、この詩をどのような状態でいるときに詠んだのか。**

答 春の明け方（春暁）の心地よい眠り（春眠）に夜が明けたのも気がつかない状態でいるとき。

補 「詠んだのか」という問いであるが、「その感興を得たのはいつか」と置き換えて考える点に留意する。「詩を詠む」という行為が、即座に文字に書き付けるという単純な過程ではなく、素材に出会い詩心が刺激される点から発するものであることを考えるのもよい。具体的には「寝床にいる状態」といった答えも可能だが、作品表現の読解に即して考えることが鑑賞に生かされることも意識させたい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

補 「韻」とは、「ひびき」の意であり、ひびきの同じ文字を決まった位置に置くことを「押韻」（韻を押す）という。「韻」は「脚韻」ともいい、「押韻」は、別に「韻を踏む」ともいう。以上のような事項を簡単に整理してもよい。

鑑賞

孟浩然は、生涯のほとんどを隠棲して過ごした。彼はその生涯を通じて、官僚として出世することだけが価値のある生き方ではなく、自然の中で自由に生きる生き方にも深い意味があることを詩中に描き出した。「春暁」詩でも「春眠不レ覚レ暁ヲ」と述べているが、それは隠棲する者の自由さと喜びを表現した言葉でもある。古代の朝廷は、夜明けとともに開かれた。そのため官僚は、夜明け前の暗い時間に家を出て出勤しなければならなかった。初唐の宰相だった上官儀に「入レ朝洛堤歩レ月ニ」という詩があり、宰相でさえ月の光を浴びながら朝廷に赴いたことが分かる。だが、隠棲して生きる者には、そのような束縛はなく、自分の時間を自由に使うこと、心地よい春の眠りを楽しむことができた。その心のゆとりから、花が散ったことに心を向けることもできた。「春暁」詩は、そのような生き方の豊かさを描いた詩でもある。

なお、「知多少」については、「きっと多いであろう」とする説もある。「どれほどだろうか」と解釈する場合でも、その多さを想定しての疑問なので、詩意は大きく変わらないが、「江南春」にも「多少」の語があり、そこでは「多くの」の意味であることには注意が必要である。「校注唐詩解釈辞典」（松浦友久、大修館書店、昭六二）参照。

「知」が来た場合、疑問の意味を明示して、「いったい…か」という気持ちを表す。その場合、訓読では「知レ…」（知んぬ…）とすることが多いが、教科書では簡潔と平易を重んじて「知レ…」（知る…）とした。「花」は桃の花と思われる。

参考「春あけぼの」　作者は土岐善麿。明治十八（一八八五）年～昭和五十五（一九八〇）年。日本の歌人・国語学者。本教科書は、『鶯の卵　新訳中国詩選』（筑摩叢書、一九八五年）によった。

江南春

杜牧

作者

杜牧

八〇三年～八五三年。晩唐の詩人。字は牧之。号は樊川。京兆万年（陝西省西安市）の人。祖父の杜佑は、徳宗・順宗・憲宗の三代に仕えた宰相で、「通典」の編者としても知られている。大和二（八二八）年、進士に及第し、弘文館校書郎などに任ぜられた。江西観察使沈伝師に招かれ、その従事・試大理評事となって洪州（江西省南昌市）などに赴いた。大和七（八三三）年、淮南節度使牛僧孺の招きによって、節度推官・監察御史裏行として揚州（江蘇省揚州市）に赴任した。大和九（八三五）年、監察御史に任ぜられ洛陽に分司（唐は長安・洛陽の二首都体制だったので、中央官は両首都に分属させられた）したが、弟の顗の病気のため辞職。再び地方官に出た後、開成四（八三九）年、左補闕・史館修撰として都に戻り、また黄州（湖北省）・池州（安徽省）・睦州（浙江省）の刺史を歴任した。大中二（八四八）年、司勲員外郎・史館修撰となり、吏部員外郎に転じたが、弟の病気のために生活が苦しく、収入の多い湖州（浙江省）刺史に転出。一年後には、考功郎中・知制誥として都に戻り、大中六（八五二）年、中書舎人に移って没した。剛直な性格で、国家の大事を論じてたびたび上奏した。反面、美男で歌舞を愛し、風流才子として有名だった。詩においては、豪邁で艶麗という矛盾する両面を持ちつつ、七言絶句に優れ、清新・華麗な作を多く残した。盛唐の杜甫を「老杜」と呼ぶのに対して「小杜」と呼ばれ、李商隠と共に「李杜」と並称される。文集に「樊川集」がある。

出典

三体詩

六巻。南宋の周弼の編。唐の詩人百六十七人の近体詩を、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三体に分類して収めている。中晩唐を重視して初唐はとらず、盛唐も李白・杜甫をとっていない。元の釈円至が初めて注をほどこし、「箋注唐賢絶句三体詩法」二十巻を作ったが、のち清の高士奇が補注を作った。我が国には南北朝時代に、中巌が入唐して伝えたといわれる。その後、禅僧の間で盛行し、注が多く作られた。江戸時代、一部の学者がこれを排斥したが、愛読者が多く、現在に至っている。「江南春」は巻一所収。本教科書は、冨山房「漢文大系　箋解古文真宝後集・増註三体詩・箋解唐詩選」によった。

主題

広々とした江南の春景色の中に風が吹き過ぎてゆくとき、かつてこの地に栄えた南朝の寺々の雨に煙る姿が思い浮かぶ。

構成

第一（起）・第二（承）句…晴天の景色。色彩豊かで広々とした光景を、鮮明に描いている。
第三（転）・第四（結）句…雨中の景色。色彩のない墨絵のような世界を、幻想的に描いている。
〈詩形・押韻〉 詩形―七言絶句。 押韻―「紅」（第一句）、「風」（第二句）、「中」（第四句）。上平声一・東韻。

訓読と現代語訳

①千里鶯啼きて　緑　紅に映ず
②水村山郭　酒旗の風
③南朝四百　八十寺
④多少の楼台　煙雨の中

① 見渡す限りの春景色の中に鶯が鳴きかわし、木々の緑と花々の紅が、鮮やかに照り映える。
② 水辺の村、山辺の町、酒家の旗が風に揺れる。
③ 江南の地には、滅び去った南朝の四百八十もの寺々があったが、
④ そのたくさんの高楼が、煙る霧雨の中に立ち並ぶ。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 前半の叙景の美しさについて理解する。
❻ 後半の転調の大胆さについて理解し、情景について討論する。
❼ 詩形・押韻について確認する。〔**学習のポイント**」1〕

❶最初の七言絶句である。七言絶句は流麗な調子を持ち、原詩の中国音はリズミカルだが、訓読をしてもその調子のよさが伝わる。ことにこの詩は音読みの部分が多く、原音の調子のよさが感じ取れるので、一層訓読を重視したい。

❷その際、各句の大きな切れ目が次のようであることに注意させる。
（起句）「千里／鶯啼／緑映レ紅」、（承句）「水村／山郭／酒旗風」
（転句）「南朝／四百八十寺」、（結句）「多少楼台／煙雨中」

❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。

❹「千里」「啼」「映」「楼台」などの語を指定して漢和辞典を引かせ、各自に現代語訳をノートに記させる。

❺・視界の広さに気付かせる。―「千里」「水村」「山郭」等の語を通じて、広々とした空間を見ていることに注意する。
・色彩の豊かさを理解する。―「緑映レ紅」という表現から、光に満ちた空間であることを理解する。
・空気のさわやかさに気付かせる。―第一句の光の感覚から、空気の透明さは十分に伝わるが、第二句の「酒旗風」という「風」の吹き渡る情景によって、そのさわやかさがより強く伝わってくる。

❻・過去の時間への追憶が現れてくることに注意する。―「南朝」は三百年にわたって江南の地に栄えて滅んだ王朝であり、その昔の栄光と滅亡への追懐が突然に浮かんでいることに注意する。
・雨中の景色になっていることに注意する。―「煙雨中」という表現から明らかであるが、後半が追懐と雨に特徴を持つ表現であることに注目させる。この雨中の景は、想像なのか現実なのか、生徒に討論させたい。

❼七言絶句形式は初出なので、同形式について確認する。

発問例

● 一四八ページ

問　前半二句の中から、視界の広さを表している語句を抜き出せ。

答　「千里」「水村」「山郭」など。

補　「緑映レ紅」なども指摘できよう。空間の広さのみでなく、空気の透明感、光の豊かさなども感じられる表現であることにも注意。

問　第二句の表現は、具体的にどのような情景か。

答　水辺の村や山辺の町など、あちこちに酒家の旗が風に揺れている。

補　右の答えは一例である。水辺の村、山辺の町を風が吹きぬけて、いま私のいる酒家の旗を揺らす等の解釈もあり得る。この句全体が「水村」「山郭」「酒旗風」という名詞の羅列なので、情景はさまざまに解し得る。多様な解釈を許容し得るところなので、生徒からさまざまな発言を期待できる。

問　後半二句の表現の特徴を挙げよ。

答　第三句―「南朝」という、過去に滅んだ王朝が突然出てきて、時間（過去）が詩の中に現れる。
第四句―「煙雨中」という言葉から、今まで晴天の表現だったのに、雨中の景に変わっている。またそれと合わせて、色彩を都とした宋・斉・梁・陳の四代の王朝をいう。広くは、その前の呉・東晋を加えた六代の王朝をいう。杜牧は、おそらく、呉以来の六代の王朝、いわゆる「六朝」を想起していたものと考えられる。「六朝」は、三世紀から六世紀末まで、建康を都として江南を支配した六つの王朝で、北方を支配した「北朝」に対して「南朝」とも呼ばれた。「北朝」が、黄河流域の中原を支配した異民族の王朝だったのに対し、「南朝」は中原を追われた漢民族の王朝で、文化的優越性を誇ったが、最後は北朝の隋によって滅ぼされた。事実、南朝は経済的、文化的には繁栄し、この時代の文学・芸術は、南朝の建康を中心としていたといえる。仏教信仰が広がり、各地に寺院が建立され、ことに首都建康とその周辺には壮麗な伽藍が甍を並べていた。「南朝」という語には、そうした栄華の輝きと、滅亡の悲哀の両方が感じられる。

10 四百八十寺　四百八十もの寺々。南朝の都とその周りには多くの寺院があったが、それをいっている。「四百八十」は、実数ではなく、数多いことを実感させるための表現。当時このように言う決まり文句があっ

語句の研究

● 一四八ページ

8 江南　長江下流の南岸一帯。

8 江南春　江南の春景色。江南の地の春の風景を詩題としたもの。詩題を「江南春絶句」としているテキストもある。

9 千里　千里四方の意。「千里」は、ここでは、長さ・距離ではない。広々とした空間をいう。見渡す限り。

9 緑映レ紅　木々の緑と花の紅の色が照り映えている。「緑」は、樹木の葉の緑色。「紅」は、桃などの春の花の紅色。「映」は、それぞれの色が光に輝き、互いに引き立て合うこと。

9 水村　水辺の村。

9 山郭　山辺の町。「郭」は、城壁の意。町を囲む二重の城壁の内側を「城」、外側を「郭」という。ただし、必ずしも厳密に区分して用いられるわけではなく、「城」も「郭」も、城壁の意で用いられることも多い。そこから、「郭」で、（城壁に囲まれた）町を指す。

9 酒旗　居酒屋の目印の旗。

10 南朝　江南の建康（現在の江蘇省南京市）

のない、水墨画のような世界になっている。

後半二句全体として、過去への追憶を込めた、幻想的な表現となっている。

問 **前半二句は晴れていて、後半二句は雨の景色となっているが、それをどう理解したらよいか。**

答 ①時間がたって雨が降ってきた、②晴れの景色と雨の景色を並列して描き、「江南春」という題名のイメージを両面から表現した、③前半二句の晴れた現在の景を描いているうちに、過去の南朝の美しい寺院の雨中の姿を幻想した等、答えはさまざまにあり得る。

杜牧が、晩唐の詩人として、リアリズムの作風から離れてしまっていることを考えると、③の答えが比較的によいと思われるが、正解を強制せず、むしろ生徒の自由な発言を積極的に引き出したい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

たとも考えられる。なお「四百八十寺」は「しひゃくはっしんじ」と読んでいる。「十」は「じゅう（ジフ）」と入声（仄声の一つで、最後に子音のつく、つまった音）で読むと、平仄（平らな音と仄いた音を秩序正しく配置する韻律上の規則）が合わなくなるので、「しん」という平声の音で読んだもの。

10 多少　ここでは「多くの・たくさんの」の意。「多少」は、「どれほどか」の意を示す疑問詞として用いられるのが普通の用法である。そこから、漠然と「多くの」の意を表す用法が生じた。

10 楼台　たかどの。二階建て以上の高い建物や見晴らし台。ここでは、仏寺の何層にもなった高い建物。塔や仏殿を指している。

10 煙雨　煙るように降る雨。霧雨。

鑑賞

この七言絶句については、その絵画的描写を支える句法にも注目しておきたい。起句は、まず「千里」という空間を設定し、そこに「鶯鳴」「緑映紅」のように鳥の鳴き声と春の植物の鮮やかさを聴覚と視覚の対比によって位置づけた後は、動詞をいっさい使わずに句を構成する。承句の「水村」と「山郭」の対比、そしていずれにも翻る「酒旗風」という描写は、全体として起句の自然物に対して土地に住む人々の営みを示す句となっている。形式的には対句ではないが、対偶の技法によって句が組み立てられていることには注意したい。

そのように立体的で鮮やかな前半に対して、転句と結句は二句貫かれて読まれることで、「南朝」の繁栄すべてが「煙雨中」に収斂する効果を生む。「煙雨」は、たとえば隋の煬帝の「望二江南一（江南を望む）」に「煙雨更相宜（煙雨更も相い宜し）」という句があるように、江南を象徴する情景でもあり、その意味で、実景としての「煙雨」であることと、おぼろげな過去を「煙雨」というヴェールに包まれたものと比喩することとは、二者択一的ではなく、むしろその重ね合わせが詩情を高めている。

ここには、江南の土地が晴雨を行き来しつつ春を過ごしていくことと、いつの時代でも変わらない自然や生活と栄枯盛衰の歴史とを詩人の視線が往復しながら旅をしていることが、並行して描かれているようである。したがって、前半と後半は、むしろ循環するものとして読むほうが、この詩がなぜ絵画的印象を与えるのか、理解しやすいのではないだろうか。

秋風引

劉　禹錫

作者

劉禹錫

七七二年～八四二年。中唐の詩人。字は夢得。中山（河北省定県）の人。一説に、彭城（江蘇省徐州市）の人。貞元九（七九三）年、柳宗元と共に進士に及第。監察御史になり、柳宗元と同じく王叔文の改革派に属した。積極的に政治改革に参加したが、順宗の永貞元（八〇五）年、反改革派のクーデターによって王叔文が失脚すると、連州（広東省連県）の刺史に左遷され、さらに朗州（湖南省常徳県）の司馬に貶された。のち連州の刺史に改められ、各地を転任し、文宗の太和二（八二八）年、主客郎中として都に戻る。中央と地方の官を歴任し、太子賓客・検校礼部尚書となって没した。死後、兵部尚書を追贈された。晩年には白居易と親しく交わり、唱和の詩も多く残されている。力強く気骨のある詩風で知られるが、静かで鋭敏な心情を表現した作も多い。白居易によって「詩豪」（詩の世界の豪傑）と称された。

出典

唐詩選

「春暁」の「出典」参照。「秋風引」は巻六所収。

主題

どこからか秋風が吹いてきたが、その寂しい風音を誰よりも先に聞きつけたのは、独りぼっちの旅人である私だった。孤独な境遇の中で季節の移ろいに敏感になった心を描く。

構成

第一（起）句…秋風が吹いてきた事実を提示する。
第二（承）句…具体的な情景を述べる。
第三（転）句…秋風が今朝から庭の木を鳴らしていたと、過去の事実に目を転じる。
第四（結）句…木に鳴る風音に最初に気づいたのは私だったことを述べる。
〈詩形・押韻〉　詩形―五言絶句。　押韻―「群」（第二句）・「聞」（第四句）。上平声十二・文韻。

訓読と現代語訳

①何れの処よりか　秋風　至る
②蕭蕭として　雁群を送る
③朝来　庭樹に入り
④孤客　最も先に聞く

① いったい　どこから、秋風は吹いてくるのか。
② 物寂しい音をたてて、雁の群れを送ってくる。
③ この秋風は　今朝がた庭の木に吹き入ってきたが、
④ 独りぼっちの旅人である私が、その音を　誰よりも先に聞きつけた。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。
❺「入二庭樹一」の主語について考える。
❻「孤客最先聞」の理由について考える。
❼詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶詩の教材であるから、ことに音の持つ意味が大きいので、範読は丁寧に、ゆっくりと読むようにする。
❷「秋風」「何（いづレノ）」「蕭蕭（せうせう）」など、歴史的仮名遣いに注意させる。また「朝来（てうらい）」「孤客（こかく）」など、漢和辞典を引いて、読み方と意味を確認させる。内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹「何処」は疑問形であることを指摘し、また「蕭蕭」が擬態語（擬音語）であることに注意させ、一応の訳を作らせる。漢和辞典を引いて語意を確かめてから訳すよう指導する。前半二句と後半二句に分けて、指名した生徒に訳を発表させる。誤りを正して訳を完成させる。
❺「発問例」に沿って意見を出させ、まとめる。
❻全体のまとめともなる部分なので、「発問例」に基づいて発問し、生徒の間で討論させ、まとめる。
❼押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一四九ページ

問 **「秋風」（1行目）を受ける動詞を詩中から三つ抜き出せ。**

答 至・送・入

問 **「蕭蕭送二雁群一」（第二句）というのは、具体的にどのような情景か。**

答 「（秋風が）もの寂しい音を立てて雁の群れを送ってゆく」ということだが、実際には、秋風に乗って雁の群れが渡ってゆく情景をいっている。

補 秋風は、北または北西の方角から吹いて来る。雁は、秋になるとその風に乗って、北から南へ渡ってゆく。それを、秋風が雁の群れを送ってゆくと捉えている。そこに詩人の感受性のみずみずしさと、風や雁という自然物への優しさが見えることに注意する。

問 **◉「入二庭樹一」（第三句）の主語は何か。**

補 **答** 秋風。

秋風が庭の樹木に吹き入って来て、寂しい葉音を立てたのである。秋風の吹いてきた様を、「入」という動詞で捉えていることに注意させたい。「揺」（揺ラス）や「当」（当タル）など別の動詞を用いることも不可能ではないが、それでは秋風の静かさ・かそけさを捉えきれない。誰も気づかぬうちに庭の木の中に「入」ってきて、葉ずれの音をさせる、その秋風のひそやかな吹き方が、みごとに捉えられている。

問 **「蕭蕭」（第二句）はどのような音の形容か、次の中から選べ。**

(ア)重苦しい音　(イ)寂しい音
(ウ)明るい音　(エ)軽快な音

答 (イ)

問 **なぜ「孤客」（第四句）が最も先に風の音を聞いたのか。**

答 予想される答えの例。①一人旅をしていて孤独だったために、前夜からよく眠れなかったから。②孤独だったために神経がとぎすまされ、かすかな風の音に最初に気づいたから。③一人きりであまりにも寂しいので、どんな音でも聞こうと聞き耳を立てていたから。

右のような例が考えられるが、自由に、想像も含めて、意見を述べさせたい。右のような範囲ならばいずれも正答といってよいが、②のような答えならば、他の意見も包括できよう。また、この詩を作者の実体験と結びつける必要はないが、王叔文・柳宗元らと政治改革を行おうとして失脚・追放され、各地を転々とした人生の体験を、ここで背景として紹介してもよい。

語句の研究

● 一四九ページ

1秋風引　秋風のうた。「引」は、「うた」の意。「引」とは、もともと楽府（漢代から歌われた民間歌曲）の題に用いられ、「行」「曲」「歌」「吟」などと同じように「うた」の意を表す。

2何処秋風至　どこから秋風は吹いて来るのか。「何処」は、場所を問う疑問詞。「どこから」「どこに」「どこまで」などの疑問の意を表す。訓読では「何レノ処ヨリカ」「何レノ処ニカ」などと、疑問の係助詞「カ」を付けて読むので、呼応する動詞の結びは連体形となる。

2蕭蕭　もの寂しい様子や音の形容。ここでは日本語の「さらさら」「ざわざわ」「ひゅうひゅう」などに当たる、風の音、または風が木の葉を鳴らす音を形容した擬音語。同じ漢字を二つ重ねて物事の状態を表す擬態語・擬音語を、「畳語」または「重言」という。

2雁群　雁の群れ。「雁」は、カモ科の大形の水鳥で、秋には北から南へ渡ってゆき、春には南から北に帰る。従ってここでの

問 **「孤客最先聞（モニク）」（第四句）について、**

1 「孤客」とは具体的には誰のことですか。

2 「孤客」と対応し、孤独感をいっそう強めているものは何か。

3 「最先聞（モニク）」のは何か。

4 「最先聞（モニク）」ことができたのはなぜか。

5 ここには「孤客」のどのような心情がうかがわれるか、次の中から一つ選べ。

(ア)郷愁　(イ)慕情　(ウ)旅愁　(エ)哀愁

答

1 作者

2 雁群

3 秋風の音（秋の訪れ）

4 孤独なわびしさから敏感になっていたから。

5 (ウ)

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

「雁群」は、おおよそ北から南へと飛んでいることになる。

3朝来 今朝がた。「来」は、漠然とある時点を指す。またある時点から物事が続いていることを示す。後者で解釈するならば「朝来」は「朝から」の意となる。

3入二庭樹一 庭の樹木に吹き入る。秋風が庭の木々に吹き入って葉ずれの音をさせたことをいう。

3孤客 独りぼっちの旅人。孤独な旅人である私。「客」は、旅人、旅客。「客」の音は、漢音では「カク」、呉音では「キャク」と読むが、旅人の意を表すときには漢音の「カク」を用いることが多い。

3聞 ききつける。（無意識のうちに）ききとる。意識してきく場合には「聴（チョウ）」（聴）を用い、意識せずにきく場合には「聞（ブン）」を用いる。「聴」は、日本語の「きく」に当たり、「聞」は、日本語の「きこゆ」「きこえる」に当たる。

鑑賞

「江南春」とは対照的に、この詩はすべての句に動詞があり、起句から転句までは最初に提示された「秋風」が主語となっていく。結句に至って「孤客」が「秋風」を聞くというように主述が逆転するが（「春暁」の主語が最初から知覚主体である作者であったことと比較してもよい）、主題を読み取るのは難しくない。

だが、結句で初めて転句までの情景を描写していたのが誰かが明らかにされ、「何処」という意外の思いが「孤客」と結びついていることが示されたり、「送」や「入」のような動詞の主語に「秋風」を置くことで、「孤客」が「秋風」によって喚起された思いを暗示したりなど、その表現の技巧は細密で精緻と言ってよい。

また、「今朝がた庭の木に」という具体的で身近な時間と場所が転句で描かれたことで、結句の「孤客」の焦点化が自然となされていることにも注意が必要であろう。それゆえ、「最先聞」という結びが、作者の孤独と憂愁を結晶のように表現することに成功しているのである。

江雪

柳 宗元

作者

柳宗元

七七三年～八一九年。中唐の詩人。字は子厚。自然描写に優れ、散文では古文復興を唱えた。河東（山西省永済県）の人。貞元九（七九三）年、劉禹錫らと共に進士に及第。秘書省校書郎、藍田県尉などを経て、貞元十九（八〇三）年、監察御史裏行に就任。皇太子李誦（後の順宗）のもとに政治改革を実現しようとしていた王叔文・王丕らの党派に参加した。貞元二十一（八〇五）年、順宗の即位とともに礼部員外郎に任ぜられたが、王叔文らの急進的改革は旧勢力の抵抗にあって挫折し、クーデターにより在位七か月で順宗は退位、憲宗が即位して永貞と改元されるや、王叔文らは処刑され、柳宗元は永州（湖南省零陵県）司馬に貶された。元和十（八一五）年、長安に召還されたが、あらためて柳州（広西壮族自治区柳州市）刺史に左遷され、同地で死去した。柳州に流されるときには、朋友の劉禹錫が、老母がいるにもかかわらず播州（貴州省遵義県）に流されるのをあわれみ、任地の交換を願い出た。信義と友情に厚い人柄を示すエピソードである。静かな自然詩に優れ、清らかでときに厳しい叙景の中に、悲憤と思索を秘めている。唐代を代表する自然詩人として、王維・孟浩然・韋応物と並んで「王孟韋柳」と称される。また韓愈と共に古文復興運動を進めて散文を革新し、唐宋八大家の一人とされる。「柳河東集」四十五巻がある。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「江雪」は五言絶句の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首３」（目加田誠著）によった。

主題

鳥の姿も人の気配もない雪景色の中で、蓑笠をつけた老人がただ一人、釣り糸を垂れている。厳しい自然の美しさと、それと一体となって生きている人への共感を描いたもの。

構成

第一（起）・二（承）句…生き物の気配の全くない雪景色。
第三（転）句…第一・二句でうたわれた景色に一人の老人がいることを浮かび上がらせる。
第四（結）句…老人が釣り糸を垂れたまま、静かに雪景色の一部となってゆく。
〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言絶句。　押韻―「絶」（第一句）・「滅」（第二句）・「雪」（第四句）。入声八・屑韻。
対句―第一句・第二句。

訓読と現代語訳

①千山　鳥飛ぶこと絶え
②万径　人蹤滅す
③孤舟　蓑笠の翁
④独り釣る　寒江の雪

① 多くの山々から、鳥の飛ぶ姿は絶え、
② 全ての小道から、人の足跡は消えている。
③ だが一艘の小舟に、蓑と笠をつけた老人が、
④ ただ一人、寒々とした川の雪景色の中に、釣り糸を垂れている。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。その際、第三句の表現効果に注意する。
❺ 作者と、この詩の成立の背景について理解する。
❻ 対句表現について理解する。
❼ 第四句を中心に、作者が雪景色から感じたものを考える。
❽ 詩形・押韻について確認する。〔「学習のポイント」1〕

❶歴史的仮名遣いに注意して、「江雪」「孤舟」「蓑笠」などの読み方を確認させる。
❷内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹第一句と第二句の「対句」表現で、辺り一面に全く生き物の気配がないことが強調されていた。そこに第三句で「孤舟蓑笠翁」と、命ある人間がいたことに気づく驚きが生まれる。厳しい自然の中で「孤舟」に身を託している漁翁の威厳にも注目させる。こうした点に注意させ、現代語訳をさせる。

展開

❺作者柳宗元と、作詩の背景について、「作者」に基づいて、簡単に説明する。次の点に触れる。
(a)「秋風引」の作者劉禹錫と同年に進士に及第し、友人どうしだった。
(b)王叔文の政治改革に参加し、劉禹錫ともども、熱心に改革に取り組んだ。
(c)永貞元（八〇五）年、クーデターにより改革派は失脚し、王叔文らは処刑されたが、柳宗元は永州（湖南省零陵県）に左遷され、のちには柳州（広西壮族自治区柳州市）に移されてそこで死んだ。
(d)「江雪」詩は、永州左遷時代の作である。

❻(a)「対句」とは何かを、指導者側で説明し、板書して確認する。

《板書例》
「対句」＝構成が同じで、意味内容も互いに対応する二つの句。
(b)第一句と第二句が対句を形成していることを理解する。
(c)両句の対応を考えさせ、板書して説明する。

《板書例》

「対句」
- 千山（場面）／鳥飛（主語）／絶（述語）
- 万径（場面）／人蹤（主語）／滅（述語）

このほか、「千」と「万」の数字の対比、「鳥」と「人」の生命の対比、「絶」と「滅」の動詞の対比や、その動詞が合わさって「絶滅」という一語となること等に注目させてもよい。

絶句形式には対句は必要ではないが、この詩では厳しい自然の情景を重厚に描くために用いられていることを理解させる。

❼ (a) 第一句と第二句は、自然描写。この「叙景」（自然描写）は、まるで生命を拒否しているような厳しいものである。そこに自然の厳しい美しさがある。

(b) しかし第三句で、そういう自然の中にも、「孤舟」に身を託して漁をする老人が提示される。その姿は孤独だが、厳しい自然の中にあって、威厳を持っている。

(c) 第四句で、その老人が雪景色の中でじっと釣り糸を垂れているさまが描かれ、雪景色が威厳に満ちた小さな生命を包み込む自然として捉え返され、厳しい中にも自然と人間（「翁」）とが一体となって終わる。

❽ 詩形・押韻について確認させる。特に、押韻について、「絶」「滅」「雪」と、厳しいイメージをあたえる語が韻を踏むことによってより強調されていることに注意する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶【四季】の詩について、まとめの学習活動を行う。
思判表B⑴ア・イ・オ　主態　〔「言語活動」1〕
ア季節の景物と心情の関わりについて、理解する。
イ複数の心情によって詩が構成される場合があることを、理解する。

❶ア…四首の詩について、その詩の中で象徴的な景物の表現を抜き出す。表現の単位は、「春暁」であれば「春眠」「不覚暁」のように、詩の意味の切れ目になっていることが望ましい。この機会に、詩の意味の切れ目について考えさせることも一つの方法である。一首の詩について、複数の表現を生徒に選ばせ（指導者による選択でもよい）、その表現が呼び起こす心情や表現相互の関係について説明する。

イ…詩の結びにおかれた心情と、それとは異なるものの、詩の世界を構成するには不可欠の心情に注意する。たとえば「春暁」であれば、風雨によって花が落ちることが春を惜しむ心情の描写として結びとなっている。一方で、春の朝寝の耳に聞こえた鳥の声には、自然を楽しむ心が託されている。そうした例を説明しながら、「江南春」における「鶯啼」と「煙雨」が同様に複層的な関係にあることにも気づかせる。

【評価】「言語活動」1を行い、それぞれの詩の内容を的確に捉え、季節と心情の関係について理解しているか、またそれぞれの詩を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

● 一四九ページ

問 **対句になっているのはどの部分か。**

答 第一句（起句）と第二句（承句）。

補 対句とは、構成が同じで、意味内容も互いに対応する二つの句であることを事前に説明し、そのうえで質問する。

問 **対句になっている第一句と第二句から、どのような様子が分かるか。**

答 「千山」「万径」という表現から、見渡す限り全ての場所が浮かび、そこから「鳥飛」「人蹤」が全て「絶」「滅」している、生命の気配の全くない様子。対句であることによって、その光景が鮮明になる。

補 さらに、「千山」が大きい景色であるのに対して、「万径」が足もとの小さな小道であること、「鳥飛」が鳥の飛ぶ姿であるのに対して、「人蹤」が人の姿ではなく、その足跡であることなどを理解させる。

問 **第一句・第二句の二句はどのような世界を描いているか、適切なものを次の中から選べ。**

(ア) 厳冬の静寂の世界。
(イ) 全て死滅した世界。
(ウ) 人跡未踏の世界。
(エ) 夜の静寂の世界。

答 (ア)

問 **第三句・第四句について、**
1 **「蓑笠翁」とは、(1)どこで、(2)何をしている様子か。**
2 **[難][A]「蓑笠翁」のどのような姿が描かれているか。**
[中][B]「蓑笠翁」のどのような姿が描かれているか、適切なものを次の中から選べ。
(ア) 広大な自然の中で悠々自適の生活をする姿。
(イ) 静寂の中でじっと孤独に耐える姿。
(ウ) 厳しい寒さの中で懸命に獲物を追う姿。
(エ) 厳寒に身を置く、清閑孤独な姿。

答 1 (1) 雪に覆われた人気のない川で、(2) ただ独り釣り糸を垂れている。
2 A 厳寒に身を置く、清閑孤独な姿。
B (エ)

問 **前半の二句では命の気配がなかったが、後半の二句では「翁」が現れている。前半と後半には、どのような対比があるか。**

答 前半は厳しい雪景色の美しさを描いているが、後半では、その厳しい自然の中で自然と一体となって生きる人間の、静かな生き方が示されている。

補 ことに、転句（第三句）で、「孤舟蓑笠翁」と、命ある存在が現れる鮮やかな展開に注意し、結句（第四句）で、それが雪景色の

語句の研究

● 一四九ページ

4 江雪　川辺の雪景色。寒々とした人気（ひとけ）のない川の雪景色。第四句の「寒江雪」と対応している。

5 千山　多くの山々。周り中の山々。「千」は、具体的な数ではなく、数が多いことを示す。第二句の「万径」と対応している。

5 鳥飛　鳥が飛ぶこと。鳥の飛ぶ姿。「鳥飛（てうひ）」と一語として読んでも、意味は同じ。

5 絶　たえる。やむ。なくなることをいう。

5 万径　全ての小道。「万」は、具体的な数ではなく、数が多いことを示す。第一句の「千山」と対応している。「径」は小道。深い山あいなので、大きい道はない。

5 人蹤　人の足跡。

6 孤舟　ただ一艘だけの舟。

6 蓑笠翁　蓑と笠をつけた老人。「蓑笠」は、カヤ・スゲなどの草の茎で作った雨具。「蓑」は体につけ、「笠」は頭にかぶる。「翁」は、老人。ただここでは「漁翁」の意と考えられる。「漁翁」は、漁父（ぎょほ）・漁夫・漁人などと同類の言葉で、魚をとって暮らしを立てている人、つまり漁師（りょうし）の意。

中にとけこんでゆくことを理解する。

問 ◉**「蓑笠翁」（第三句）とは、誰のことか。**

答 作者、柳宗元自身のこと。

補 雪景色の中で釣り糸を垂れる「漁翁」の姿から詩人の孤独な心情が読み取れる。

問 **この詩の表現の特色として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)音楽的　(イ)触感的
(ウ)絵画的　(エ)嗅覚的

答 (ウ)

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

その場合、「翁」は年長者または年長者と見える人への敬称に近く、必ずしも老人でなくともよい。

6 寒江雪　寒々として人気のない川の雪景色。

鑑賞

詩題と前半の対句によって壮大な雪景色を現前させ、後半ではそれとは対照的に小さな老人が独り釣りをしているさまに焦点を合わせる。「孤舟」は老人の換喩であり、その孤独を示してはいるが、「秋風引」の「孤客」とは孤独の質が異なるようであり、孤高とも言うべき存在であるかに思われる。それは、壮大な雪景色を背景としつつ、埋もれることも抗うこともしないその自然な姿が示すものではあるが、一方で、『楚辞』以来の伝統である「漁父」のイメージの系譜によって、俗世に対峙する存在であることが示唆されることも見逃せない。伝統的なイメージの系譜が漢詩の表現に不可欠であることをこの段階で生徒に理解させる必要はないが、例えば釣り人のイメージについて自由に発言させるなどすれば、太公望やスナフキンなどへの連想も生徒の側から出てくるかもしれない。そうしたところを糸口として、漢詩文における「漁父」のイメージについて紹介することができれば、この詩の世界を理解する助けになるであろう。

また、水墨画における点景のように置かれた老人は、たしかに作者の自画像ではあるが、それが俯瞰的な視線から描き出されていることも重要である。それによって、読者はそこに作者の姿を見ると同時に、読者自身もその立場に身を置いて心情を想像することができるようになる。これは、絵画における点景人物に類似した役割をもっていると言えるだろう。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　それぞれの詩の押韻を確認してみよう。

【答】それぞれの詩の「構成」を参照。

▼ポイント▲「秋風引」のみ起句で韻を踏んでいない。五言の近体詩では第一句は韻を踏まず、近体詩は平声で韻を踏むのが正格とされることからすれば、むしろ「秋風引」の形式が通例だが、この段階では、韻を踏むことの理解が得られればよい。

言葉と表現の解答例

1　次の漢字がどのように使い分けられているか、漢和辞典で調べてみよう。

(1)　**覚・憶**　(2)　**聞・聴**

【答】「覚」は瞬間的、「憶」は持続的に心に感じるという違い、「聞」は聞こえてくる、「聴」は耳を傾けるという違い。また、「聞」は隔たりを通して耳にする、「聴」はまともに耳を向けてきくのようにとらえることもできる。

▼ポイント▲　訓読みでは同じになってしまう漢字であっても、意味の違いがあるものは多く、詩を読む時にはその違いに注意する必要がある。

言語活動の解答例

1　季節と心情の関係について、それぞれの詩を比較し、話し合ってみよう。

【答】「花」「雨」「風」「雪」などが季節の象徴的な景物となっていることを確認し、作者の心情がそれと結び合わされて詩の表現が成り立っていることを理解する。

▼ポイント▲「学習活動のポイント」の「まとめ」にあるように、詩がどのような意味のまとまりによって構成されているかに気づかせつつ、そこから自然景物の描写を選ぶところが最初のポイントになる。そのためには、詩の構成とともに、句の構成（意味の切れ目）について確認させる時間を設けるのも効果的であろう。意味のまとまりは、句のリズムの単位（五言であれば、二・三、七言であれば、四・三もしくは二・二・三）と一致することが多いが、例外もある。ここで扱った詩の中では、「南朝四百八十寺」のみが例外であることに注意すればよい。

　具体的な手順としては、それぞれの詩について、担当するグループを決め、その詩の中で象徴的な景物の表現を意味のまとまりごとに抜き出す作業を行なう。そのさい、抜き出す表現は複数あってよいが、より中心的なイメージを詩のなかで担う景物には◎、

そうでないものには○印をつけるなどの工夫をする。さらに、その表現によって呼び起こされる感覚や感情について話し合い、詩の結びに置かれる心情と、それとは異なりつつ、詩の世界を複層的にしている心情にも注意する。たとえば「春暁」の後半だけ読めば、風雨によって花が落ちることが春を惜しむ心情と結びついていることは明らかではあるが（「花落」）、一方で、前半の春の朝寝の耳に聞こえた鳥の声には、自然を楽しむ心が託されている（「聞啼鳥」）。春を楽しみ、かつ惜しむのである。「江南春」における「鶯啼」と「煙雨」も春らしさの表現において、同様に複層的な関係にある。

担当グループそれぞれの発表が進んだところで、それぞれの詩における心情の違い、また、景物と心情の関係の違いなどを議論することも、詩の理解を深めるであろう。例えば「秋風引」と「江雪」では、ともに「孤」という心情が「秋風」や「寒江雪」によって強調されていると言えるが、その「孤」のありかたは、それぞれ異なっているように見え、それは「風」と「雪」の違い（あるいは「孤客」は「最先聞」、「蓑笠翁」は「独釣」のように、受動的か能動的かの違い）とも関連するのではないかといったような発見が生徒自身によってなされるよう促すのも一つの方法である。

（齋藤　希史）

［絶句ー送別］

送元二使安西

王維

作者

王維

七〇一年頃（一説に六九九年）～七六一年。盛唐の詩人。字は摩詰。熱心な仏教信者で、「詩仏」と呼ばれた。唐代自然詩の第一人者。太原（山西省中部）の人。開元九（七二一）年、進士に及第。太楽丞に任ぜられたが、罪に連座して左遷された。開元二十三（七三五）年には張九齢に認められて右拾遺となったが、張九齢の失脚により、河南節度使の節度判官として涼州（甘粛省）に赴任。その後、監察御史となり、左補闕、庫部郎中にまで進んだが、母崔氏の死にあい、一時官を辞して喪に服した。喪が明けると、吏部郎中、次いで給事中となったが、安禄山の乱が勃発。玄宗の成都（四川省）避難に従うことができず、賊軍に捕らえられて心ならずも偽官（安禄山の朝廷の官職）に就かされた。乱後、重罪に処されるべきところ、当時刑部侍郎であった弟の王縉が、助命を請うたのと、賊軍の中にあって唐室の崩壊を悲しむ詩を作っていたことによって官職を下降されただけで許された。後、再び給事中となり、尚書右丞となって没した。早くから俊才をうたわれ、宮廷詩人として活躍する一方、終南山の麓、藍田（陝西省）の地に別荘（輞川荘）を営み、その自然を愛して閑雅の生活を楽しんだ。友人裴迪と唱和した「輞川集」がある。詩は、閑寂な自然を歌うことが多く、晋の田園詩人陶淵明、南朝宋の山水詩人謝霊運の流れを受けて、さらに新しく深い美の世界を創造した。唐代自然詩人の雄として、孟浩然・韋応物・柳宗元と共に「王孟韋柳」と称される。また、画にもすぐれ、南画の祖とされる。「王右丞集」がある。

出典

三体詩

六巻。南宋の周弼の編。唐の詩人百六十七人の近体詩を、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三体に分類して収めている。中晩唐を重視して初唐はとらず、盛唐も李白・杜甫をとっていない。元の釈円至が初めて注をほどこし、「箋注唐賢絶句三体詩法」二十巻を作ったが、のち清の高士奇が補注を作った。我が国には南北朝時代に、中巌が入唐して伝えたといわれる。その後、禅僧の間で盛行し、注が多く作られた。江戸時代、一部の学者がこれを排斥したが、愛読者が多く、現在に至っている。「送元二使安西」は巻一所収。本教科書は、冨山房「漢文大系　箋解古文真宝後集・増註三体詩・箋解唐詩選」によった。

主題

朝の雨も上がり、柳の揺れる宿で、遠く西域に旅立つ友に、最後にもう一度だけと、別れの杯を勧める。

構成

第一（起）・二（承）句…渭城の宿では朝の雨も上がり、揺れる柳の緑もみずみずしい。（叙景）

第三（転）・四（結）句…「旅立つ君にもう一杯、酒を勧めよう。西域に行けば、君の友は一人もいないのだから。」（作者の元二に対する言葉）

〈詩形・押韻〉 詩形―七言絶句。　押韻―「塵」（第一句）・「新」（第二句）・「人」（第四句）。上平声十一・真韻。

訓読と現代語訳

①渭城の朝雨　軽塵を浥す
②客舎　青青　柳色新たなり
③君に勧む　更に尽くせ　一杯の酒
④西のかた陽関を出づれば　故人無からん

① 渭城の朝の雨は街道の土ぼこりをしっとりと濡らしてくれた。
② 旅館の辺りの柳は青々として、みずみずしい色を新たにしている。
③ さあ君よ、もう一杯この酒を飲み干したまえ。
④ 西に進み、陽関を出てしまうと、もう親しい友はいないのだから。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。その際、句中の切れ目に注意する。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ

展開

❹正確に現代語訳する。〔**言葉と表現**」1〕
❺第一句から想起される情景を理解する。
❻第二句の表現の特徴を理解する。
❼前半に対して、後半がどのような特徴を持っているかを理解する。〔**学習のポイント**」1〕
❽詩中の地名を地図上で確認し、作者の思いを理解する。
❾詩形・押韻について確認する。

❶丁寧に範読する。中国で最も愛好された送別の詩であり、我が国でも詩吟等によって古来愛唱されている作である。そのことをあらかじめ断っておいてもよい。
❷できれば暗唱させ、きちんと訓読してその美しさを理解させたい。中国では古来、この歌に曲を付し、「陽関三畳（曲）」といっている。その歌い方には種々あったらしいが、一般には結句を三回繰り返す（「三畳」は、三回たたみ重ねる意）というものだったらしい。その形をまねて、結句を三回繰り返す等してもよい。
❸数名に板書させ、全員で検討する。
❹漢和辞典で引かせたい語句－「浥」「軽塵」「青青」「勧」「尽」
「故人」等。ことに起句の「浥軽塵」というのが、旅人にとって喜ばしく、出発を言祝いでいることを、辞書を引くことによって把握し、訳に反映させたい。
❺いよいよ旅立つ場面。塵も落ち、すがすがしい旅立ちとなりそうなこと。朝の旅立ちで、前夜のうちに送別の宴は終わっており、これが最後の別れの瞬間であること。以上のような点に注意させたい。
❻巧みな表現によって柳の美しさが捉えられていることに気づかせる。本来の言い方とは逆に柳の色を描いていることを、板書等で整理する。

《板書例》

〈日常語〉　客舎柳色青青　新
〈王維詩〉　客舎青青柳色新

❼後半で、情景描写から一転して、元二に対する語りかけになっていることを理解する。
　前半－情景を見て描いている。
　後半－作者（見送りの人）から元二への語りかけ。
　そこに、最後の瞬間に、友に向かって堰を切ったように語りかけようとする作者の思いが込められている。
❽単元扉の地図を利用する。ふり出しの出発地は、都長安（陝西省西安市）とし、「渭城」（咸陽）、「陽関」「安西」と、元二の旅する道順と位置を確認させたい。

発問例

● 一五〇ページ

問　**「朝雨」（第一句）という表現から、どういう場面か考えよ。**

答　朝早く降った雨が上がり、今しも「元二」が旅立とうとしている場面。

補　旅立ちは、朝である。軽く雨が降って上がったことが分かる。ことに次の「浥二軽塵一」という表現から、軽い塵をしめらす程度の小雨だったことが分かる。旅立ちには、ちょうど良い状態である。さらに、「元二」は官命によって「使」するのだから公用であり、前夜は、都の長安から、渭水対岸の「渭城」まで人々が見送り、その地の旅館で盛大な送別の宴があったと考えられる。「朝雨」とあるから、前夜の宴会で儀式上の挨拶は全て終わり、一夜明けて旅立つばかりであることが分かる。

問　**「浥二軽塵一」（第一句）とはどのような様子をいうのか。**

答　雨が降り、軽い土ぼこりをしっとりと湿らせている様子。

問　**この詩の季節及びその根拠となる語句をあげよ。**

答　季節＝春
根拠＝青青柳色新

問　**第二句の表現の巧みな点はどこか、指摘せよ。**

答　「青青」は、「柳色」を言っているのだが、その順序が逆になっている。そのことによって、「青青」としているものが何なのか一瞬分からず、次の「柳色」で鮮やかな柳の色が広がる。

補　平仄（平らな音と仄いた音の定型化した組み合わせ方）の決まりに影響されてこのような語順を選んでいるのだが、普通の語順を逆転させた新鮮な表現効果を生んでいる。普通の語順と対比して板書するとよい。「学習活動のポイント」参照。

問　**「勧レ君更尽一杯酒」（第三句）について、**
1　**「君」とは誰を指しているか。**
2　**なぜ「更尽」と勧めているのか。**
3　**◉「勧レ君」に込められた作者の心情は、どのようなものか。**

答　1 元二
2 別れを惜しんでも惜しみきれないから。
3 いよいよ別れの朝を迎え、友への離別の悲しみを抑え難い気持ち。

補　深い惜別の情にあふれていることを理解する。

問　**「西出二陽関一無二故人一」（第四句）について、**
1　**「西」はどこを基準にして西なのか、次の**

語句の研究

● 一五〇ページ

2 元二　王維の友人。伝未詳。「元」は姓。「二」は排行（一族同世代の兄弟・いとこなどの年齢の順位）を示す。したがって「元二」は、「元家の二男」の意。ただし、その「二」は、いとこなどを含んで数えることに注意。

2 安西　現在の新疆ウイグル自治区庫車県。唐代には安西都護府を置き、西域の防備に当たらせた。安西都護府は、唐王朝が西域経営の拠点とした役所。「元二」は、そこに「使」するというから、朝廷の命により、正式の使者として出かけてゆくのである。

3 渭城　現在の陝西省咸陽市。唐の都長安（現在の西安市）の北西、渭水を挟んで長安の対岸にあった町。唐代には西方に旅する人をここまで見送る習慣があった。旅立ちの前の夜には、この渭城において送別の宴会を開くのが通例だった。

3 朝雨　朝早く降った雨。「朝雨」の語によって、前日の夜に送別の宴が開かれ、今は朝の雨も上がっていよいよ出発するばかりだということが分かる。

中から選べ。

(ア)謂城　(イ)安西
(ウ)客舎　(エ)陽関

答 2

問 **「無二故人一」とはどのような意味か。**

答 1 (ア)
2 古くからの友人はそこにはいないだろうから。

問 **前半と比べて、後半の表現の特徴は何か。**

答 全て、作者の、元二に対する語りかけの言葉になっている。前半は情景の描写だったが、後半は会話体で、別れを惜しみ、元二の身を気づかう作者の、精一杯の直接話法となっている。

問 **この詩に表された作者の心情について、[難]A説明せよ。**
[中]B適切なものを次の中から一つ選べ。

(ア)友と一緒に旅行できないことを無念に思う心情。
(イ)遠く旅立つ友との別れを惜しみ、励ましている心情。
(ウ)遠く旅立つ友を見送ったという充実した心情。
(エ)友と永久の別れになることを悲しむ心情。

答 A遠く旅立つ友との別れを惜しみ、励ましている心情。
B(イ)

問 **一番共感する句はどれか。そしてそれはなぜか。**

答 どの句をあげてもよいが、その理由をはっきりさせて発表するよう指導する。ことに印象深いのは、承句の「客舎青青柳色新」という「青青」と「柳色」を逆転させた表現、結句の「西出二陽関一無二故人一」という砂漠地帯に一人向かう友を思う言葉等であろう。どの句を選ぶにも、その根拠を出して、分析しながら意見交換をさせたい。

問 **都長安を中心にして、「安西」「渭城」「陽関」などの位置を、地図の上で確認せよ。**

答 「渭城」が長安のすぐ対岸であり、「陽関」を出れば「安西」まで、タクラマカン砂漠を横断する命がけの旅だった。当時においてはきわめて危険な旅だったことを確認させたい。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

---

3 浥二軽塵一　軽い土ぼこりを濡らしている。「浥」は、しっとりと濡らす意。「軽塵」は、黄土の微粒子が土ぼこりとなったもの。それが雨でしっとりと濡れているのは、雨が小雨だったことを示し、また旅立つ人にとっては、土ぼこりが立たずに歩きやすい状態となっていることを意味する。

3 客舎　旅館。はたご。前夜、送別の宴を開いた、その旅館をいう。

3 青青　あおあおとしている。緑が鮮やかなさま。「青」の文字自体の意味が、若々しい緑であるが、「青青」と重ねて、畳語（重言）の擬態語としても、緑の若々しさを形容する。

3 柳色新　柳の葉の色が鮮やかだ。雨に洗われた柳の緑のみずみずしさをいう。同時にそれは、旅立つ人に無事の帰還を祈って柳の一枝を折って贈る習慣を踏まえている。また、その習慣による古楽府「折楊柳（せつようりゅう）」が昔から歌われてきたことをも踏まえている。

4 更尽　さらに（もう一杯）飲み干してくれ。これも、前夜の送別宴で十分に歓を尽くし、今朝はもう別れるばかりなのに、「更」にもう一杯飲んでくれと勧めていることが分

かる。意味上は、「尽」の目的語は「一杯酒」であるが、詩の訓読は原詩のリズムの切れ目（七言詩は２＋２＋３もしくは４＋３）を考慮することが多く、この場合も「更尽二一杯酒一」とは訓読しないのが通例である。

4陽関　中国本土から西域に出る所の関所。現在の甘粛省敦煌市の西南にあった。玉門関の南に当たる。ここを西に出ると、荒涼としたタクラマカン砂漠で、もはや人煙の絶えた絶域と意識された。

4故人　古くからの友人。現在、我が国では「亡くなった人」を意味することが多いが、そういう意味ではないことに注意。

鑑賞

学習活動のポイントでも示されているように、この詩は前半二句と後半二句が対照的な描写（叙景と語りかけ）になっているのが基本構造である。もう少し細かく見ていくと、起句はまず「渭城」全体の朝の雨上がりの情景を描き、承句で送別の場所である「客舎」に視点が絞られ。承句の「青青」「柳色新」から春の情景であることが明示される。さらに転句で「君」と向き合って別れ酒を酌み交わしている場面へと至る。つまり起句から承句へと視点がクローズアップされていることにも注意を向けさせたい。

結句は情景が想像の力を借りて西域までに及ぶ。旅人が向かう方向が西であること，「陽関」という西域の場所が示され、起句の「渭城」と呼応するのである。「無故人」の「故人」は当然のことながら見送る王維自身をも含む。また、明示はされないが，西域には春であっても朝に地面を潤す雨も青々とした柳もないであろうことを踏まえるなら、「故人」はただ人を指すのではなく、慣れ親しんだ自然をも象徴的に包摂すると考えてもよい。

勧レ酒ヲ　于武陵

作者

于武陵

生没年未詳。晩唐の詩人。名は鄴。「武陵」は字だが、通常、字で呼び習わされている。八一〇年に生まれたという説が有力だが、没年は不明。杜曲（陝西省西安市近郊）の人。大中年間（八四七年〜八五九年）、進士に及第したが、官僚生活になじめなかった。その後、官職を捨てて諸国を巡り、嵩山（河南省登封県の北）の南に隠れ住んだという。「于武陵詩集」一巻がある。

出典

唐詩選

七巻。明の李攀竜が編集したとされる唐詩の選集。唐詩四百六十五首を詩体別に編集したもの。李攀竜（一五一四年〜一五七〇年）は、字は于鱗、号は滄溟。山東省済南の人。明代中期以降の文壇の主流となった「嘉靖七子」（「後七子」とも呼ぶ）の中心人物。詩の価値を決定するのは「格調」（詩文の風格と調子。詩形・リズム・修辞などを通じて、詩の外に現れるおもむき）であるとし、格調の最も高いものとして盛唐の詩、ことに杜甫・李白を評価し、「文は秦漢、詩は盛唐」という主張をした。その主張に沿って、盛唐を中心とした唐詩の選集「唐詩選」が刊行された。「唐詩選」は、五言古詩十四首、七言古詩三十二首、五言律詩六十七首、五言排律四十首、七言律詩七十三首、五言絶句七十四首、七言絶句百六十五首、計四百六十五首からなる唐詩の選集である。作家の数は、合わせて百二十八人。最も多く作品を選ばれているのは杜甫で、五十一首。以下、李白三十三首、王維三十一首、岑参二十八首と、いずれも盛唐の詩人である。中・晩唐詩は格調が低いとして極端に冷遇され、白居易・杜牧にいたっては一首もとられていない。選ばれた作品は、雄渾にして壮大なものが多く、明・清代の中国や江戸時代の日本に大きな影響力を持った。ただし、「唐詩選」は偽書で、李攀竜が歴代の詩を選んで編集した「古今詩刪」から唐代の一部分を抜き出して出版したものである、等という説もある。そうであるとしても編者は同じであり、李攀竜の説に沿った、手頃で優れた唐詩の選集として評価され、現在も愛読されている。「勧酒」は巻六所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐詩選」（目加田誠著）によった。

主題

黄金の杯に酒をなみなみと注いで、別れてゆく友に勧める。「君よ、どうかそれを断らないでくれ」と、人生には別れがかりが多いから、一緒にいる今を共に楽しもうとする思いを歌った。

構成

第一（起）・二（承）句…友人に酒を勧める様を描く。

第三（転）句・四（結）句…酒を勧める理由が、人の世には別れが多いからだと、自分の思いを述べる。

〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言絶句。　押韻―「屣」（第一句）・「辞」（第二句）・「離」（第四句）。上平声四・支韻。

訓読と現代語訳

①君に勧む　金屈巵
②満酌　辞するを須ゐず
③花発きて　風雨多し
④人生　別離足る

①君に勧めよう、この黄金の杯を。
②なみなみと注いだこの酒を君よ断らないでくれ。
③花がひらけばいつでも雨風が吹き散らす、
④人生も、別れがかりが続くのだ。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。

展開

❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。〔「言葉と表現」1〕
❺ 華やかな感じの言葉、悲しい感じの言葉を指摘し、詩の流れを考える。

❻友人に対する思いがどう表現されているか考える。
〔**学習のポイント**1〕
❼全員に訳詩を作らせ、数名が発表する。
❽詩形・押韻について確認する。

❶「不レ須レ辞」「足二別離一」など、生徒には読みにくい箇所なので、印を付けさせる等して、正しく音読できるようにする。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹漢和辞典を引いて、一応の訳を作る。全体の半分ほどは指導者が訳し、残りを生徒に訳させる等の方法をとってもよい。
❺言葉・表現から受ける印象を整理させる。
華やかな印象の言葉―「金屈巵」「満酌」「花発」
悲哀を感じさせる言葉―「多風雨」「足別離」
右のような形に最初から分けて、該当する言葉を探させてもよい。また逆に、右の言葉を指導者が指摘して、その印象を生徒に聞いていって、分類してもよい。
全体として、華やかな（華やかさを追い求めている）前半から、心の底にある悲哀を語り出す後半への展開が分かって来る。
❻❺を参考に、前半と後半の関係を考える。前半では、盛んに酒を勧める様が描かれる。それについて、なぜこれほど（一見無理強いのように思われるほど）酒を勧めるのか、と考えさせ、後半がその理由を語っていることに気付かせる。酒を勧めている相手の友人は、おそらく旅立ってゆくのだろう。そのために、「別離足る」という思いが作者の中に募るのである。しかし必ずしも送別の歌と考えず、人生一般の別離の悲哀に苦しんでいるとしてもよい。
❼全員に各自の訳詩を作ってみるよう指示する。
全員の作品を後でプリントするなどして、全体に返す。
本時においては、指名して発表させる。井伏鱒二（いぶせますじ）の訳詩を参考にさせてもよい。
❽押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一五〇ページ

問 **宴席の雰囲気を華やかにしている語を一つ抜き出せ。**

答 金屈巵

問 **「満酌」（第二句）について、**
◉中 A どのようなことか。
中 B 意味として適切なものを次の中から選べ。

(ア)宴席に杯がたくさん並んでいること。
(イ)杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。
(ウ)多くの人の杯を次々と飲みほすこと。
(エ)何杯もつがれた酒を飲んで酔っぱらってしまうこと。

答 A 杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。
B (イ)

問 **「不レ須レ辞」（第二句）とは、どういう意味か。**

答 辞退しないでくれ。断らないでほしい。

補 漢和辞典を引かせる等して、正確に理解させたい。「語句の研究」の例文等も含めて、用例を示して理解しやすいようにする。

問 **「花発多二風雨一」（第三句）は、どのようなことをたとえているのか。**

答 人生では、楽しいときは長く続かず、それを打ち壊すものがやってくること。具体的

語句の研究

● 一五〇ページ

6 勧酒　酒を勧める。人に酒を飲むよう注ぎ勧める意。楽府題（「楽府」は、漢・魏・六朝のころ歌われた民間歌曲。楽府の中で歌曲の題名として固定的に歌われてきたものを「楽府題」という）の一つに「将進酒」（将に酒を進めんとす）があり、その気持ちをとって題としたのだろう。

7 金屈巵　取っ手の付いた黄金製の杯。「屈巵」は、もともと木を円筒状に曲げ、漆を塗るなどした酒器で、ジョッキのように持ち手の付いたものをいう。四〇〇ミリリットルから二リットルほど入るものまであり、概して大型の杯である。黄金製の豪華なものを「金屈巵」という。「巵」は「卮」とも書く。

8 満酌　杯いっぱいになみなみと酒を注ぐこと。また、そのように注がれた酒。「満」は、いっぱいにみちる意。「酌」は、酒を注ぐ意。

8 不レ須レ辞　断らないでくれ。辞退しないでくれ。「不レ須」は再読文字「須」（須カラク…ベシ）の否定形。「須」は、動作や行為の必要性・必然性を表し、「当然…すべきだ」「…するのは当然である」の意。「不レ須」は、多くの場合、再読せずに、「須キズ」と読み、「…する必要はない」「…するに及ばない」などと訳す。さらにそこから、「…しないでほしい」と依頼・懇願する気持ちを表すこともある。ここでは、その意。なお「須ゐる」は、ワ行上一段活用。のちに誤ってハ行上二段活用「須ふ」となった。そのため「不須」を「須ひず」と訓読するものもある。

（例）卿不レ須レ憂レ此。（卿は此を憂ふるを須ゐず。）＝あなたはこれを心配する必要はない。（「三国志」鍾会伝）

9 発　ひらく。花が咲く。「開」と、意味の上でそれほど大きな差はないが、ここには仄声（傾いたトーンで発音される音声）の語が置かれなくてはならず、「開」は、平声（平らかなトーンで発音される音声）なので、用いられず、仄声の「発」が用いられた。また、その韻律上の規則を離れても、「開」が、もともと門扉の開くのをいうのに対して、「発」は、小さくかたまっていたものが外被をはねあげるようにひらき広がるのをいうので、「発」を用いたと考え

には、結句の「人生足＝別離」をたとえていて、親しい人と一緒にいられる時間は短く、すぐに別れが訪ずれることを暗示している。

問　前半の二句と後半の二句は、どのような関係になっているのか。

答　前半二句＝友人に向かって、少し無理強いをするような調子で酒を勧める様子。後半二句＝そのように酒を勧める理由。酒を勧める私の心の思い。

問　補　理由が後半に表されていることに注意する。**この詩の主題として適切なものを次の中から選べ。**

(ア)花も嵐も酒もすべて人生模様だ。
(イ)友人との別れは本当に悲しい。
(ウ)人生は無常だ。
(エ)この宴席で心ゆくまで酒を飲んで楽しもう。

答　(エ)

問　詩形・押韻を調べよ。

答　「構成」参照。

鑑賞

四句すべてが2＋3のリズムで構成され、相手に対する語りかけになっている絶句であり、表現に難解なところはない。起句と承句は取っ手がついた黄金の比較的大きなさかずきである「金屈巵」が「満酌」であること、さらにそれを断らないでほしいと酒をすすめる様子から、豪快に酒を酌み交わし合う情景が浮ぶ。一方後半は、人の生には別れがつきものだからこそ、いまのこの出会いを楽しもうという感情がその底流にあることが示される。後半があることによって、前半の情景の印象がさらに強まる。

結句の「人生」はそのまま熟語ジンセイとして読まれることが多いが、「花が咲けば風雨が起こることが多いように、人が生きれば別離が多い」のように対句になっていると考えるのが自然であり、「人 生くれば」と訓読することも可能である。つまり「花」「人」、「発」「生」、「風雨」「別離」がそれぞれ対応しているのであり、「風雨」は、それによって花が散ることを含意している。この点の理解については、「四季」の項の「春暁」を参照することも有効であろう。

なお、「多」「少」は、「有」「無」など存在を示す動詞に準じて存在の多少を示す場合があり、「有」「無」と同様に、存在する事物の前に置かれる。そのため、ここでは「風雨多」ではなく「多風雨」となる。「足」はここでは「多」と同義。

られる。

10足　多い。「足」は、もともと、充実していること。十分にそなわっている意。そこから、多い意となった。訓読では「足ル」と動詞で読むが、解釈上は形容詞。

(例)　山空　足レ雲。(山は空しきも　雲足る。)＝山はひっそりとしているが雲が多い。(李白「荊州歌」)

参考「コノサカヅキヲ…」　作者は井伏鱒二。明治三十一(一八九八)年～平五(一九九三)年。日本の小説家。本教科書は、『厄除け詩集』(講談社、一九九四年)によった。

【絶句ー望郷】

涼州詞

王翰

作者

王翰

六八七年頃～七二六年頃。盛唐の詩人。字は子羽。晋陽（山西省太原市）の人。睿宗の景雲元（七一〇）年進士に及第。秘書正字等を経て駕部員外郎に進んだが、張説の失脚とともに中央を追放され、最後は道州（湖南省）の司馬で没した。豪放な性格で、酒や博打を好み、名馬や美妓を集めて狩猟や宴会に明け暮れたという。雄勁で情感に満ちた辺塞詩を残している。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「涼州詞」は七言絶句の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首3」（目加田誠著）によった。

要旨

ブドウ酒を飲んで私が酔いつぶれても笑わないでくれ、出征した将兵は生還できないかもしれないのだから、と辺塞の悲壮な思いを歌う。

構成

第一（起）・二（承）句…葡萄酒を飲もうとすると、馬上で琵琶を弾く音が聞こえる。（作者の行為と知覚）

第三（転）・四（結）句…昔から戦争に行って無事に帰った者など多くないのだから、こんなふうに酔って砂漠に寝ても笑わないでくれ。（読者への語りかけ）

〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「杯」（第一句）・「催」（第二句）・「回」（第四句）。上平声十・灰韻。

訓読と現代語訳

涼州詞

①葡萄の美酒夜光の杯
②飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す
③酔ひて沙場に臥すとも君笑ふこと莫かれ
④古来征戦幾人か回る

涼州詞

① 葡萄の美酒を夜でも光り輝く玉の杯で、
② 今しも飲もうとすると、（誰かの演奏する）琵琶の音が（私を）せきたてるように馬上でおこる。
③ 酔って戦場となった砂漠の砂に臥し倒れようとも、君よ私を笑ってくれるな。
④ 昔から遠征して戦った者は、いったい幾人無事に戻ってくることができただろうか（いや、どれほども無事に戻ってきてはいない）。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。[知技(2)ウ]
❹ 正確に現代語訳する。**〔「言葉と表現」1〕**
❺ 第一・二句について、その華麗なイメージを理解する。
〔「学習のポイント」1〕
❻ 第三・四句について、表現の転調の様子を理解する。

〔「学習のポイント」1〕
❼ 詩形・押韻について確認する。

❹難解な語句はほとんどないので、指名読み後、ただちに現代語訳させてもよい。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❺「起承転結」の構成について、確認する。
❼押韻している文字に印を付けさせて確認する。

発問例

● 一五一ページ

問　**「琵琶馬上催」（第二句）とは、どのような意味か。**

答　誰かが琵琶を馬上で演奏し始めるのだが、それが私に対して「ブドウ酒を早く（もっと）飲め」とせき立てている（ように聞こえる）。

補　「出発するぞ」とせき立てている、との説もある。また「催」を「もよほス」と読む説もある。「語句の研究」参照。

問　**第四句の「古来征戦幾人回」という語句は、前半の二句とどういう関係があるのか。**

答　華麗な杯でブドウ酒を飲もうとする兵士の姿を描いた前半の二句は、それだけ見ればいかにも華やかなのだが、実は第四句に示される「死への怖れ」を抱いていたがために大量の酒を欲していたのである。

補　前半の華麗さの理由が、後半の二句、ことに第四句によって示される。鮮烈な表現手法である。

問　**この詩の詩形と押韻を調べよ。**

答　「構成」参照。

語句の研究

● 一五一ページ

2 涼州詞　涼州（現在の甘粛省一帯の地）から流行した楽府歌曲の名。西域の風物や情緒を歌うことが多い。題名は、原本では「涼州曲」となっているが、「全唐詩」「唐詩選」に従って改めた。涼州は、唐代には河西節度使が駐在したシルクロードの要衝の地で、吐蕃（とばん）・突厥（とっけつ）などの民族に備える前線基地だった。唐の玄宗の時、辺地から献上された楽曲の一つに涼州曲があり、その替え歌が多く作られ、「涼州曲」「涼州詞」として流行した。この作もその中の一つ。

3 葡萄美酒　西域産のうまいブドウ酒。ワイン。唐代には、シルクロードを通じて西域から流入したエキゾチックな高級酒だった。

3 夜光杯　夜でも光り輝く玉の杯。また一説に、ガラスの杯。カットグラス等のガラス器も、西域から流入していた。

3 琵琶　西域の弦楽器。胴はなす型、表は平らで背は丸く四弦四柱。インドから西域を経て中国に入り、日本には奈良時代に伝来した。また五弦五柱のものもある。

3 催　うながす。せき立てる。「早く（もっと）飲め」、あるいは「出発するぞ」と、せきたてる意。一説に「もよほス」と読み、琵琶の音色が起こる、かなでる意。いずれにしても、その琵琶の音色は人の心をかきたてるものとして描かれていると言えよう。

4 酔臥二沙場一　「沙場」の解釈は、単なる「砂漠」とする説と「戦場」とする説がある。特に唐詩の用例として、「砂漠」に「戦争」のイメージを重ねたものは多い。この詩でも、「沙場」に兵士が「（酒に）酔って臥し倒れる」というのであるから、「戦場となった砂漠」とした。

4 君莫レ笑　「君」に関しては、「軍中の周囲の人」とする説と「広く世間の人」とする説がある。これは、第三句を「兵士の言葉」ととるか、「詩の語り手（作者）の言葉」ととるかという問題とも関連して考える必要がある。「君」は確かに二人称への呼びかけであるので、「戦場の兵士が軍中の周囲の人々へ訴える言葉」と解せるであろう。だが、この詩そのものが楽府題によるものであること、「涼州」がシルクロードの要衝の地であり、辺塞の要としてのイメージが濃厚であること、といった二点から考えると、戦場の一兵士の言葉に仮託し

た、詩的客観性を具えた表現であると考えるのが妥当であると思われる。この仮託は「欲レ飲」の第二句にも表れ、辺境の地で戦う兵士の悲哀を物語るものとして有効に機能するであろう。第二句から第三句にかけては、まさに戦場での兵士の行動に即した表現であり、詩中に一兵士の言葉を物語的に挿入したかのような趣である。第一句が西域文物の羅列、第四句が戦争における一般的悲哀感が述べられているのに対して、この一人称的仮託による戦場兵士の言葉の臨場感が、この詩の表現に豊かな味わいを添えていると考えておきたい。

4 征戦　遠征して戦うこと。いくさ。出征。

句法

酔臥二沙場一君莫レ笑　禁止形。「莫」は「なカレ」と読み、禁止を表す。「…してはいけない・…するな」の意。

古来征戦幾人回　反語形。「幾人（カ）……」の形で、「いくにんカ…」と読み、「いったい何人が……か、いや、どれほども……ない。」の意。

鑑賞

「涼州詞」という詩題、「葡萄美酒」「夜光杯」「琵琶」「沙場」等の西域に特徴的な語彙によって詩が彩られる。前半は戦さの合間に兵士たちが短い安息を楽しむ情景が、起句では視覚によって、承句では聴覚によって浮かび上がる。転句の「君」は戦場からの読者への呼びかけを含み、結句と併せて、前半の情景が生死の行方もしれない戦場ならではの刹那的なものとして再び輪郭づけられる。このように前半の情景が後半の叙述によってさらに印象を深める構成は、前出の「勧酒」にも通じていることに注意したい。

なお、「君」が誰を指すかについては、戦場の仲間の兵士が読めばその兵士であるし、首都長安にいる友人が読めばその友人が「君」であり、また、時代を離れてこの詩を手にした者が読めば、その人が「君」である。つまり、この「君」は読者を得て初めて決定されるものである。そのようにして、読者がまるで西域の戦場に立ち合っているかのような感覚を与えることに成功している。

またこの詩における西域のイメージについては、安藤信廣「漢文を読む本」（三省堂、平成元年）一三一ページに次のようにあるので、引用しておく。

> 強烈な葡萄酒、光るカットグラス、狂おしくかなでられる琵琶の音色。これらは皆、中国内地の日常生活にはない異国情緒にみちみちている。それは彼ら兵士達が、遠く内地を離れた異境で妖しくも不安な日々を送っていることを示す。しかし兵士はそのように物狂おしい感覚の世界を、今必要として欲しているのである。彼らは酔わなければならないし、音楽に恍惚としなければならない。そうでなければ、異国の「沙場」に明日は自分の死体が横たわるのかもしれないという冷酷な現実を、否応なしに想像してしまうのだから。つまり饒舌なまでに繰り返される異国情緒は、絶域にある兵士達の現実であると同時に願望でもあるのだ。

酔いつぶれたためか、酔った勢いで戯れているのか、兵士は砂漠に寝ころがる。そしてそうしながら、彼の言葉は醒めている。「どうか笑わないでほしい、昔から生きて帰国した出征兵士が何人いたというのか」と。酒と音楽に酔おうとして、それを飢えた獣のように欲していながら、彼は身に迫る死を片時も忘れてはいない。忘れられないのである。デカダンスを求めるのが、しばしばあまりにも覚醒した知性であるように、あまりにも肌近く死を感じている兵士の異国情緒の中に全てを忘れようと苦闘している哀切さが、この詩の生命であろう。そしてまた、そのような哀切な体験と妖しい異国情緒を、一種の強烈な民族感情というべきものにしてしまっている所に、時代の骨太さを見ることができるだろう。

静夜思

李白

作者

李白

七〇一年〜七六二年。字は太白。号は青蓮。盛唐の詩人。自由奔放な詩風で、道教を信奉し「詩仙」と呼ばれた。大胆な発想と自由な表現で、盛唐を代表する。隴西成紀（甘粛省天水県）の人とも、山東（山東省）の人ともいわれ、また西域の出身とする説などもあるが、蜀（四川省）で生まれ育ったとするのが有力である。父は、西域との通商をしていた大商人だったと考えられている。十五歳の頃から剣術を学び、詩文も制作するようになっていた。二十歳の頃には蘇頲に認められてもいる。早くから任侠と酒と美女を愛し、各地を放浪した。二十七歳の頃、安陸（湖北省）で結婚したが、三十五歳の頃太原（山西省）に旅行、任城（山東省）に住んで新たに結婚して一男一女をもうけた。後、江南に旅立ち、会稽（浙江省）で道士の呉筠と知り合って、仙術の修行をするが、呉筠が玄宗皇帝に召されて長安にのぼると、呉筠の推薦によって、天宝元（七四二）年、李白も都に出た。玄宗に仕えて翰林院供奉となり、賀知章から「天上の謫仙人（天上から人間の世に流された仙人）」と評されたりした。天宝三（七四四）年、あまりにも豪放不羈な性格だったために長安を追放され、河南・山東の地を放浪し、杜甫や高適らと交流した。天宝十三（七五四）年、宣城（安徽省）に住んだが、翌年、安禄山の乱が起こり、玄宗の第十六皇子の永王璘の安禄山討伐軍に参加する。しかし永王の行動が兄粛宗皇帝から反乱行為と断定され誅殺されると、李白も罪を問われて夜郎（貴州省）に流された。途中、巫山（四川省）付近で赦免され、長江を下って江蘇省の辺りを転々とし、宝応元（七六二）年、当塗（安徽省）県令李陽冰の家で没した。天才的で卓越した想像力と自由奔放な表現力、大胆で豪放な構想など、全ての面で盛唐の気風を体現した詩人なので、杜甫を「詩聖」と呼ぶのに対して「詩仙」と呼ばれるのである。杜甫は、「春日憶二李白一」詩のなかで、「白也詩無レ敵、飄然思不レ群」と称えている。ことに絶句形式に才能を輝かせ、律詩を得意とした杜甫と並べて「李絶杜律」と評される。「李太白集」三十巻がある。

出典

唐詩選

「勧レ酒」の「出典」参照。「静夜思」は巻六所収。

主題

静かな秋の夜更け、寝室を照らす月に、望郷の思いをかきたてられた心情をうたう。

構成

第一（起）・二（承）句…眼前の景色をうたっている。（叙景）
第三（転）・四（結）句…作者の心情をうたっている。（叙情）
〈詩形・押韻・対句〉 詩形―五言絶句（詩家によって楽府として取り扱う向きもある）。
押韻―「光」（第一句）・「霜」（第二句）・「郷」（第四句）。下平陽韻。　対句―第三句・第四句。

訓読と現代語訳

①牀前　月光を看る
②疑ふらくは是れ　地上の霜かと
③頭を挙げて　山月を望み
④頭を低れて　故郷を思ふ

①（夜が更けて辺りは静かであるが、旅先の身ではなかなか寝つけない。そこで起き上がり）ふと寝台の前を見ると月の光が明るく差し込んでいる。
②その月の光は白々としているので、（もう秋も深まっていることゆえ、初めは）おや、地上に降った霜ではないかと思ったほどであった。
③（だが、よくよく見たら、霜ではなかった。そこで）頭を上げて山の端に昇っている月を仰ぎ見た。
④（するとおのずと故郷のことが思い起こされて、旅愁がひしひしと胸に迫り）頭はいつともなくうなだれて、（私はいつか）望郷の念に浸っているのであった。

学習活動のポイント

■ 展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。[知技(2)ウ]
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 作者のいる具体的な状況を想像してみる。
❻ 詩形・押韻について確認する。

❶五言詩の素朴な韻律を意識して範読する。読む「間」も詩の響きを引き立てる要素であることを指導する。

❷内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❸数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❹現代語訳にあたっては、「疑是」の「うたがう」が現代日本語では否定的な語感をともなうことが多いのに対し、漢詩では「…ではないかと思う」「まるで…かのようだ」の意味で用いられることが多いことに注意させる。「語句の研究」参照。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❺詩人の境遇を調べるなどして、故郷への思いがどのようなものであったかを想像し発表したり話し合ったりする。
❻押韻している文字に印を付けさせて確認する。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶【送別】【望郷】の詩について、まとめの学習活動を行う。[思判表B(1)イ・ウ] [主態]〔**言語活動** 1〕
ア 送別の二首に見える「君」が誰を指すかに注意する。
イ「涼州詞」の「君」が誰を指すか、詩の読者を想定しながら、考える。
ウ「静夜思」における月光がどのような働きをしているかを考える。

❶**ア**…どちらの「君」もこれから旅立つ友人を指している。送別の場の情景を描く詩であると同時に、友を送る情を友に伝えて贈る詩であることに注意を促す。
イ…「涼州詞」の「君」は、この詩が誰に向けて書かれているかによって解釈が異なる。もし、仲間の兵士に向けてだとすれば、「君」もまた苦楽を共にする仲間だということになる。

だが、辺境の戦場の悲哀を都会にいる読者に伝えようとしたものであれば、「君」は不特定であり、遠く離れてこの詩に接する読者ということになる。二つの解釈は互いに排除するものではなく、むしろ読者によって決定される。「涼州詞」の「解説・鑑賞等」を参照。

ウ…漢詩においては、古くから、月が離れた土地にいる人同士の思いをつなぐものとして描かれてきたことを確認する。また、その影響を受けつつ、和歌においてもやはり月が重要な役割を果たしていることにも触れる。李白とも親交のあった阿倍仲麻呂の名歌「天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」などは好例となろう。

【評価】「言語活動」1を行い、詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、その違いについての話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

問 **この詩が作られた(1)季節と、(2)時刻とを、その根拠をあげて答えよ。**

答 (1)「地上霜」とあるから「秋」。
(2)「望二山月一」から「夜更け」。

補 景物の季節感や時刻の古典常識を確認する。

問 **「地上霜」（第二句）は、何をそう疑ったのか。**

答 月光。

補 寝台の前の輝きを見て、「霜が降りたのではないか」と思っているのである。「疑」は、驚きを含む比喩に用いる。「疑わしい」の意味ではないことに注意が必要。

問 **なぜ「霜」（第二句）と思ったのか。**

答 月光がまるで霜がキラキラ光るように白く輝いて見えたから。

問 **「疑　是地上霜」（第二句）の現代語訳として適切なものを次の中から選べ。**
(ア)月の光を見ると、故郷の地に降りた霜の白さを思い出す。
(イ)月の光はまるで地上に降りた霜のように思われる。
(ウ)月の光に照らされた地上に霜が降りている。
(エ)月の光は銀色に輝き霜に覆われている。

答 (イ)

問 **作者は山月を仰ぎ見ながら何を思い出しているか。**

答 故郷のこと。

問 **「低レ頭」という表現を参考にして考えると、第四句に込められた作者の心情は、どのようなものか。**

答 遠い故郷の月夜のことを思い、人々への思いをはせる心情。

補 「牀前」に「月光」を見た瞬間の驚き（第一句）からそのきらめきを「地上霜」のようだと認識する（第二句）までの時間は流れるように描かれている。だが「挙レ頭望二山月一」（第三句）と上を向く視線が描かれ、詩は大きく転じる。そしてそれと対句を形成する「低レ頭思二故郷一」で、鮮やかに視線の再度の逆転が描かれ、故郷への深い思いが印象的に浮かび上がるのである。

問 **作者はこの詩をどのような状況にあって詠んでいるのか。**

答 故郷を離れた旅先の身で、なかなか寝つけないままに山月を仰ぎ見ながら望郷の念に浸っている状況。

補 これ以上ないほどの秋の静けさが周囲に満ちていることも指摘できる。

問 **叙景の句と叙情の句、及び対句を指摘せよ。**

答 叙景の句＝第一・二句。叙情の句＝第三・四句。対句＝第三・四句。

語句の研究

●一五一ページ

6 静夜思　古くからある楽府の題。楽府題（古く楽府に採録された詩歌の題）になぞらえて李白が作ったもの。静かな夜のもの思いの意。「唐詩三百首」では「夜思」と題されている。

7 看二月光一　「唐宋詩醇」「唐詩三百首」には「明二月光一」に作る。中国の古典詩には、故郷を離れている人の見る月は、故郷の家族も同様に眺めていることだろう、という望郷の念と結び付いて歌われる場合が多い。百五十年ほど後の我が平安前期の歌人による、「月見れば千々にものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」（「古今和歌集」巻四、大江千里）を思い起こさせる。

7 疑是　〈疑フラクハ〉は、疑うことにはの意。「ク語法」による名詞化の訓読。「疑ふらくは」という上代語の読み方に注意する。「…らく」は、上の活用語を体言化し、「…すること」の意味を表す。「是」の用法は、認定の繋詞として英語の be 動詞に相当する働きを持ち、六朝から後、現代語に及ぶ。「疑是…」で、「…ではないかと思う」の意。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

推量を表す。このように、漢詩では「疑」は不信の意ではなく、推量や比喩を導く語として機能することが多く、現代日本語の「うたがう」とは語感が異なる。「疑是銀河落二九天一」（李白「望二廬山瀑布一」）や「山重水複疑レ無レ路」（陸游「游山西村」）などが例となろう。

8 山月　「唐詩三百首」に「明月」に作る。

そのまま故郷に思いを馳せるのではなく、月から視線を外して故郷を思うところに、この詩の妙味はあるだろう。李白が「低頭」と言うのはなぜなのか、詩の中に答えはなく、読者の想像に委ねられている。

鑑賞

この詩の本文については、「語句の研究」に示されたように、起句と転句に異同があるが、ここに採用した本文が古く、かつ日本でも通行している。「唐詩三百首」など中国で通行している本文は明代以降に改変されたものであり、ここでは考慮しない。

起句と承句は、ベッドの前に差し込んだ月光にはっと気づいたさま、それがまるで霜が降りたように見えたさまが印象的に描かれ、読者を引きつける。季節は明示されないが、霜という語からは秋冬の冴えた月光を思うのが自然であろう。月と霜の対比は、李白「長信宮」に「月皎昭陽殿、霜清長信宮」と見えるところでもある。いずれにせよ前半の要点は、月と霜を結びつけて、夜半に室内を照らす月光の鮮烈さが描写されるところにある。

後半は、月は天空に浮ぶものとして、故郷を想起させる存在に変貌する。送別の「勧酒」のように承句と転句は対句になっているものの、この二句では一連の動作として描かれる。月を望んで

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **それぞれの詩の「起承転結」の構成について、確認してみよう。**

【答】 それぞれの詩の「構成」を参照。

▼ポイント▲ 必ずしも一般的な「起承転結」で説明する必要はなく、むしろ前半と後半が分けられ、それぞれの役割が分担されていることに注意させたい。そのさい、転句は詩の転換点というよりは、前後をつなぐ連結器的な役割を果たすことが多いことに気づかせることで、「起承転結」のより深い理解を得ることができよう。

言葉と表現の解答例

1 **次の漢字がどのような意味を持つか、漢和辞典で調べてみよう。**

(1) 尽（一五〇・4）　(2) 辞（一五〇・8）
(3) 催（一五一・3）

【答】 それぞれの詩の「語句の研究」も参照。

▼ポイント▲ 漢和辞典については、できれば複数のものを生徒同士でつきあわせて調べさせるとよい。

言語活動の解答例

1 **それぞれの詩の舞台や誰に呼びかけているかを比較し、どのような違いがあるか、話し合ってみよう。**

【答】 送別の詩では、別れの場面で目の前の相手に呼びかけており、別れの心情を共有する時間を大切にしたいとの思いが見えるのに対し、望郷の詩では、「涼州詞」は遠くにいる相手に向かって、自らの孤独な心情を訴え、「静夜思」は、呼びかける相手は明示されていないものの、月を媒介として故郷にのこしてきた人を思う心情が背景にあることを想像させる。

▼ポイント▲ この活動で重要なのは、漢詩もまた送り手と受け手が存在して初めて成立するコミュニケーションであることを認識させるところにある。送別詩であれば、その主目的は送別の場において送別する者に対するメッセージを発することであり、例えば現代の送別会における寄せ書きに似ているとも言える。ただ、寄せ書きと異なるのは、それ自体が一つの文学的形式をもち、その場を離れた読者を得ることが可能になっている点である。そうした読者（つまり私たち）にとっては、送別の詩は送り手と受け手のどちらの側にも立つことができ（多くは送り手かもしれない）、あるいはそれを第三者として眺めることもできる。

望郷の詩は、送り手と受け手の間に距離があることが送別とは異なっており、手紙によるコミュニケーションと似たところがあるだろう（実際に、唐代では駅逓制度が発達した）。現代では、こうしたコミュニケーションはメール等の即時性をもつ媒体によって行われることが多く、またスカイプなどを使えば、なおさらであるが、そのことを話題にして、こうした望郷の詩が故郷の人に読まれる可能性がどれほどあったのかについても議論を促すことで、人のコミュニケーションのありかたが時代によって大きく変わっていることに話題を発展させることもできる。

とりわけ「静夜詩」は、故郷の人を思いつつ、故郷にいたころという過去の時間への思いを読み取ることもでき、その読者は、故郷にいる人というよりは、望郷の思いを同じくする者が想定されているとも考えられる。

このように、実際の読者、想定された読者、あるいは想定外の読者のように分類しながら、漢詩の読者の存在に気づかせることができれば、この言語活動の目的は十分に達せられたと言える。

（齋藤　希史）

［律詩］

春望

杜甫

作者

杜甫

七一二年～七七〇年。盛唐の詩人。字は子美。悲愴な作風で唐を代表する詩人。「詩聖」と呼ばれた。襄陽（湖北省襄樊市）の人。号は少陵。先祖に晋の名将で、「春秋左氏伝」の注釈家として名高い杜預があり、祖父に初唐の宮廷詩人杜審言がある。幼少のときから神童ぶりをうたわれた。二十歳頃から十余年の間、河南・山東・江蘇・浙江の諸地方を歴遊した。開元二十三（七三五）年、進士に応じたが落第。この前後にも、何度も科挙に応じていたが、及第しなかった。三十歳頃に結婚して洛陽に住み、三男二女を得ている。天宝三（七四四）年三十三歳のときには、李白や高適と山東・河南の地を放浪し、親交を結んだ。同五（七四六）年頃長安に出、翌六（七四七）年、朝廷が一芸に秀でた者を集めて試験したとき、これに応じたが、その仕官の願いはかなわなかった。同十（七五一）年四十歳のとき、「三大礼賦」を奉って玄宗に認められ、集賢院待制の官を得、同十四（七五五）年の冬、右衛率府胄曹参軍となった直後に安禄山の乱に遭遇。霊武（甘粛省）で即位した粛宗の行在所に馳せ参じようとして賊に捕らえられ、長安に監禁された。至徳二（七五七）年、長安を脱出。鳳翔に移った粛宗のもとにたどりつき、左拾遺の官を授けられた。しかし、乾元元（七五八）年、敗将房琯を弁護したため、華州（陝西省）の司功参軍に左遷され、翌年（七五九）には飢饉のために官を捨て、家族と共に秦州・同谷（甘粛省）を経て成都（四川省）に向かった。成都では、比較的平穏な生活を営み、上元元（七六〇）年には郊外の浣花渓のほとりに草堂を建てている。また、旧友厳武の奏請によって、節度参謀・検校工部員外郎の官を得た。しかし、その生活も長くは続かず、永泰元（七六五）年、厳武が死ぬと、成都を去って長江を下り、忠州・霊安（四川省）を経て夔州（四川省）に二年間滞在。大暦三（七六八）年には、またそこを去って岳州（湖南省）へ移った。潭州・衡州（湖南省）などを転々とするが、同五（七七〇）年、舟中でひっそりと、不遇な生涯を閉じた。その一生を通じて、自己の悲哀を通して、戦乱の世の民衆の苦痛や悲哀を理解し、厳しい響きを持った言葉に結晶させていった。後世「詩聖」の名で呼ばれるのは、誠実なヒューマニズムの精神と、儒家的な信念を持つゆえである。また、常に政治や社会に対して示した深い関心のゆえに、「詩史」の称をも得ている。後世に与えた影響も絶大である。「杜工部集」がある。

出典

唐詩三百首

六巻。清の乾隆二十八（一七六三）年、孫洙編の唐詩の撰集。唐詩三百十首を詩体別に分けて編集したもの。編者の孫洙（蘅塘退士）については伝がなく、生涯の詳細は不詳である。「唐詩三百首」は、「唐詩選」が圧倒的に盛唐詩を重視して中晩唐詩をほとんど切り捨てたのに対し、各時代より公平な視点で詩を選んでいる。そのため、「唐詩選」には名前さえ登場しない白居易・杜牧らの作品も、「唐詩三百首」には前者が六首、後者が十首採録されている。韓愈・元稹・李商隠・温庭筠らの作品も、「唐詩選」では一、二首しかとられていないが、「唐詩三百首」にはそれぞれしかるべき数の代表作が採録されている。このため中国では唐詩の選集としては「唐詩三百首」のほうが重視され、日本でもその傾向が強まっている。「春望」は五言律詩の部所収。本教科書は、平凡社「東洋文庫　唐詩三百首３」（目加田誠著）によった。

主題

戦乱で荒れ果てた長安の春景色を見つめながら、捕らわれの身の作者は家族や国の運命を思い、自己の老いを憂える。

構成

第一・二句（首聯）…（対句）首都の荒廃と自然の不変性の対比。
第三・四句（頷聯）…（対句）国の運命と家族との別離への嘆き。
第五・六句（頸聯）…（対句）国の動乱の現実と家族との分断の事実。
第七・八句（尾聯）…自己の老いの現実をじっと見つめる思い。
〈詩形・押韻・対句〉　詩形―五言律詩。　押韻―「深」（第二句）、「心」（第四句）、「金」（第六句）、「簪」（第八句）。下平声十二侵韻。
対句―第一・二句。第三・四句。第五・六句。

訓読と現代語訳

①国破れて　山河在り
②城春にして　草木深し
③時に感じては　花にも涙を濺ぎ
④別れを恨んでは　鳥にも心を驚かす
⑤烽火　三月に連なり
⑥家書　万金に抵たる
⑦白頭　掻けば更に短く
⑧渾て簪に勝へざらんと欲す

①（戦乱のために）都は破壊されてしまったが、周りの山や河はもとのままにある。
②この長安のまちにも春は巡ってきて、草木は深い緑をたたえている。
③時代のありさまに心を痛めては、美しい花を見ても涙があふれ、
④家族と離れ離れになったことを悲しんでは、可愛い鳥の声を聞いても心がおののいてしまう。
⑤敵の襲来を告げる合図ののろしは何か月も上がり続け、
⑥家族からの手紙は、大金に相当するように感じられる。
⑦白くなった髪に手をやると、前よりもさらに薄くなり、
⑧もう全く、冠を留めるかんざしさえ、留められなくなりそうである。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。
❸詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹正確に現代語訳する。
❺作者と、この詩の成立の背景について説明する。
❻対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴、用語の特徴を指摘する。〔**言葉と表現** 1〕
❼全体の展開を理解し、作者の家族への思い、社会・国家への思いを理解する。
❽作品の優れているところ、日本文学への影響などを調べ、討論する。知技(2)ア
❾詩形・押韻について確認する。〔**学習のポイント** 1〕

❷対句部分に注意させ、斉読、指名読みを行う。対句部分は、音読をした際に、きわめて整然としていて、かつ印象深いことに注意させる。
❹グループで共同して訳を作らせてもよい。必ずそれらを発表させ、互いに評価させる。

展開

❺天宝十四年（七五五）に安禄山の乱が起こり、占領されていた長安に捕らわれの身となっていた作者が、家族や国家の運命を思って作った作品である。
❻「構成」の項でも触れたが、本詩は、第一・二句（首聯）、第三・四句（頷聯）、第五・六句（頸聯）が対句で構成されている。頷聯と頸聯を対句にすることは律詩の規則であるが、首聯を対句にする必要はない。しかし杜甫は、首聯から対句を用い、冒頭から、人事のもろさと自然の永遠性を鮮烈に描き出した。
❼冒頭の「国破」から、首都の破壊を嘆いていること、したがって国家の危機を嘆いていることが、容易に読み取れる。また「感レ時」「恨レ別」の語から、時代の不運、家族との別れを嘆いていることが分かる。それらを正面から凝視する詩人の厳しい姿勢にも注意する。
❽対句の分析と重なるが、表現の細部について分析しながら、詩人杜甫の、現実に対する姿勢の厳しさにも注目する。日本文学への影響は深く広いが、最もよく知られているのは、松尾芭蕉『おくのほそ道』の平泉の段である（P一〇三参照）。
　この詩の日本文学への影響を理解しているか、確認する。
❾律詩形式であるため、特に第三・四句、第五・六句が対句でなければならないことを確認させる。この詩では第一・二句も対句になっている。

発問例

● 一五二ページ

問 **第一句と第二句について、**
[中] B 何と何が対比されているのか。
[難] A 何と何が対比されているのか、適切なものを次の中から選べ。
(ア)わずらわしい人の世と雄大な自然。
(イ)荒れ果てた国土と恵み豊かな自然。
(ウ)変化の激しい人の世と不変の自然。
(エ)荒れ果てた国土と緑豊かな長安。

答 A 変化の激しい人の世と不変の自然。

問 **「感レ時（ジテハニ）」（第三句）とは「時代のありさまに心を痛める」ことであるが、どのような時代のありさまか、漢字二字で答えよ。**

答 B (ウ)
戦乱（戦争）

問 **「恨レ別（ワカルルヲ）」（第四句）とは「離れ離れになったことを悲しむ」ことであるが、何と離れ離れになったことを悲しんでいるのか、**
[易] A 漢字二字で答えよ。
[易] B 適切なものを次の中から選べ。
(ア)春　(イ)花
(ウ)友人　(エ)家族

答 A 家族・妻子
B (エ)

問 **「烽火連三月（ナリ ニ）」（第五句）について、**

語句の研究

● 一五二ページ

2 春望　春の眺望。「望」は、遠く眺める、また眺望の意。ここでは、名詞として用いられている。この詩は、至徳二（七五七）年、作者四十六歳のときの作。

3 国　首都。長安を指す。また国家、国家機構とも解釈され得る。そうした意味を重ね合わせながら、直接には首都長安を指していると考えてよい。長安は、現在の陝西（せんせい）省西安市。歴代の王朝がこの地に都を置いたが、隋の都の基礎を受け継いで唐王朝はここに壮大な首都を建設した。当時、西のローマと並ぶ、世界最大の都市だった。しかし天宝十四（七五五）年、安禄山の乱が勃発すると、翌年には叛乱軍が潼関（どうかん）の防衛線を突破して長安に迫ったため、玄宗皇帝は首都を脱出して蜀へ逃れた。かくして長安は叛乱軍の占領するところとなり、城内の各所は破壊・略奪を被った。杜甫は、賊軍に捕らえられて長安城内に連行され至徳元（七五六）年から翌二（七五七）年春まで、長安市内に監禁された。「春望」詩は、至徳二年春に制作された。

3 破　破壊される。「国破」は、「国破れて」と訓読するが、「国家が（外国との戦争に）敗れた」との意ではない。

3 山河　山と川。自然をいう。ここでは、長安の周りの自然。

3 在　ある。存在する。「有」も「あり」と訓読するが、こちらは「場所＋有＋存在物」の形で、「〜に…がある」という意味を表し、場所や保有者が明確な場合に用いる。
（例）「山水有二清音一。」（山水に清音有り。）
山水（自然）の中には清らかな音楽がある。
これに対して「在」は、「主語（存在物）＋在（＋場所）」の形で用いられ、「〜が（…に）ある」の意を表し、何があるかが明確な場合に用いられる。したがってここでは、杜甫の目に、「山河」がまぎれもなく、どっしりと、存在している、という強い印象を伴って映っていることが分かる。

4 城　まち。中国の都市は城壁で囲まれていたので、「城」は、都市全体を意味する。

4 草木深　草や木が深い緑をたたえている。「深」は、深々と茂り、辺りを覆っていること。

1 [中]◉「烽火」は、何を象徴しているのか。
2 [中]Aどのような意味か。
Bを意味として適切なものを次の中から選べ。
(ア)長安を焼く炎は三月になっても消えない。
(イ)長安を焼く炎は何か月も続いている。
(ウ)戦いののろしは何か月も続いている。
(エ)戦いののろしは三月になっても止まない。

答 1 戦争状態が続いていること。
2 A 戦いののろしが何か月も続いていること。
B (ウ)

補 「烽火」が敵の襲来を告げる合図に使われていたことを理解する。

問 第七句に「掻(カキ)」とあるが、なぜ掻くのか、[難]A説明せよ。
[中]B適切なものを次の中から選べ。
(ア)ここ数か月、髪を洗っていないから。
(イ)悲しみやいらだちの気持ちが高じたから。
(ウ)身だしなみを整えるため。
(エ)長い髪が気にかかるから。

答 A 悲しみやいらだちの気持ちが高じたから。
B (イ)

問 第七句と第八句における作者の心情について、

---

5 感レ時 時代のありさまに心を痛める。「感」は、心が動かされること。「時」は、時世、時代の意。時代の不運に心がつき動かされる。

5 花濺レ涙 花を見ても涙をこぼす。普段ならば喜びを感じるはずの花を見てさえ、涙があふれることを。「濺」は、こぼす、あふれ出る意。ただしこの句は「花も涙を濺ぎ」と訓読し、「(時世に心を痛めて)花さえも涙をこぼす」と解することもできる。

6 恨レ別 家族と別れてしまったことを苦しく思う。「恨」は、心残りに思う。苦しく思う意。「別」は、ここでは親しい人々・家族との別れ。

6 鳥驚レ心 鳥の声を聞いても心をおののかせる。普段なら可愛いと思うはずの鳥の声を聞いてさえ、心が痛むこと。ただしこの句も「鳥も心を驚かす」と訓読し、「(別離を苦しく思って)鳥さえも心をおののかせている」と解する説もある。第三句の「花」、第四句の「鳥」を、いずれも主語として読む読み方である。

7 烽火 敵の襲来を告げる合図ののろし。

7 三月 何か月も。この「三月」については諸説あり、①(前年暮れからの)三か月間、②(晩春の)三月、③何か月も、等の解釈がある。本教科書では③をとったが、他の解釈もあり得る。

8 家書 家族からの手紙。

8 抵二万金一 大金に相当する。「抵」は、ひきあてる、相当する意。「万金」は、莫大な金額の意。「金」は、黄金の重さの単位だったが、具体的な重さという意識はほとんどなくなり、「千金」「万金」等の形で用いられ、想像を絶する金額をいう。

9 白頭 白髪。白髪頭。

9 掻 手で髪をかく。「掻」は、具体的には、髪に手指を入れること。ここでは、髪に指が入るままに頭を抱えること。

9 短 少ない。欠ける意。したがって、髪が頼りなくなる。薄くなる意。

10 渾 全く、すっかり。強調を示す。ほとんど、と解釈する場合もある。

10 欲 …しそうだ。「欲」には、三通りの用法がある。①「…したい」、②「…が欲しい」、③「…しそうだ」。ここでは③の意で、傾向・趨勢を表す。

10 勝 たえられる。十分にもちこたえられる。

10 簪 冠を髪に固定するために髪に差し込むもの。日本のいわゆる「かんざし」は、女

［難］［A］**どのようなものか、説明せよ。**

［中］［B］**適切なものを次の中から選べ。**

(ア)我が身の老い、衰えに対する嘆き。
(イ)国や家族のために何もできない自分の無力さに対する嘆き。
(ウ)出世の望みも絶たれ、家族とも会えない不幸に対する嘆き。
(エ)朝廷に再び冠を着けて参列できないことに対する嘆き。

答　［A］我が身の老い、衰えに対する嘆き。
［B］(ア)

問　**この詩の主題は、どのようなものか。**

答　国が破滅の危機にあることと家族と別れてしまったことへの嘆き。

補　「国破」「感レ時」「恨レ別」等の語から、それははっきりと分かる。「恨レ別」という個人的な嘆きと、「感レ時」という個人を超えた社会的な嘆きが、緊張感をもって、互いに鮮明にし合いながら描かれていることに注意する。ただ単に個人の嘆きに終わるのではなく、逆にただ単に国家の運命を嘆くのでもなく、その両方が、相互に行き来し、支え合っているのである。

問　**この詩の対句表現を全て抜き出し、それぞれを二行に並べて書け。**

答　「構成」「学習活動のポイント」等を参照。二句ごとに、右左に並列してノートに書き写し、対句が対称性を持っていることを視覚的に確認させる。ことに返り点が同じように出てくることに注目させる。さらに、文法構造・品詞等も左右対称になることに気づかせる。

(板書例)

対句
- 烽火（主語・名詞）　連ニ（述語・動詞）　三月（補語・名詞）
- 家書（主語・名詞）　抵ニ（述語・動詞）　万金（補語・名詞）

問　**この詩の優れた表現と思われる部分をあげ、その理由を述べよ。**

補　各自に自由に述べさせたい。ことに、なぜその表現をあげるのか、その理由を述べさせる。

問　**この詩の日本文学への影響について、知っているものをあげよ。**

答　松尾芭蕉「おくのほそ道」平泉の段。

問　**詩形・押韻を調べよ。**

答　「構成」参照。

性の髪飾りであるが、中国では、身分のある男性が冠を付ける折にそれを留めるためのピンをいう。ただし、女性の髪飾りを指す場合もある。中国では、貴族・士大夫は人前では髪をあらわにせず、必ず結い上げて冠を付け、それが落ちないよう「簪」を差し込む。したがって簪には公的な場における士大夫を象徴する意味があり、その簪もさせなくなることは、老いと同時に、公的な場に立ち得ないことをも暗示する。

鑑賞

この詩は、杜甫の詩の中でも最も人口に膾炙する作と言ってよい。内容面については、すでに「学習活動のポイント」「発問例」「語句の研究」において解説しているので、ここではもっぱら形式面の工夫について解説を加える。

律詩の形式は、一般に、首聯は導入部として散句（非対句）で作詩の場面などを設定し、頷聯と頸聯は詩の中心となる描写を対句で行い、尾聯は再び散句を用いて詩意を示すことが多い。だがこの詩は、首聯から対句による描写を始めることで、いきなり杜甫の感慨に読者は引き込まれることになる。もし散句であれば、「春望」というタイトルが示すように、どこか城楼などの高い場所に杜甫が登ることをまず述べることもありえるのだが、そうした前提的描写は省かれ、「国破」という強い句が現れ、それと対照的に「山河在」という句が呼応する。「城春」と「草木深」は同様に主述構造が繰り返されているが、ここは第一句のように対照的ではない。また、第二句は「山河在」の具体的な状況について解像度を上げて春の季節のありさまを描き、頷聯への導入ともなっている。

頷聯は、幸福な季節の象徴として描かれる春の花や鳥がむしろ悲哀の対象（悲哀の主体）となっていることをうたい、頸聯は、一転して、その不幸な時間の長さを対句で示す。また頷聯までは二字と三字のリズムの切れ目がそれぞれ述語をもつ意味の切れ目ともなり、一句に二つの述語が配置される緊密感を出していたところ、頸聯は一句で一つの主述構造をとる（「烽火」「家書」はそれぞれ「連三月」「抵万金」の主語）ことでリズムを変え、切迫した悲哀の感情から長く続く憂愁への展開を支えている。

尾聯はさらに「白頭」を主語として二句が連続する構成をとり、自らのこされた時間の少なさ、公的な将来にも見通しが見えないことを締めくくりにふさわしい散句でうたう。表現としては、憂愁ゆえに「白頭」を「掻」くということ、髪の「短」がこの先の人生の短さも示そうとしていることの二つを理解すれば、「更」という字が、憂愁ゆえにいっそう老いが深まることを強調する役割を果たしていることも見えてくるだろう。

総じて、この「春望」は、描かれた情景と感情の切実さはもとより、律詩の形式としてもさまざまに工夫が凝らされていることに注意が必要である。そのすべてを教室で説明するのは過重であるが、一端なりともかみ砕いて説明する機会があれば、漢詩の表現技巧についての理解を深める助けになるであろう。

八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一

白 居易

作者

白居易

七七二年〜八四六年。中唐の詩人。字は楽天。太原（山西省太原市）の人。号は酔吟先生・香山居士。幼少より文才を現し、貧困の中で刻苦勉励した。貞元十六（八〇〇）年、進士に及第。このとき、終生の友元稹も合格している。その後、秘書省校書郎を授けられ、元和元（八〇六）年、才識兼茂明於体用科に応じ、元稹が首席、白居易は次席で合格した。この年、盩厔（陝西省周至県）の尉を授けられている。翌元和二（八〇七）年翰林学士となり、同三（八〇八）年には左拾遺に就任。元和五（八一〇）年、京兆府戸曹参軍に転じたが、翌年、母陳氏の喪に服して退任し、喪が明けた元和九（八一四）年、長安に召喚されて太子左賛善大夫となった。翌年、武元衡暗殺事件に際して、即座に賊を逮捕するよう上奏したことが越権行為とみなされ、江州（江西省九江市）の司馬に左遷された。元和十三（八一八）年には忠州（四川省忠県）の刺史に任ぜられたが、同十五（八二〇）年、穆宗が即位すると、再び都に召喚されて司門員外郎となり、次いで主客郎中・知制誥に任ぜられた。翌元和十六（八二一）年、中書舎人となったが、長慶二（八二二）年には、自ら外任を希望して杭州（浙江省杭州市）の刺史となった。ここでは、治水工事に力を注ぎ、銭塘湖の利水事業などを成し遂げた。長慶四（八二四）年、太子左庶子に任ぜられ、東都洛陽に分司された。この冬、元稹の手によって「白氏長慶集」の編集が完成した。宝暦元（八二五）年、蘇州（江蘇省蘇州市）の刺史となったが、翌年には眼疾を患い、辞任して洛陽に帰った。太和元（八二七）年、秘書監に就任し、紫衣と金魚袋を賜った。太和二（八二八）年、刑部侍郎を拝したが、病気を理由に洛陽に退隠した。その頃長安では牛李（牛僧孺と李徳裕）の党争が始まっていた。太和二（八二九）年、太子賓客として洛陽に分司され、その後、河南尹・太子賓客分司・太子少傅などの官を歴任し、会昌二（八四二）年、刑部尚書をもって致仕した。没後、尚書右僕射を追贈されている。友人の元稹と共に、杜甫の社会批判の精神を継承し、数多くの諷諭詩を作って「新楽府運動」を起こしたが、晩年は閑適詩を専ら作成した。自分の詩を諷諭・閑適・感傷・雑律の四種に分類し、自らは諷諭詩を重視したが、世人の評価が高かったのは、感傷詩や雑律詩であった。その詩は、「元軽白俗」（元稹は軽々しく白居易は俗っぽい）と評されるように、口語や俗語を避けない平易流暢な表現を目指すものであった。我が国の平安朝文学への影響は計り知れないものがあり、菅原道真の漢詩や紫式部の「源氏物語」の成立は白居易の文学を抜きにしては考えられない。韓愈と共に「韓白」と併称される。「白氏文集」がある。

出典

白氏文集

七十一巻。白居易が自らの詩文を集めて編集したもの。もと七十五巻あったが、それは一時の編ではなく、白氏長慶集五十巻（長慶四年・八二四年）・後集二十巻（太和二年・八二八年）・続後集五巻と漸次集められて、会昌五（八四五）年に成ったものである。その間にも、六十巻（東林寺本。太和九年・八三五年）、六十五巻（聖善寺本。開成元年・八三六年）、六十七巻（南禅寺本。開成四年・八三九年）と、別個にたびたび集められている。現在、もとのものは伝わらない。現存するものは七十一巻である。通行しているものの中にも、配列や字句に異同が見られる。中でも、宮内庁所蔵の「白氏長慶集」七十一巻は、我が国、那波道円の古活字本（元和四（一六一八）年。北宋刊本に由来している）であり、前集・後集・続集の体制を整えて文集の旧を伝え、最も信のおけるものとされる。「八月十五日夜、禁中独直、対レ月憶二元九一」は巻十四所収。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　白氏文集三」（岡村繁著）によった。

主題

中秋の名月の夜、たまたま宮中に宿直した作者は、遠く江陵に左遷された親友元稹（げんしん）を思い、その身の上を心配する。

構成

第一・二句（首聯）…壮麗な宮中の建物に夜は更け、私は翰林院に宿直をしている。〈場面の設定〉
第三・四句（頷聯）…（対句）昇ってきた満月の光には、遠く離れた親友の元稹の心が見えるようだ。〈月の光による直感〉
第五・六句（頸聯）…（対句）君のいる江陵ではもやが漂い、私のいる宮中では時を告げる鐘の音が響く。〈友と自分の居場所の対比〉
第七・八句（尾聯）…江陵はじめじめしているので、君がこの月の光を見られないのではないかと心配する。〈友への心情〉

〈詩形・押韻・対句〉　詩形―七言律詩。
押韻―「沈」（第一句）・「林」（第二句）・「心」（第四句）・「深」（第六句）・「陰」（第八句）・下平声十二・侵韻。
対句―第三句・四句、第五句・六句。頷聯のように「三五」と「二千」の数字の対応をしている対句を「数対」と呼ぶことがある。

訓読と現代語訳

①銀台　金闕　夕べ沈沈
②独り宿し　相思ひて　翰林に在り
③三五夜中　新月の色
④二千里外　故人の心
⑤渚宮の東面　煙波冷ややかに
⑥浴殿の西頭　鐘漏深し
⑦猶ほ恐る　清光　同じくは見ざるを
⑧江陵は卑湿にして　秋陰足る

①宮中の美しい高殿や門がしんしんと更ける夜に静まるころ、
②私は一人宿直して、遠い君に思いを馳せて翰林院にいる。
③八月十五日中秋の夜、昇り始めた月の光を眺めると、
④二千里の遠方にいる君の心情が思われる。
⑤君のいる江陵の渚宮の東の方では、もやや波が月光を受けて冷たく光っているだろう。
⑥私のいる宮中の浴殿の西側では、時刻を告げる鐘と水時計の音が静かに刻まれてゆく。
⑦（君もこの名月を見ているであろうが、それでも）私はなお心配する。この清らかな月光が、そちらでは私と同じように見えぬのではないか、と。
⑧君のいる江陵は土地が低く、湿気が多く（じめじめした土地で）、秋の空もくもりがちだというから。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❷ 一斉読み。その後、指名によって音読する。その際、対句に注意する。
❸ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❹ 正確に現代語訳する。
❺ 作者と、この詩の成立の背景について説明する。
❻ 対句表現を指摘し、それぞれの対句の表現上の特徴を理解する。〔**「言葉と表現」1**〕
❼ 全体の流れから、作者の友情の深さがどのように表現されているかを理解する。
❽ 詩形・押韻について、確認する。〔**「学習のポイント」1**〕

❶句中の切れ目がはっきりするように範読する。
❷七言律詩の詩形を理解し、対句がどこにあるかを確認させる。単元の中で最も字数の多い詩であり、対句の美しさに特徴があることに注意し、丁寧に音読させる。
❹漢和辞典を引いて、訳出させる。辞書で引かせる語句は、「銀台」「金闕」「相思」「故人」「煙波」「西頭」「清光」等。訳を作るのが困難であれば、辞書による調査に止め、おおまかな意味を考えさせておくだけでもよい。
❺「作者」をもとに簡潔に説明する。
❻(a) 首聯－華麗な宮中の建物の点描と、その中で一人で友を思う自分との対比。
(b) 頷聯－数字を軸にした対句。月の光と友の心を対比させながら実は両者を結び付け、友の心情を理解していることを示す。
(c) 頸聯－場所を軸にした対句。自分と友のいる場所を対比し、友の身の上を思いやる。
(d) 尾聯－友のいる江陵の地を集中して描き、月の光を友が見られないかもしれないという不安と、そうでないように祈る願望とを描く。
最終的には、(a)と(d)が対応し、自己のいる華麗な宮中のさまと、友のいるじめじめした江陵のさまとが対比されて浮かび上がる。「発問例」を参考に、対句について、どのような対比が見られるかを考える。
(a) 例えば、頷聯では「新月」と「故人」が対応しているが、「新」（あたらしい）と「故」（ふるい）という修飾語が見事に対称となっている。同じく「色」（目に見えるもの）と「心」（目に見えないもの）とが対称となっていて、目に見える月の「色」（光）によって、目に見えない友の

「心」を実感する作者の思いが分かってくる。

(b) また頸聯では、「渚宮」と「浴殿」が、宮殿の名前によって、二人のいる場所を対称的に表している。「東面」と「西頭」は方角を対比している。「煙波」は視覚的表現であるのに対し、「鐘漏」は聴覚的表現である等、豊かな対比によって奥深い思いを描いている。

❼ ❹ ❺をまとめ直し、全体が名月の光とからみあうように、友情が表現されたものであることを理解する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶【律詩】の詩について、まとめの学習活動を行う。

知技(2)イ、思判表B(1)ア・イ・ウ・エ　主態　**〔言語活動 1〕**

ア「春望」を書いた当時の杜甫の境遇と時代背景を調べる。

イ「八月十五日夜…」を書いた当時の白居易と元稹の境遇と時代背景を調べる。

ウ詩と時代の関わりについて、杜甫と白居易の共通点と相違点について考える。

❶**ア**…最初に、八世紀の中国の状況について、教科書や百科事典、中国史の概説書等を利用しながら、全体の流れを把握させる。さらに、この詩が至徳二載（七五七年）三月に作られたことを示し、その前年の六月、安禄山によって長安が陥落して玄宗が蜀へと脱出し、七月に粛宗が霊武（今の寧夏回族自治区）で帝位について至徳に改元したことに注意させる。杜甫の境遇としては、杜甫が粛宗の即位を聞いてそのもとに行こうとして安禄山の軍に捕らえられ、長安に監禁されたこと、家族は鄜州に疎開していたこと、さらにこの詩を作った後の四月、杜甫は長安を脱出して粛宗の行在所にたどりついたこと（「作者」の項参照）などを説明する。参考文献として川合康三『杜甫』（岩波新書、二〇一二）、指導者用として松原朗編『杜甫と玄宗皇帝の時代』（勉誠出版、二〇一八）、川合康三『杜甫』上（明治書院、二〇一九）を活用するとよい。

イ…白居易と元稹の歩みについて、彼らが進士に及第した貞元十六（八〇〇）年から、この詩が制作された元和五（八一〇）年まで確認をし（「作者」の項参照）、彼らが科挙による新興官僚として官位を上昇させつつ、権臣や宦官との軋轢もあり、それが元稹の左遷を招いた（江陵への左遷は、監察御史であった元稹が宦官仇士良と衝突したことによる）ことに注意させる。

白居易については川合康三『白楽天』（岩波新書、二〇一〇）など多くの参考文献があるが、元稹については、小川環樹編『唐代の詩人』（大修館書店、一九七五）、「デジタル版集英社世界文学大事典」（JapanKnowledge, https://japanknowledge.com）など限られているので、指導者が材料を提供するなどの工夫が必要になる。白居易と元稹の交遊については、太田次男ほか編『白居易の文学と人生２』

（白居易研究講座、勉誠出版、一九九三）が参考になる。また、官位への理解もある程度必要になるが、向嶋成美編『李白と杜甫の事典』「李白と杜甫の時代　二唐代の政治と官制」がコンパクトにまとまっていて、全体像を把握するのに役立つ。

ウ…杜甫と白居易の官僚としてのありかたの違いをまず把握させ、八世紀から九世紀にかけての時代の変化にも気づかせる。杜甫が皇帝から直接任命されているために、いったん皇帝が不在になれば孤立してしまう運命であるのに対し、白居易は元稹とともに受験勉強をして進士に及第しているため、皇帝権力の存在は大きいにせよ、国家の官僚として横のつながりがある。教材の二首の詩においては、「春望」が孤独のうちにうたわれているのに対して、「八月十五日夜…」は友へ呼びかける詩であるところに、そうした境遇の違いを感じ取ることができる。また、前者には戦乱による切迫感があるのに対して、後者には一定の秩序を回復した時期の叙情があることも、時代背景の違いを理解させるポイントとなるだろう。

【評価】 杜甫と白居易のの境遇と時代背景を踏まえて内容の解釈を深めているか、また二つの詩を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

● 一五三ページ

問 **第一・二句（首聯）について、**
A 作者のいる場所がどのように表現されているか、第一句・第二句それぞれについて述べなさい。
B 作者はどのような場所にいるのか、簡潔に答えよ。

答 A 第一句＝「銀台」「金闕」とあり、宮中の華麗な「台」「闕」などの建物群に囲まれている。
第二句＝「翰林」（翰林院）とあり、「翰林院」という役所にいるのだが、一瞬「林」の中にいるような静寂と孤独を感じさせる。
B 宮中の「台」「闕」などの建物群に囲まれた翰林院という場所（役所）。

補 この他にも「沈沈」で、宮中が月光の中に静まりかえっていること、「独宿」「相思」で、作者が孤独の中に友を思って宿直していることが考えられる。

問 **元稹は今どこにいるのか、詩中の語で答えよ。**

答 江陵

問 **「三五夜中新月色」（第三句）を現代語訳せよ。**

語句の研究

● 一五三ページ

1 八月十五日夜　旧暦中秋の名月の夜。時に元和五（八一〇）年八月十五日の夜、三十九歳の白居易は翰林学士として長安の宮中において宿直にあたり、親友の元稹は左遷されて江陵（湖北省荊州市）にいた。

1 禁中独直　宮中で一人宿直をする。「禁中」は、宮中。天子の居所。「直」は、とのい。宿直すること。

2 元九　元稹。「九」は排行（一族同世代の兄弟・いとこなどの年齢の順位）。七七九年〜八三一年。字は、微之。中唐の詩人。河南の人。貞元十六（八〇〇）年の進士。作者の親友で、このとき江陵（現在の湖北省荊州市）に左遷されていた。

3 銀台　銀台門。翰林院の南側の門の名。

3 金闕　金鑾門。翰林院の西隣の門の名。金鑾殿ともいう。ただし、「銀台」「金闕」どちらも、より広く、宮中の華麗な建築群を指していると考えることもできる。教科書では、後者の説に従い、「銀台金闕」で、「宮中の美しい高殿や門」と解した。

3 沈沈　（夜が）しんしんと更ける。

3 相思　（君を）思う。「相」は、下の動詞がはっきりとした対象を持っていることを示す助字。ここでは、「お互いに」という意味ではない。

3 翰林　宮中の役所の名。翰林院。当時作者は、翰林学士だった。翰林院は、天子の詔勅や上奏文を扱う宮中の役所。その詔勅作成を行うのが翰林学士。作者は、他の官職を兼ねて、この職に当たっていた。

4 三五夜　十五夜。掛け算の形でいったもの。

4 新月　夜空に昇り始めた月。現代日本語では、ふつう、「陰暦で、月の初めの頃出る月」を意味するが、ここでは違う意味である。

4 二千里外　二千里の外。二千里も遠く離れていること。「外」は、自分のほうから見て、（遠い）彼方。

4 故人心　友の心。「故人」は、古くからの知り合い、昔からの友人。ここでは元稹を指す。

5 渚宮　戦国時代の楚王の宮殿。元稹のいる江陵にあった。ここでは実際には、江陵の役所をいう。

5 煙波　もやが立ちこめた水波。もやのかかった水面。また、もやと波。

答　八月十五日中秋の夜、昇り始めた月の光よ。

問 ◉**「二千里外故人心」（第四句）とは、誰の、どのような心のことを言うのか。**

答　二千里もの彼方に遠く離れている友（元稹）の心を思う（友の心をしのぶ）、作者の心。

補　第三句は動詞「見」が省略されており、第四句は動詞「思」が省略されていると考えることができる。つまり「見二新月色一」と、「思二故人心一」のである。次のように板書してみてもよい。

（板書例）　見二三五夜中新月色一
　　思二二千里外故人心一

ただし、この他にも解釈の可能性はある。「昇り始めた月の清らかな光は、遠く離れた君の清らかな心そのもののよう（に輝いている）」とか、「昇り始めた月の光を、友も私を思う心で見ているだろう」等。体言だけで構成されている対句なので、解釈に広がりが出るのは、むしろ自然である。

問 **第七・八句（尾聯）について、**

1 **「猶恐清光不二同　見一」（第七句）とあるが、**
①(1)**「恐」、(2)「不二同　見一」の主語はそれぞれ誰か。**
Ⅱ**「猶恐」とは、(1)何を、(2)なぜ恐れているのか、分かりやすく説明せよ。**

2 **この二句（尾聯）は、作者のどのような思いを表しているのか。**

答 1
①(1)作者（白居易）
(2)元稹
Ⅱ(1)この月があなた（元稹）には見えないのではないかということ。
(2)あなた（元稹）のいる江陵は土地が低くて湿っぽく、秋に曇りの日が多いから。

2 元稹も今夜、同じように月を見ているだろうか、江陵は曇りで月が見えないのではないか、という不安感。それは、同じ体験（名月を見る）を共有できないのではないかという、孤独感・寂寥感でもある。さらに、そこに友（元稹）の身に、何か不吉なことが起こらなければよいが、という（不安を打ち消そうとする）願望・祈念も込められている。

問 **詩形・押韻を調べよ。**

答 「構成」参照。

5浴殿　長安の宮中にあった宮殿。浴堂殿。翰林院の東南にあった。

5西頭　西の辺り。「頭」は、「辺り」の意。「浴殿西頭」とは、作者の宿直をしている翰林院をいう。

5鐘漏　「鐘」は、時を告げる鐘。「漏」は、漏刻で、水時計をいう。

6清光　月の清らかな光。

6卑湿　（土地が）じめじめしている。土地が低く、湿気が多い。「卑」は、低いこと。中国では当時、長安・洛陽を中心とする北方のほうが中央であり、政治・文化の中心だったため、南方の土地に対して、低湿で風土病の多い所と感じていた。

6秋陰　秋ぐもり。

鑑賞

大江維時『千載佳句』以来、とりわけ頷聯は日本でも人口に膾炙している。「学習活動のポイント」の「展開」の項で詳説しているように、「春望」とは異なって、散・対・対・散という標準的な律詩の構成をとり、整った印象を与える。散句である首聯においても、「銀台」と「金闕」、「独宿」と「相思」が対偶をなし、さらに第一句で宮殿、第二句で自身のすがたを描き出すという入れ子的な対偶構成をとりつつ、七言句による叙述の細やかさも確保している。頷聯と頸聯も対の軸が明確であることは詩の安定感に寄与している。

一方で、それに止まらない点もある。頸聯では、「渚」と「浴」、「波」と「漏」のように対になっている文字が水に関わる語となって、尾聯の「湿」への伏線を形成していることは、技巧として認めてよいであろう。そして尾聯は、始めの「猶恐」から結びの「足秋陰」まで、思いを伝える月光すらも遮られるかもしれない土地にいる友を案じる心で貫かれており、むしろ不安感が強調されている。首聯の構成とは明らかに異なっているのである。

つまり、七言律詩としてきわめて整った形をとり、月を介して思いを伝え合うという伝統的なモチーフを用いながら、それがかなわないかもしれないという不安を友の境遇への思いと重ねて、尾聯へと高めていく流れもまたこの詩の特色である。そしてその不安は友からの返事によって解消されるはずであった。

実際、元稹からは白居易の詩の韻字を用いた「酬二楽天八月十五夜禁中独直玩レ月見レ寄」（『元氏長慶集』巻一七）が返されている。だが、「煙霄」（もや）の向こうに月が見えにくいことが言及され、彼我の境遇の差をむしろ強調して、白居易の思いを素直に受け取る詩にはなっていないようである。憶測を逞しくすれば、結句は、江陵の自然を想像して描くのみならず、左遷された元稹の鬱屈した心情を思いやって重ね合わせようとしたものかもしれず、また、白居易にその意図はなくとも、元稹はそのように受け取ってしまったものかもしれない。この詩を元稹との詩の応酬の文脈に置き直せば、境遇の差が友情に波風を立たせかねないことも含めて、また異なったすがたが見えてくるであろう。

ちなみに元稹の返詩は、用韻詩、すなわち白居易の詩の韻字を順不同にすべて用いた次のようなものであった。

酬二楽天八月十五夜禁中独直玩レ月見レ寄（楽天の八月十五夜禁中にて独り直し月を玩びて寄せらるに酬ゆ）

一年秋半月偏深　一年秋半ばなれば月偏へに深し
況就二煙霄一極二賞心一　況んや煙霄に就きて賞心を極むるをや
金鳳台前波漾漾　金鳳台前　波は漾漾たり
玉鉤簾下影沈沈　玉鉤簾下　影は沈沈たり
宴移二明処一清二蘭路一　宴は明処に移り蘭路を清め
歌待二新詞一促二翰林一　歌は新詞を待ちて翰林を促す
何意枚皐正承レ詔　何の意ぞ枚皐　正に詔を承るに
瞥然塵念到二江陰一　瞥然として塵念　江陰に到るとは

一年でも仲秋となれば月の趣は深い、まして高い空の雲を従えてその美しさを愛でるのならなおさら。宮中の金鳳台の前に波は揺れ、玉鉤の簾の下に影が静かに映っていることだろう。宴は明かりに照らされた広間に移り帝のお出ましになる

道を清め、歌は翰林学士の君が新たにつける歌詞を待つばかり。かの漢の武帝の寵愛を受けた枚皐よろしく詔を受けようとする時に、君はなぜまたふと浮んだ雑念を長江南岸の地に寄せてくるのかね。

冬至に向かうにつれて満月の南中高度は上がるので、それも「月偏深」とする背景にある。また「煙霄」には比喩として高位を指す例が白居易の詩にもあり、ここにもそうした含意があろう。つまり宮中の宴で月見を楽しむ白居易を自分とは立場の違う者として最初から描き、頷聯と頸聯も長安の宮殿の華やかなさまをうたい、尾聯に至って、どうしてまたそんな君がこんな境遇の私に詩など送るのかね、と言うのである。

「何意」は、君はどうして、でもあるし、思いがけないことに、の意味にもなるが、ここは屈折をこめた前者と考えておく。ちなみに、「瞥然塵念」という語は、元和十（八一五）年、つまりこの詩の五年後に、江州（江西省）司馬に左遷されていた白居易が通州（四川省）司馬であった元稹に送った有名な書翰「元九に与ふる書」にも使われており、白居易にとって胸に刺さったことばだった。元稹の詩に屈折したところがあるにしても、白居易はそれも受け止めていたようで、そうしたところが彼らの友情を長続きさせたのかもしれない。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **律詩の標準的な形式を確認し、それぞれの詩と比較してみよう。**

【答】それぞれの「鑑賞」参照。

言葉と表現の解答例

1 **対句表現を抜き出し、どのような対になっているか、単語ごとに確認してみよう。**

【答】それぞれの「学習活動のポイント　展開」参照。

言語活動の解答例

1 **杜甫と白居易の当時の境遇と時代背景を調べ、二つの詩を比較して、その違いがどのように表れているか、発表してみよう。**

【答】「八月十五日夜、…」の「学習活動のポイント　まとめ」参照。

【日本漢詩】

富士山　石川 丈山

作者

石川丈山

天正十一（一五八三）年～寛文十二（一六七二）年。江戸時代初期の漢詩人。名は重之（しげゆき）、号は丈山・詩仙堂。三河国碧海郡泉村（愛知県安城市和泉町）の代々徳川家に仕える家に生まれた。慶長三（一五九八）年より家康の侍臣として武勲に励んだが、慶長二十（一六一五）年、大坂夏の陣において先陣を切ったことが軍令違反に問われたのを機に、武門を去って妙心寺に入って禅を修め、また近世儒学の祖とされる藤原惺窩（一五六一年～一六一九年）に入門した。一時は浅野家に仕官したものの、寛永十二（一六三五）年より京都に住み、詩作に興じた。寛永十四（一六三七）年には堀川松原の本国寺で朝鮮通信使の権侙と筆談を交わし、自作の詩二百余篇を献じたところ「日東の李杜」との評を得て、詩を唱和した。その後、洛北一乗寺村に隠棲し、狩野探幽に、漢から宋までの詩人三十六人の肖像を描かせ、これを壁間に掲げて詩仙堂と号した。詩仙堂では、林羅山、堀杏庵、元政上人など当時の著名な文人らともっぱら詩文の交わりを楽しみ、寛文十二（一六七二）年五月にその生涯を閉じた。著書に漢詩集の「覆醤集（ふしょうしゅう）」があり、没後に改めて編纂された全集「新編覆醤集」がある。

主題

富士山を仙客が来遊し神竜が棲む神聖な山と称え、白扇を逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようだとたとえている。

出典

新編覆醤集

石川丈山の漢詩文集。正集四巻、続集十六巻。序・目録・年譜、また付録三巻をあわせて二十四巻十四冊。延宝四（一六七六）年刊。丈山没後、門人の石川克によって編刊された。本書は、近世前期を代表する漢詩文集というに値する内容であると高く評価された。しかし一方では、江村北海の「日本詩史」（明和八（一七七一）年刊）において「拙累多くして往々俗習を免れず」と酷評された。本書に先んじて丈山生前に刊行された「覆醤集」（寛文十一（一六七一）年刊）もある。書名の「覆醤」は、「醤油瓶のふたにする紙」の意で、著作の価値を低めて言う。もとは「漢書」揚雄伝に見える。本教科書は、岩波書店「江戸詩人選集　一」（上野洋三著）によった。

構成

第一（起）・二（承）句…富士山には仙人が訪れ、神龍が棲む。（仙山の描写）
第三（転）・四（結）句…雪を絹に、煙を柄にたとえ、富士山を逆さまにした白扇に見立てる。（冬の富士山の美しさに着目した比喩）
〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「巓（テン）」（第一句）・「淵（エン）」（第二句）・「天（テン）」（第四句）。下平声一・先（セン）韻。
対句―第一句・第二句。

訓読と現代語訳

富士山（ふじさん）

①仙客（せんかく）来り遊ぶ雲外（うんがい）の巓（いただき）
②神竜（しんりょう）棲（す）み老（お）ゆ洞中（どうちゅう）の淵（ふち）
③雪は紈素（がんそ）のごとく煙（けむり）は柄（え）のごとし
④白扇倒（はくせんさかしま）に懸（か）かる東海（とうかい）の天（てん）

富士山

①鶴に乗った仙人も来て遊ぶという、雲の上にまで突き出した山の頂。
②久しく神秘的な竜が棲むという、洞穴の中の深い淵。
③（山を覆う）雪は扇に貼る白い練り絹地のようであり、立ち上る煙は柄のようである。
④まるでこれは、白扇を逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようである。

学習活動のポイント

展開

❶日本漢詩文を通史的に確認する。中国との関係も補足説明する。
【評価】日本漢詩文と漢文の関係を理解しているか、確認する。
❷起句・承句・結句における上四字が下三字の連体修飾になっているように、意味の切れ目と訓読の切れ目に留意させる。
❸内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❹数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❺難解な語句はほとんどないので、指名読み後、ただちに現代語訳させてもよい。詩の韻律を尊重し、説明的にならない現代語訳を工夫させ、互いに評価し合うなどする。
❻江戸時代の漢詩人が抱いた富士山のイメージと、現代において我々が抱くイメージとの相違点と共通点が的確に把握できるように、指導者が補足説明をする。
❼押韻している文字に印を付けさせて確認する。

学習活動のポイント

❶日本漢詩文の歴史を理解する。知技⑵ア
❷詩の黙読。その後、範読を聞く。
❸一斉読み。その後、指名によって音読する。
❹詩の書き下し文を完成させる。知技⑵ウ
❺正確に現代語訳する。
❻富士山の情景を、比喩を使ってどのように表現しているか考察する。**〔「学習のポイント」1、「言語活動」1〕**
❼詩形・押韻について確認する。

発問例

● 一五四ページ

問　**「仙客」（第一句）、「神竜」（第二句）という語により、富士山にどのようなイメージを加えているか。**

答　元来、神聖な山として崇められていたことに加えて、中国的神仙世界のイメージを加えている。

補　「仙山」（仙人がいるという山）、「仙閣」（仙人が住む楼閣）、「仙楽」（天上の美しい音楽）などの漢語があることにも触れる。

問　**「白扇」にはどのようなイメージがあるか。**

答　きらびやかな装飾を排した純粋な美しさを印象づけるイメージがある。

補　「語句の研究」を参照。

語句の研究

● 一五四ページ

3 仙客　鶴に乗った仙人。鶴そのものの異称でもある。「仙人」とは、人間界を避けて山中に入り、不老不死の術を修行した者。霞や露を食べ、空を飛ぶという。

3 神竜　神秘的な竜。竜は、四つ足、角、長い髭がある想像上の動物。雲を起こし雨を降らせ、春分には天に昇り、秋分には淵に隠れるという。縁起のよい動物とされる。富士山には洞穴があって、不思議な霊力のある竜が棲みついていると信じられていた。

4 紈素　扇に貼る白い練り絹地。

4 煙　「煙」は普通は「靄（もや）」の意で用いられるが、当時の富士山は火山活動を行っており、白い煙を吐いていたので、ここでは、けむり、の意にとってよい。ちなみに宝永の大噴火（一七〇七年）は、石川丈山が没して三十五年後である。また、富士山頂に湧き昇る「雲気」であるとする説もある。

4 柄　扇には団扇のように柄はないが、ここでは特に立ち昇る煙を柄に見立てている。

4 白扇　古代中国における扇は円形の「団扇」であり、折畳み型の扇子は平安時代の日本で作られ、その後、中国に輸出されて中国でも作られるようになったとされる。丈山は唐詩を手本としたが、『全唐詩』に「白扇」の語は一例しかなく（温庭筠「西陵道士茶歌」の「仙翁白扇霜鳥翎」）、仙人との関係は示唆されるものの、直接の典拠とは言えず、白い羽毛で作った団扇と考えたほうが自然である。むしろここでは丈山の生活の身近にあった白扇を比喩に用いたところに興趣があろう。なお室町中期の禅僧万里集九には「（上杉）管領顕定、就二夜遊之座一、出二白扇一需レ賛、即席援レ筆」（管領の上杉顕定が夜宴の坐で白扇を出して詩賛を求めたので即座に筆を執る）と題した詩に「一柄威風八州定」の句があり（「梅花無尽蔵」巻二）、武人が白扇を携え、時に詩を書きつける習いがあったことがうかがえる。また五山僧の詩に扇面に書かれたものも多い。そうした文脈を考慮に入れるならば、結句の「白扇」は、かつて武人であり、いま詩人である丈山にふさわしい比喩とも言え、逆さまの白扇は書きつけるべき詩を促していると言えるかもしれない。

4 東海天　「東海」は東方の海上にある国の意から、日本の異称。

鑑賞

しばしば日本のシンボルとされる富士山を、江戸時代初期の漢詩人である石川丈山が、その文雅な感性で描写した詩である。日本古典文学においても、富士山は神聖な山として、またその形状の美しさなどが讃えられてきた。この詩では、それに加えて中国的神仙世界の要素を盛り込み、元来神聖な山とされていた富士山を、より具体的に「仙山」としてのイメージを付加することに成功している。第一・二句における神仙的要素から一転して、第三・四句では「扇」の形状との類似という身近な要素を取り上げて、富士山の美しさを描写していく。第四句では、「白扇」が「逆さまに吊り下げ日本の空高くに懸けたかのようだ。」という端的な比喩表現で締めくくる。その素朴さが、いかにも富士山の威光を讃えるにふさわしい表現となっているともいえよう。誰もが知っている富士山であるからこそ、詩で表現する場合には難しさが伴うはずである。しかし、漢詩の持つ観念的要素と比喩表現を巧みに組み合わせることで、印象深い表現に至った作ということができるであろう。

なお、東海上に蓬萊山という仙山があるという中国の伝説のイメージをここで利用していること、「語句の研究」に述べたような「白扇」の文脈があることにも留意しておきたい。

烏児塞宮

成島 柳北

作者

成島柳北

天保八（一八三七）年～明治十七（一八八四）年。幕末から明治初期にかけての漢詩人・随筆家・ジャーナリスト。名は惟弘。字は保民。幕府の奥儒者の家に生まれ、幼時から家学を受けて詩文を善くし、将軍家定・家茂の侍講となった。また幕末に外国奉行・会計副総裁として活躍した。維新後は野に下り、向島に隠居し、時世から離れた生活を楽しんだが、明治五（一八七二）年欧米に外遊、帰国後は朝野新聞の社長となり、在野の輿論を代表する存在となった。政府の言論弾圧の犠牲となり、投獄されたこともある。明治十年には、漢詩文、和歌、随筆などを載せる文芸誌「花月新誌」を創刊して、多くの文人の寄稿を集めた。

柳北は文明開化へと向かう一方の時勢に批判的態度をとり、批評性の高い漢文の奇文・戯文を得意とした。「柳橋新誌」「京猫一斑」などの代表作があり、永井荷風などに大きな影響を与えた。柳北の号は、柳原（神田川沿いの堤の名。隅田川に流入する手前にあり、柳橋はそこにかかっていた）の北に居をかまえたことによる。

出典

航西日乗

成島柳北が明治五年から外遊したさいに書かれた日記体の欧米旅行記。明治十四年から十七年まで「花月新誌」に連載。もと漢文で書かれたものを連載にあたって訓読体に改めたと思われる。明治初年の知識人による西洋文明体験記として重要であるのみならず、旅行中に書かれた漢詩を多く載せ、西洋の事物を題材とした漢詩の広がりを示す点でも貴重である。その漢詩は「柳北詩鈔」（博文館、一八九四）にも収録される。本教科書は、「柳北詩鈔」を底本とする岩波書店「江戸詩人選集　十」（日野龍夫）によった。「航西日乗」所載とは若干の異同がある。

主題

パリ郊外のヴェルサイユ宮殿を訪れ、過去の栄華をしのびつつ、いまはただガラス窓の向こうに夕陽が照るだけと感慨にふける。

構成

第一（起）・二（承）句…かつてフランスの皇帝がこの離宮を訪れ、后姫と睦まじく歌ったことに思いを馳せる。（歴史の追想）
第三（転）句…その場にあった調度品などはもとのままだが、宮殿の主人はもういない。（懐古の情）
第四（結）句…あたかも日暮れどき、ガラス窓には夕日の光が照り映えている。（感慨と情景）
〈詩形・押韻・対句〉 詩形―七言絶句。　押韻―「過（カ）」（第一句）・「歌（カ）」（第二句）・「多（タ）」（第四句）。下平声五・歌（カ）韻。

訓読と現代語訳

訓読	現代語訳
①想（おも）ふ曽（かつ）て鳳輦（ほうれん）幾回（いくくわい）か過（よぎ）り	① 思えばかつて王や皇帝がこの離宮をいくたびも訪れ、
②来（きた）りて淑姫（しゅくき）と長（なが）く晤歌（ごか）せしを	② 美しき王妃たちとともに歌い楽しんだのであった。
③錦帳（きんちょう）依然（いぜん）たるも人（ひと）見（み）えず	③ 錦のとばりは当時のままだが、ここにいた人は誰もいない。
④玻璃窓外（はりさうがいせきやう）夕陽（おほ）多（タ）し	④ ガラス窓の外には、夕陽の光があふれ照り映えている。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶ 作詩の背景について確認する。
❷ 詩の黙読。その後、範読を聞く。
❸ 一斉読み。その後、指名によって音読する。
❹ 詩の書き下し文を完成させる。知技(2)ウ
❺ 正確に現代語訳するとともに、その内容も理解する。
❻「鳳輦」「淑姫」「錦帳」が漢文では何を連想させるか、考える。〔**学習のポイント**」1〕
❼ 西洋的な要素がこの詩に見られるか、見られるとすればそれによってどのような効果があるか、考える。〔**言語活動**」1〕
❽ 詩の主題となる感情（感慨）はどのようなものか、考える。〔**言葉と表現**」1〕
❾ 詩形・押韻について確認する。

❶「作者」「出典」等も参照して、明治初年に文明開化のための欧米視察がさかんに行われたことを確認する。
❷ 意味の切れ目と訓読の切れ目に留意させる。
❸ 内容を考えながら丁寧に読むよう指示する。
❹ 数名を指名して板書させ、訂正箇所があれば指摘する。
❺ 前半が二句でひとまとまりの文となっていることに留意する。
❻ 漢和辞典を使って語彙を調べさせ、西洋の皇帝や后妃を中国的な措辞で表現することの意味に気づかせる。
❼ 異国情緒を示すような表現について、西域を描いた詩（「涼州詞」）と比較させる。
❽ 懐古や詠史を主題とする文学作品を思い起こさせる（例えば百人一首の「ももしきや古き軒端のしのぶにも」などを取り上げてもよい）。
❾ 押韻している文字に印を付けさせて確認する。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶【日本漢詩】の詩について、まとめの学習活動を行う。
知技(1)ア・ウ　(2)ア・イ、思表判B(1)イ・ウ・エ　主態

〔言語活動 1〕

ア　漢詩の表現を日本にふさわしいものにする工夫について考える。

イ　漢詩の表現を西洋にふさわしいものにする工夫について考える。

ウ　同時に、漢詩としての普遍的な表現がどちらの詩にも含まれていることを確認する。

ア…最後に「東海天」で締めくくることで、富士山が日本を象徴する名山であることを示している。一方で、古代中国の蓬萊山伝説を意識していることを確認するため、辞書や事典などで蓬萊や蓬萊山を調べさせるなどの活動をしてもよい。

イ…ヴェルサイユ宮殿の「鏡の回廊」（「鏡の間」とも。庭園に面した側に大きなガラス窓が並び、反対側に鏡が埋めこまれた回廊）について、インターネットや世界史の参考書などで、その歴史や様子を確認させる。柳北がヴェルサイユ宮殿を訪れた前年の一八七一年には、普仏戦争に勝利したドイツがここでウィルヘルム一世の戴冠式を挙行していた。

ウ…「富士山」については、目前の情景を仙界に見立てたり、仙界への憧憬をうたうことが漢詩の伝統的なモチーフであることを説明し、その上に「白扇」という印象的なイメージで真っ白な冬の富士山を重ねていることに目を向けさせる。「烏児塞宮」では、歴史を振り返ってその栄枯盛衰や有為転変を述べて自己の感慨を示すことが漢詩の伝統的なモチーフであることを説明し、「烏児塞宮」がそうした様式を踏まえつつ、西洋の宮殿ならではの光景と歴史を読者に想像させていることに留意させる。

【評価】それぞれの学習活動について、詩の内容をもとに的確に解釈しているか、ノートや提出物などにより確認する。

発問例

● 一五四ページ

問 **「鳳輦」（第一句）とは実際には何を指しているか。**

答 王や皇帝が乗る馬車。

補 「語句の研究」の「鳳輦」の項を参照。

問 **「淑姫」「晤歌」（第二句）は『詩経』の句を用いているが、どのような効果があるか。**

答 未知の西洋の王や皇帝を既知の中国の王や皇帝のイメージを通して理解させる効果がある。

補 たとえば、ナポレオンとマリー・アントワネットを玄宗と楊貴妃にたとえて、その運命と悲劇を理解しやすいようにする効果がある。「語句の研究」参照。

問 **「人不レ見（エ）」（第三句）の「人」とは誰か。**

答 **補** 当時ここにいたフランスの皇帝や后妃たち。歴史上の人物と広くとることもできるが、「錦帳」は「航西日乗」に「帝ノ后妃ヲ迎ヘ給ヒタル室ニハ錦帳繡褥燦爛タリ」（「鑑賞」を参照）とあり、それと対比してのことだから、皇帝と后妃をまずは念頭においているとしてよいだろう。

問 **「夕陽多（シ）」（第四句）とはどういうことか。**

答 大きなガラス窓いっぱいに夕日の光が溢れているさま。

語句の研究

● 一五四ページ

6 烏児塞宮　ヴェルサイユ宮殿。ルイ十四世によってパリ郊外に建てられた。「学習活動のポイント」の「まとめ」にも記したように、ヴェルサイユ宮殿は現在のように完全に観光地化されてはおらず、なお歴史の舞台であった。

7 鳳輦　天子の乗る車。鳳輦には仙人が乗る車という意味もあるが、ここではむしろ皇帝のイメージが強いであろう。日本では天皇が乗る輿のことで、人が担いだが、中国では乗り物全般を指す。皇帝が乗っていた馬車は、宮殿内の馬車博物館に蔵され、柳北は実見している（「鑑賞」参照）。

8 来　「航西日乗」では「来」を「好」とし、「よし」と読んでいる。そうであれば軽い肯定の感動詞になるが、起句と承句の間に切れ目が生じてしまい、かといって対偶にもならず、やや落ち着かない。

8 淑姫　しとやかで美しい妃（きさき）。次項参照。

8 晤歌　顔を合わせて歌う。『詩経』「東門之池（ち）」に「彼美（ル）淑姫、可（シ）二与晤歌（ス）一」とある。ここで『詩経』の句を用いることで、漢詩のフィルターを通して西洋の歴史を理解しようとしている。明治初年の西洋理解は、まず中国などの既知の歴史や事物を通じて、未知の西洋文明を理解しようとする方法が主流であった。

9 錦帳　錦のとばり。宮殿にかかる豪華なカーテンをこのように表現した。具体的には、「指導上の注意点」にも記したように、王妃の寝室のそれと思われる。

9 依然　もとのまま、往時のまま。現代日本語では「依然として」のように副詞的に用いられることが多いが、ここは「依然たり」と読み、「錦帳」と「人」、「依然」と「不レ見」が対比され、もとのままここにある、ということ。

9 不レ見　「航西日乗」は「見」を「在」とするが、「見」のほうがより感覚的で感慨を導きやすいだろう。

10 玻璃　ガラス。ヴェルサイユ宮殿の豪華さの一つに大きなガラス窓の多用がある。この「玻璃窓」が必ずしも「鏡の回廊」のそれを指すわけではないが、宮殿のどこであれ、ガラス窓に光があふれる様子はやはり象徴的な情景であったと考えられる。江戸時代ではガラス窓は輸入品で、一般には普

問 詩形・押韻を調べよ。

答 「構成」参照。

及しておらず、ましてヴェルサイユ宮殿のような巨大な建築物に用いられたガラス窓の壮麗さは、柳北を驚かせたであろう。明治以降も、洋館などではガラス窓が用いられ、生産も始まったが、本格的な普及となると、関東大震災以降だとするのが通説である。つまり、この「玻璃窓」は西洋文明の象徴でもある。

鑑賞

「烏児塞宮」は詩そのものとしては特別な名詩とは言えないかもしれないが、西洋の事物に初めて直に触れた日本人が、漢詩というフィルターを通してその文明を受容したことの重要性に鑑み、明治期にさかんに作られた海外渡航詩の中では、形も整っていてイメージも明確であることから、採用した。また、成島柳北という人物について知る機会もあってよいと考える。

前半は『詩経』の典故を用いつつ、まるで「長恨歌」の世界を髣髴とさせるような言葉づかいで進められ、転句において過去への懐古の情が高まっても、なお伝統的な漢詩の枠内にあると言える。ただ、「鳳輦」も「錦帳」も漢詩に使われて不思議のない語彙であるが、じつは柳北が実見したものであるところに、柳北のような知識人が西洋文物をどのように知覚／受容したかが示されている。

結句に「玻璃窓」を置いて西洋の宮殿の壮麗さを一気に読者に印象づけ、また「夕陽」が李商隠の「登二楽遊原一」の「夕陽無限好」を連想させるように、ただの夕陽ではなく、歴史的時間の推移をも示す働きがあることを利用して締めくくるのは、おそらくはその場であらあら成ったと思われるこの詩にも、さすがに漢詩に習熟した柳北の安定感が見られると評価してよいであろう。以下、参考のために「航西日乗」の記事を「海外見聞集」（新日本古典文学大系明治篇）から引用する。ヴェルサイユの庭から吹上御苑を思い起こして感慨にふけるところなどは、旧幕臣として明治政府には出仕しなかった柳北ならではであり、この詩にもいささか反映するところがあると解してよいかもしれない。なお、注釈や解説については同書もしくは井田進也校注「幕末維新パリ見聞記」を参照されたい。

（明治五年十一月）十一日木曜晴　［…］一時廿五分ノ汽車ニ乗リセイヌ河ノ上流ヲ渡リ［…］二時ウエルサイユニ達ス　此地ニハ国会有リ　大統領チエル君モ此ニ居ラル　「トリアノ」宮ヲ観ル　宮ハ路易十六世ノ居リ給ヒシ処ニテ那破侖第一世モ亦此宮ニ住マレシコト有リ　宮中ニ路易十四世十五世二王ノ肖像アリ　最モ宏麗ナルハ魯西亜国ヨリ那破侖帝へ贈ラレシ孔雀石ノ大水盤及ビ花瓶燈台也　又同帝ノ読書室有リ臥榻机案其他依然トシテ旧面目ヲ存セリ　帝ノ后妃ヲ迎ヘ給ヒタル室ニハ錦帳繡褥燦爛タリ　人ヲシテ当時ノ事ヲ追想セシム　宮中ニ在ル所ノ時辰器卓子ノ如キ皆宝石ヲ以テ之ヲ造ル　其ノ美ナル驚ク可シ　又車輿ヲ蔵スルノ処有リ　那破侖帝ノ駕セシ車及ビ那破侖第三世ノ大婚ニ用ヒシ車路易十五世十六世ノ車等馬具ニ至ル迄尽ク具ハル　一トシテ荘麗ナラザル無シ　此宮ノ内園ハ甚ダ我ガ旧幕府ノ吹上苑ニ似タリ　覚エズ感愴ノ情ヲ発セリ［…］

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **それぞれの詩の主題は何か、考えてみよう。**

【答】「富士山」は、機知をまじえて日本の景物を描写すること、「烏児塞宮」は、西洋の宮殿を見て歴史をしのぶことにそれぞれ主題がある。

▼ポイント▲　「学習活動のポイント」「語句の研究」「鑑賞」を参考にして、漢詩が語句を通じてイメージを操作することによって主題を明確にする文学であることに気づかせる。

　そのさい、語句のイメージが一つに限定されるのではなく、いくつかの層からなっていること、とりわけ現実の事物に伝説や歴史を重ねることで、そうした複数のイメージの層を作り上げていることに、注意を向けさせる。「富士山」であれば、比喩によってそうした複数の層が構成され、「烏児塞宮」であれば中国の歴史と西洋のそれとの重ね合わせによって、複数の層が構成されている。それぞれの主題は、漢詩に特有であると言えるが、同時に、それぞれ日本と西洋という別の世界のイメージが重ねられることで、新たな漢詩の世界が獲得されているところに、こうした漢詩のおもしろさがあることを理解させたい。

言葉と表現の解答例

1 **次の語について、それぞれどのようなイメージを読者に与えるか、話し合ってみよう。**

(1)　仙客（一五四・3）　**(2)　神竜（一五四・3）**

(3)　鳳輦（一五四・7）　**(4)　玻璃（一五四・10）**

【答】(1)と(2)は仙界のイメージ、(3)は中国の皇帝のイメージ、(4)は西洋文明のイメージ。

▼ポイント▲　漢和辞典を引かせ、類義語などを列挙させる。指導者は「学習活動のポイント」「語句の研究」「鑑賞」を参考に、そのイメージの広がりについて説明を加える。

言語活動の解答例

1 **富士山やヴェルサイユ宮殿を漢詩の題材とすることの効果について話し合い、発表してみよう。**

【答】　それぞれ富士山やヴェルサイユ宮殿など、日本やヨーロッパの景物や建築物を対象として、中国で生まれた漢詩という形式を用いることで、複数の世界が融合したような表現を実現させている。

▼ポイント▲　おもに「学習活動のポイント」の「まとめ」をふ

まえた説明を行い、中国的なイメージと日本的なイメージ、西洋的なイメージを感じられる語句を抜き出させ、なぜそう感じられるのかをグループで話し合う。

さらに、それらのイメージが組み合わさることで、唐詩などとは異なった世界が描かれているかどうか、描かれているとしたらそれはどのような点においてかを議論させ、適宜指名して発表させる。「語句の研究」「鑑賞」を利用して、指導者が示唆を与えながらこうした作業を進めることも有効である。

（齋藤　希史）

漢詩の手引き

漢詩　漢字で書かれた中国の古典詩を、我が国では「漢詩」と呼んでいる。またそれに倣って日本人が作ったものも「漢詩」と呼ぶ。古くはただ「詩」といえば、この漢詩のことだった。「詩」とは「からうた」つまり漢詩のことで、「歌」が「やまとうた」つまり和歌であるのと対応していた。

押韻　漢詩の大きな特徴は、脚韻を踏むことである。これを「押韻」という。韻というのは、音の響き（具体的には、中国語の語頭の子音を除いた部分、すなわち母音と語末音および声調を合わせた音の響き）のことで、「押韻」とは、一定の句の末尾に同じ響きの文字をそろえて配置することである。漢詩は「近体詩」と「古体詩」に大別されるが、そのどちらも必ず「押韻」することが要求される。以下、例として引いた詩中の◎は押韻している文字を示す。

- 詩
  - 古体詩（句数に制限がない）
    - 四言詩（一句四文字）
    - 五言古詩（一句五文字）
    - 七言古詩（一句七文字）
    - 雑言詩（一句の字数不定）
  - 近体詩
    - 絶句（四句から成る）
      - 五言絶句（一句五文字）
      - 七言絶句（一句七文字）
    - 律詩（八句から成る）
      - 五言律詩（一句五文字）
      - 七言律詩（一句七文字）
    - 排律（十句以上の偶数句から成る）
      - 五言排律（一句五文字）

近体詩　唐代に入って完成した定型詩を「近体詩」（今体詩）と呼ぶ。

中国語には、それぞれの漢字で記される一語の音に、音の高低があり、それを「声調」と呼んでいる。「近体詩」は、その声調を、平声（平らで高い音）と、仄声（かたむいて屈折した音）とに二分し、平声と仄声の語（文字）を規則正しく配列したものである。

近体詩には、四句から成る「絶句」、八句から成る「律詩」、十句以上の偶数句から成る「排律」（長律）があり、その各々に五言（一句が五文字から成るもの）と七言（一句が七文字から成るもの）の別がある。ただし、七言排律の例はほとんどない。また六言詩もあるが、少数である。

絶句　四句から成り、五言絶句と七言絶句の二種類がある。五言絶句は二・四句末に押韻（一句目に踏む場合もある）し、七言絶句は一・二・四句末に押韻（一句目は踏まない場合もある）する。

押韻している文字は、その漢字を音読みしてみると響きの似ていることが多い。（次ページの詩「秋風引」の群・聞／「送二元二使一安西一」の塵・新・人）

絶句には「起・承・転・結」の構成法がある。それは、第一句で印象深く鮮やかにうたい起こし、第二句でそれを承けて内容を展開し、第三句でがらりと転換させて奥行きのあるものとし、第四句で全体をまとめて余韻のある結びとする、というものである。すべての絶句がそのように作られているわけではないが、作詩法として広まった。

〈五言絶句〉

秋風引（劉禹錫）

何処秋風至（起句）
蕭蕭送雁群（承句）
朝来入庭樹（転句）
孤客最先聞（結句）

〈七言絶句〉

送元二使安西（王維）

渭城朝雨浥軽塵（起句）
客舎青青柳色新（承句）
勧君更尽一杯酒（転句）
西出陽関無故人（結句）

律詩　八句から成り、五言律詩と七言律詩の二種類がある。五言律詩は、二・四・六・八句末に押韻（一句目に踏む場合もある）し、七言律詩は、一・二・四・六・八句末に押韻（一句目は踏まない場合もある）する。

律詩では、二句を一まとめにして「聯」と呼ぶ。そのため一首の律詩は四聯から成り、首聯・頷聯・頸聯・尾聯と名付けている。この四聯の構成は、絶句の起・承・転・結に倣うのがよいとされ、また頷聯と頸聯はそれぞれ「対句」であることが標準とされる。

「対句」とは、対応する二つの句の同じ場所に同じような働きをする語が並んでいるものをいう。

〈五言律詩〉

春夜喜雨（杜甫）

好雨知時節　（首聯）
当春乃発生　（首聯）
随風潜入夜　（頷聯）対句
潤物細無声　（頷聯）対句
野径雲倶黒　（頸聯）対句
江船火独明　（頸聯）対句
暁看紅湿処　（尾聯）
花重錦官城　（尾聯）

なお「排律」（長律）という形式は、律詩の対句部分を増加したもので、十句以上の偶数句から成る。

古体詩　中国では、唐代に入って近体詩が完成するよりもずっと前の時代から、詩が作られていた。それを「古体詩」（古詩）と総称している。古体詩の最古の詩集は、紀元前六世紀末に成立したと考えられる『詩経』である。「古体詩」の決まりは近体詩のように厳格ではなく、自由である。この形式の自由さは近体詩の完成した後も人々から愛され、唐代以後もたくさ

んの古体詩が作られた。つまり、唐代以後に作られた自由な形式の詩も「古体詩」と呼ばれている。古体詩には、句数の制限がない。一句を構成する字数によって四言古詩・五言古詩・七言古詩・雑言詩（一句の字数が不定のもの）などの区別がある。

〈五言古詩〉

子夜呉歌（李白）

長安一片月
万戸擣衣声
秋風吹不尽
総是玉関情
何日平胡虜
良人罷遠征

唐詩　唐代（六一八年～九〇七年）は、長い中国の詩の歴史の中でも黄金時代と呼ばれるほど、優れた詩人が多く出た時代だった。その唐代の詩は、四つの時期に区分されることが多い。「初唐」は、唐王朝の始まりからの約百年間で、前代の貴族的な詩から脱皮して若々しく力強い詩が生み出されるようになってきた時代である。次の約五十年間は「盛唐」と呼ばれ、唐帝国の国力が最高潮に達した時期であり、華麗でありながら雄大な気風の作品が作られ、多くの大詩人が活躍した。だが安禄山の乱（七五五年）を境に、国は急速に衰え、その後を受けた「中唐」の約七十年間は、社会矛盾に目を向けた詩が作られたり、表現の方法を工夫して奇抜なものにしようとする傾向が現れるなど、多彩な展開が見られる。最後の「晩唐」の約七十年間は、唐が滅亡してゆく時期に当たり、詩は爛熟期を迎え、暗い不安や隠された情念を描いたり、虚構性を強めるなどの新しい動きが生まれた。

雑説

韓愈

作者

七六八年〜八二四年。中唐の文豪で唐宋八大家の一人。字は退之、諡は文公。河陽（河南省）に生まれる。一説に、鄧州南陽（河南省）の人。また、自ら遠祖の出を昌黎（遼寧省）と称していたことから、韓昌黎とも呼ばれる。幼くして父母をうしない長兄の韓会に養われたが、その兄も亡くなると兄嫁の鄭氏に養育された。貞元八（七九二）年、二十五歳で進士に及第し、その後しばらくは節度使の幕僚として各地を転々としたが、貞元十八（八〇二）年に国子四門博士となり、初めて正式に任官した。貞元十九（八〇三）年、三十六歳で監察御史となるも、京兆尹（首都長安の長官）である李実の悪政を弾劾したことから、陽山県（広東省）の令に左遷される。後に長安に戻り、国子博士・比部郎中兼史館修撰・考功郎中兼知制誥などを経て、刑部侍郎となった。しかし元和十四（八一九）年五十二歳のとき、憲宗皇帝が仏舎利を宮中に迎え入れようとしたのに「仏骨を論ずる表」をたてまつって反対したため、潮州（広東省）の刺史に左遷された。その後再び中央に戻り、国子祭酒（国立大学長）から兵部侍郎（軍事次官）、吏部侍郎（官吏任用の役所の次官）となり、長慶四（八二四）年に五十七歳で没した。この最後の官職によって韓吏部とも呼ばれる。

「李・杜・韓・柳」（李白・杜甫・韓愈・柳宗元）と併称されるほどの文章家である韓愈は、白居易と並んで中唐の代表的詩人だが、柳宗元らと共に六朝以来の四六駢儷文に反対し、漢以前の古文復興に努力したことが最大の業績とされる。また、「韓門の弟子」と世に言われるほど、友人門下を引き立て面倒をよくみた。李翺や皇甫湜などは韓愈の弟子として知られている。

著作は「昌黎先生集」四十巻がある。伝は、「旧唐書」巻百六十、「新唐書」巻百七十六に見える。

出典

唐宋八家文読本

清の沈徳潜（一六七三年〜一七六九年）の編。三十巻。乾隆四（一七三九）年成立。唐宋八大家の散文を集めたもの。古文の大家である、唐の韓愈・柳宗元、宋の欧陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曽鞏・王安石の八人を並称して、唐宋八大家という。この書は、明の茅坤（一五三年〜一六〇一年）の「唐宋八大家文鈔」一六四巻及び清の儲欣（一六三一年〜一七〇六年）が増補して、八家のほかに李翺・孫樵を加えて著した「唐宋大家全集」と、八家それぞれの本集を綜覧して抜鈔したものである。沈氏は、毎編に評点、段落をつけ、総評を加え、前人の批評の妥当なものを取り、文中の記事に必要な参考資料を付録した。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐宋八家文読本一」（星川清孝・田森襄著）によった。

参考文献

❊ 教師用

「唐宋八家文　一」（中国古典選）清水茂　朝日新聞社　昭五十三

「研究資料漢文学6　文」渡辺英喜・田部井文雄・吉崎一衛　明治書院　平五

「唐宋八家文読本　一」（新釈漢文大系）星川清孝・田森襄　明治書院　昭五十一

❊ 生徒用

「漢文名作選4　文章」巨勢進・向嶋成美　大修館書店　昭五十九

「唐宋八大家文読本〈韓愈〉」（新書漢文大系）星川清孝　明治書院　平十八

「漢文塾　漢字文化の魅力上」田部井文雄　明治書院　平二十二

主題

一日に千里を走る名馬は、いつでも存在するが、それを見分けることのできる伯楽のような鑑定者は、いつも存在するとは限らない。このために、名馬もその能力を発揮できることなく、虚しく埋もれてしまっている。それなのに「天下に名馬無し。」とされるのは、まことにいたたまれない。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～一五八・3〈不下以二千里一称上也。〉	千里を走る名馬は、伯楽によって見いだされる。名馬はいつもいるのに、伯楽はいつもいるとは限らないために、名馬と分からず平凡な馬並みに扱われ、能力を発揮することなく死んでいく。

第二	一五八・4〈馬之千里者〉～ 一五八・5〈不下知二其能千里一而食上也。〉	また、飼い主は名馬を、その能力を知らずに飼っている。
第三	一五八・6〈是馬也〉～ 一五八・8〈安求二其能千里一也。〉	その名馬は不当な扱いによって、十分な能力を発揮できないばかりか、平凡な馬と同じ程度の力すら出すことができなくなる。
第四	一五九・1〈策レ之〉～ 一五九・2〈「天下無レ馬。」〉	それなのに、名馬を見分ける力のない飼い主は、名馬を目の前にして「名馬がいない。」と嘆くのだ。
第五	一五九・3〈嗚呼〉～ 終わり	その状況に対して作者は嘆息する。本当に名馬がいないのか、それとも本当は名馬を正しく見分けられないのではないか、と。

訓読と現代語訳

【第一段】①世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。②千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。③故に名馬有りと雖も、祇だ奴隷人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死して、千里を以て称せられざるなり。

【第二段】④馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。⑤馬を食ふ者は、其の能く千里なるを知りて食はざるなり。

【第三段】⑥是の馬や、千里の能有りと雖も、食飽かざれば、力足らず、才の美を見はすこと無きなり。

【第一段】①世の中に伯楽（馬の鑑定の名人）がいて、そうして初めて一日に千里を走る名馬が存在するのである。②一日に千里を走る名馬は、常にいるけれども、（それを見分ける）伯楽は、いつもいるとは限らない。③だから、もし名馬がいたとしても、（伯楽がいなければ、名馬としての本領を発揮できず）ひたすら身分の低い使用人の手で粗末に扱われ、かいばおけの間で（平凡な馬と）首を並べて死んで、千里の名馬とたたえられないで終わるのである。

【第二段】④馬の中で千里を走るものは、一食にひょっとすると穀物一石を食べてしまうこともある。⑤（ところが）馬を飼うものは、その馬の能力が一日に千里を走ることを知っていて飼うのではないのである。

【第三段】⑥（そこで）この馬は、もし一日に千里を走る能力があったとしても、十分に食べられないので、その能力を発揮できず、天分の優れていることが外に現れな

外に見れず。⑦且つ常馬と等しからんと欲するも、得べからず。⑧安くんぞ其の能く千里なるを求めんや。

【第四段】⑨之を策うつに其の道を以てせず。⑩之を食ふに其の材を尽くさしむる能はず。⑪之に鳴けども其の意に通ずる能はず。⑫策を執りて之に臨みて曰はく、「天下に馬無し。」と。

【第五段】⑬嗚呼、其れ真に馬無きか、其れ真に馬を知らざるか。

い。⑦そのうえ、普通の馬と同じ働きをしようとしても、その機会を求めることもできない。⑧（これでは）どうしてその馬に一日に千里も走るという能力を求められようか、いや、求められるわけがない。

【第四段】⑨馬を鞭打って使うのに、名馬を扱うのにふさわしいやり方を用いない。⑩（また）馬を飼うのに、名馬としての才能を発揮させることができない。⑪（馬が）飼い主に鳴いて訴えても飼い主の心中に伝えることができない。⑫（飼い主は）鞭をしっかり握って名馬を見下ろして、「天下に名馬はいない。」と言う。

【第五段】⑬ああ、そもそも本当に名馬がいないのだろうか、（それとも）そもそも本当は馬を理解していないのではないだろうか。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中国の散文の特徴について理解する。

❶「散文」は、脚韻を踏まない文章であり、作家の思考や事実の記録などを行う普通の文章である。韓愈「雑説」は、唐代の古文復興運動を代表する優れた散文である。これらのことを、板書等で明示する。

《板書例》

○散文について

駢文

・字数を整え（四字と六字の組み合わせが多い）、対句を基本とする文章。四六駢儷体。
・六朝時代に発達し、唐代以降も形式を重んじる公的な文体として用いられた。
・「令和」の典拠となった「梅花歌序」（『万葉集』）もこの文体で書かれている。

古文

・字数を整えず、漢代以前の文章を手本とする文章。対句も用いるが、形式的になることは避ける。散文。
・韓愈や柳宗元によって作られ、事実の叙述（記事）や作者の主張（論説）に用いられた。
・形式よりも内容が優先されるので、文章を論理によって構成する意識が強い。

○古文の基本要素

・主張
・事例
・比喩
・読者への問いかけ・自己の感慨

「読者への問いかけ・自己の感慨」は最後に来ることが多いが、その他の要素の配置は自由。

展開

学習活動のポイント

❶ 韓愈について理解する。
❷「雑説」の構成と主張を理解する。
❸ 範読を聞いて、音読する。
❹ 正確な現代語訳をもとに、要旨をノートにまとめ発表する。
❺ 否定形・限定形・受身形・反語形・詠嘆形・疑問形を理解する。知技(2)ウ
❻「天下無レ馬。」の「馬」はどのような馬のことか考える。
❼「伯楽」「千里馬」「奴隷人」「常馬」は、それぞれ何を例えているか考える。
❽ 本文の構成を図にまとめる。思表判B(1)ウ〔「学習のポイント」1〕

❶教科書の作者紹介に加えて、六朝時代に隆盛した技巧中心の散文（駢文）の文体を改革し、内容のある文章を書くことを唱え、文章によって政治、社会の革新に貢献しようとしたこと、科挙試験に何度か落第し、官職については左遷され、立身出世までに韓愈は幾度かの曲折を経たこと、その苦労は彼の剛直な性格、意志の強さも影響したことなどについて簡単に紹介し、彼の文章の雰囲気をより身近に感じるための助けとする。

❷「雑説」についての解説（「学習のポイントの解答例」および「言語活動の解答例」）を参考に、寓話や逸話のように見えながら、実際は、世の中の現状に対する作者の主張・憤懣・感慨が述べられていることを説明し、「史伝」の単元で学んだ文章との違いを考えさせる。

❸範読を正確に聞き取らせる。注意すべき読みとして「伯楽不二常有一。」「祇辱二於奴隷人之手一」「不下以二千里一称上也。」「雖レ有二千里之能一」「安求二其能千里一也。」「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」などがある。

❹予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。正確な現代語訳をするために、「伯楽」「然」「雖」「称」「食」「能」「飽」「見」「等」「不レ可レ得」「策」の解釈に注意させる。授業終了後、ノートを提出させ、各自がまとめた要旨の内容を確認する。

❺「不二常有一。」（否定形）・「祇辱二於奴隷人之手一」（限定形）（受身形）・「安求二其能千里一也。」（反語形）・「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」（詠嘆形）（疑問形）を理解させる。「句法」参照。

【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❻文脈から考えさせ、一、二名に指名する。名馬を扱うのにふさわしいやり方をせず、その能力を発揮させられず、馬の気持ちも解さない飼い主が、名馬を目の前にして発した言葉であることから考えさせる。

❼諷喩文であることに注意して全体を読解し直し、それぞれ何を例えているかを考えさせる。有能な人材を「千里馬」に例えて

いることに気づかせ、推察させる。

《板書例》

●それぞれ何を例えているか

「伯楽」　―優れた人材を見抜き登用する名君・賢相。
「千里馬」―優れた才能のある人物。
「奴隷人」―人の能力を見抜く力のない下級官吏。
「常馬」　―才能のない並みの人物。

また、「駢二死於槽櫪之間一」「粟一石」の比喩するところもあわせて考えさせる。

❽「学習のポイントの解答例」1参照。

【評価】本文の構成について分かりやすく図にしてまとめ、本文の特徴を捉えているか、ノートや提出物などにより分析する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか話し合う。思表判B⑴ア・イ　主態　**〔「言語活動」1〕**

❶誰を、何を批判しようとしたのかを考えさせる。導入で触れた彼の境遇などをあわせて考えるとよい。また、「世有二伯楽一、然後有二千里馬一。」についても考え、話し合わせる。

発問例

●一五八ページ

問 **「辱二於奴隷人之手一」（2〜3行目）とは、どのようなことか。**

答 身分の低い使用人に粗末に扱われるということ。

問 **「才美不二外見一。」（6〜7行目）とあるが、なぜか。**

答 名馬は一食で穀物一石を食べてしまうこともあるが、十分な食糧を与えられていないので、力を発揮できないため。

補 「馬之千里者…食不レ飽、力不レ足」（一五八・4〜6）から考えさせる。

語句の研究

●一五八ページ

説 文体の一種。比喩などによって自分の意見を述べた文。「雑説」は短編四種の総称で、これは第四「馬の説」。他は第一竜の説、第二医の説、第三鶴の説。

1伯楽 馬の鑑定の名人。姓は孫、名は陽。春秋時代、秦の穆公のときの人。馬の鑑定が巧みであったといい、「荘子」外編馬蹄第九「善く馬を治む」とある。天厩星の傍の伯楽星という天馬を掌る星が孫陽のあだ名となった。後に馬に明るい人をいうようになった。我が国で、牛馬の売買・仲介を業とする人を「ばくろう」（博労、馬喰）というが、これは「はくらく」の音の転じたものという。ここは人物を見抜く眼力のある名君・賢者の例え。

1然後 そののち、それからの意で、事柄や時間の前後関係を表す接続詞。

1千里馬 一日に千里を走るほどの名馬。唐代では「一里」は約五六〇メートル。後の「名馬」も同じ。ここでは才能の優れた人物を指し、暗に自分に充てている。

2雖レ有二名馬一 「雖」には、逆接の仮定条件と確定条件の意味がある。この部分を仮定条件ととると「もし名馬がいたとしても」となり、確定条件ととると「名馬がいるけれども」となる。「雖」の後に主語がある場合は逆接の仮定条件であることが多いため、前者の訳をとった。下文の「雖レ有二千里之能一」の用法も同じ。

2辱 自信や体面がくじけてがっくりする。台無しにされたつらさ。類義語の「恥」は、きまりが悪くバツが悪くて心がいじける、きまり悪い気持ちにさせる、の意。

2奴隷人 身分の低い使用人。下男。馬丁。無知な馬屋番人。ここでは暗に、雑務係の下級役人に充てている。

3駢死 （平凡な馬と）首を並べて死ぬ、の意。「駢」は漢音で「ヘン」と読む。二匹の馬が首を並べていることを表す。ここでは、優れた人材が埋もれたままで死んでいくことの例え。

3槽櫪之間 かいばおけの間。「槽」「櫪」は、いずれも、かいばおけ。一説に「櫪」は馬小屋の床板ともいわれる。ここでは、優れた人材が埋もれてしまっている場所の例え。

3不下以二千里一称上也 「以二千里一」は「称」にかかる連用修飾語。「以」は、「…で・…

●一五九ページ

問 ◉この「馬」（2行目）とは、どのような馬のことか。

答 名馬。

補 愚劣な主人が鞭を振り上げて、傲然と名馬の前に立ちはだかって言う言葉が、皮肉にも「天下に馬無し。」である。ここが全文中のクライマックスであり、無知な飼い主は戯画化されて嘲笑の的になる。続いて作者は「嗚呼」と泣き笑いの嘆息をもらしながら、「本当に名馬がいないのか、それとも全く名馬を名馬としてずばりと当てられないのか。」と、自分は一歩退いて、読者の決定に任せるという結び方をしている。

問 「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」（3行目）とは、誰の言葉か。

答 作者。韓愈。

によって」という手段や原因・理由を示す前置詞である。つまり、「以二千里一称」は、「千里（の馬）という理由で称える」となる。文意上「称」は受身であり「称セラル」と読み、全体は「千里の馬と称えられないのである」となる。この「称」は、「ほム」「たたフ」の訓で読むこともできる。

4或 副詞。あるいは、ひょっとしたら。

4粟 小さくてぱらぱらした穀物。穀物の総称。稲やきびなどの外皮のついたままの実。

4一石 「石」は容量の単位。当時の一石は約六〇リットル。十分な俸給に例えられる。

7且 そのうえ。一説に「しばらク」と読み、「まあ、せめては…」の意を表すという。

●一五九ページ

1策レ之 「策」は動詞で、馬を鞭打つ、また鞭で打つように刺激を与える、の意。「策レ之」「食レ之」の「之」は馬を指し、「鳴レ之」の「之」は飼い主を指す。ただし、三つとも語調を整えるために置かれた語と解する説もある。

1其道 名馬を扱うのにふさわしいやり方。

1材 「才」と同じ。

1鳴 「鳴」の本義は、存在を告げる。ここでは馬が声を出す意味であるが、声をかすらせてなく意味の嘶（セイ）にあてて、「いななく」の訓で読むこともできる。なお、曹植「求二自試一表（自ら試みられんことを求むる表）」（『文選』巻三七）に「騏驥長鳴、伯楽昭二其能一（騏驥長鳴して、伯楽其の能を昭（あきら）かにす）」の句が見える。

2臨 高い所から下を見る。ここでは、名馬の前に傲然と立ちはだかって見下ろす。

3知 ずばりと当てる。本質を正しく見通す。感覚や判断、記憶などの働きを含む。

句法

伯楽不二常有一。 否定形。「不二常有一」は、「常有(ニ)リ」（いつでもいる）を否定した文で、「つねニハあラズ」と読み、「いつもいるとは限らない」の部分否定の意味を表す。これに対し、「不レ有(ラ)」（いない）の前に副詞「常」を付けた文「常不レ有」は、「つねニあラズ」と読み、「いつでもいない」の全部否定の意味を表す。

祇辱二於奴隷人之手一 「祇」は、「一筋に・ひたすらに」の意。限定形。「祇(ダ)……」の形で、「ただ……」と読み、「ただ……だけ」の意。「辱二於奴隷人之手一」は、「……(ラル)二於……一」の形の受身形。「……（ニ）……ラル」と読み、「……に……される」の意味。

安求二其能千里一也。 反語形。疑問詞「安」は「いづクンゾ」と読み「どうして」と理由を問い、文末の助字「也」と呼応している。反語形は、「どうして……しようか、いや、……しない。」と、疑問の形をとりながら、それとは正反対のことを強く表す言い方である。疑問形と反語形は、基本的に副詞（何・誰・安など）も助字（乎・邪など）も同じであるため、疑問形であるか反語形であるかは、文脈から区別する必要がある。

嗚呼 詠嘆形。「嗚呼……」の形で、「ああ……」と読み、「ああ（……だなあ）」の意。

其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。 「邪」と「也」は、それぞれ文末に付いて疑問の意を表す助字。また「其」は、疑問・反語の文の述語の前に付けて強調の語気を表す助字である。二つの事柄をもち出し、その当否について強く問いを投げかけ、どちらかを選ばせる形。こうした表現では読者が後者を選択することを作者は予想、期待している。

鑑賞

この文は、馬を例えにして、世に優能な人材を見いだし、登用することのできる為政者がいないことを諷したものである。

「世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。」何気ない書き出しであるが、これは全体の主旨であり、作者の主張を端的に表したものである。名馬というのは、伯楽がいてこそ初めて、その存在が認められる。有能な馬はいつでもいるのだが、ただ、名馬を見分けることのできる人物がいつもいるとは限らないのである。名馬を見いだせる伯楽がいなければ、名馬の存在は否定される。そして、名馬（有能な人材）はそれと知られず、奴隷人（素質を見抜く能力のない人物）によって飼われ、才能虚しく平凡な馬に埋もれて死んでいく（すぐれた才能を認められることなく、凡人と共に野に埋もれたまま虚しく死んでいく）。またその能力を発揮するのに必要な食糧、粟一石（十分な俸給と相応の地位）を与えられず、普通の馬（才能のない、並みの人物）程度の力も出せないでいる。そのような不当な扱いをしていたら、千里の能力を求めることなどできないのである。ここまで、文は論理的に明快に運ばれる。さらに作者は、「其の道を以てせず」「其の材を尽くさしむる能はず」「其の意に通ずる能はず」と、飼い主は名馬の調教の仕方を知らないで、その能力を十分発揮させることもできず、

馬の気持ちも理解できない、と一気に述べる。論をたたみかけることで文は勢いを増し、徹底的に、また露骨に、飼い主の無能さを指摘する。

ところで、本文を読んでいて、「千里の馬」「千里」「千里の能」という名馬を形容する語句が何度も出現することに気づくが、これについて頼山陽は、「千里馬の字が七たび見えているが、字句面を変えずに、そのまま使ったものは一度もない。しかも変わった跡に気がつかない。」という。また、この短文中に何度も同じ意味の語句を用いても、わずらわしく感じないのは、その変化の妙である、という意見もある。

作者がこれらの語句を再三登場させるのは、名馬の存在、有能な人物の存在を、文字の上においても顕示し、われわれに強く訴えかけたいがためなのではないだろうか。名馬は確かに存在するのである。

しかし、その名馬を目の前にして飼い主は、「天下に名馬がいない」と言うのだ。何という皮肉だろう。飼い主の無知・無能ぶりは、ここに露呈される。繰り返しされる名馬の存在の顕示は、飼い主の無知を決定的なものとし、情けないどころか、滑稽にすら感じさせるのである。最後に作者は、思わず「嗚呼」と声に出して嘆息し、皮肉を込め吐き出すように、われわれに問いを投げかける。読者の決定に結論を任せる形をとるが、彼の答えは初めから出ている。馬がいないのではない。それは、冒頭のフレーズ「千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。」へと通じ、無能な飼い主、つまり有能な人材を見いだすことのできない無能な為政者に対する嘲笑と共に、辛辣な批判となって結ばれる。見いだされない有能な人材には、おそらく自分自身も含まれていただろう。堂々と直截的に権力者への批判を著す彼の態度には、自己の主張に対する強い自信と気概を感じるのである。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **本文の構成を、分かりやすく図にしてまとめてみよう。**

【答】

基本概念　①すぐれた能力　②すぐれた能力を見出す能力

第一段（A）

①をもつ者（千里馬）は常にいる。⇕②をもつ者（伯楽）は常にいるわけではない。

←

②をもたない者（奴隷人）のために①が発揮されないままである。

第三段・第二段（A′）

①を発揮するためには適切な待遇が必要。↕②がないために適切な待遇が与えられない。

←

①をもつ者は十分な待遇を与えられないため、①を発揮できない。

第四段（B）

②をもたない者は、自らのせいで①をもちながら発揮できない者を目の前にしながら、①をもつ者がいないと言う。

第五段（A″）

①をもつ者がいないのか。⇕②をもっていないからではないか。

▼ポイント▲　①と②の二つの基本概念をまず理解した上で、①をもつ者と②をもたない者を対比し、それによって①がありながら不遇であることを述べるパターンをAとして確認する。さらに適切な待遇と発揮される能力の関係への言及によって、第二・三段が第一段を具体的に展開していることに注意する。第一段末の「不下以二千里一称上也」と第三段末の「安求二其能千里一也」が呼応していることなどを例示してもよい。

第四段は、「策レ之…」「食レ之…」「鳴レ之…」のように①をもつ者と②をもたない者の具体的な行為を同じ型の文で繰り返し、「執レ策而臨レ之」以下の文で直接の発言として②をもたない者の無自覚さ、無責任さを読者に印象づける。この場面提示型の第四段によって、それまでの客観性を一定保持した叙述から、主観性の強い倫理的な問いへの展開が行われ、第五段の問いを準備する。そのため、パターンを変えてBとした。

第五段の問いは、表面的には冒頭の二つの主題の提示の変奏となっているためAパターンではあるが、その背後に、才能ある者の不遇の責任の所在を問う姿勢があることも見える。Bをふまえた上でのAであり、冒頭の繰り返しではない。

なお、第三段と第四段を、①をもつ者の不遇と②をもたない者の傲慢さとの対比として捉えることもできる。その場合、第三段は第二段の対比を受ける役割があると同時に、第四段と対比的関係にあるという二重の機能をもつことになる。

言葉と表現の解答例

1 **本文中の「其」を全て抜き出して現代語訳し、意味の違いについて分類してみよう。**

【答】

・其↓主部（P一五八、5・7行目）「その馬が」
・其↓属性（P一五九、1・2行目）「その馬に適した」「その馬の」「その飼い主の」
・其↓助字（P一五九、3行目）「そもそも」

▼**ポイント▲**　P一五九、3行目の二つの「其」は、「其…邪、其…邪」のような形式で、句末の疑問助詞を強調する働きをし、「いったい…だろうか、それとも…だろうか」という選択的な疑問を提示する。

言語活動の解答例

1 **作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか、話し合ってみよう。**

【答】　人材（「千里馬」）を登用するには、まず人材を見抜いて適切な待遇を与える人（「伯楽」）が必要であり、後者が少ないために才能がありながら不遇である者が多いことを訴えている。

▼**ポイント▲**　この文章では、名馬と伯楽の比喩を用いて、「人が才能を発揮するためには、その人を見出して活躍できる場を与えてくれる人が必要だ」と述べると同時に、才能がありながら見出されず不遇のままにいる人への強い同情と、それを座視している為政者への強い非難を示そうとしている。「学習のポイント」1で読解したように、この文章はたんに前者のみを述べようとしているのではなく、後者をベースとした倫理的な問いに力点があるとすべきだろう。それを理解するためには、まず「学習のポイント」1をていねいに作業していることが前提となる。

さて、韓愈は科挙に及第して中央官僚となった新興階級の知識人であったが、八世紀から九世紀にかけての中国の人材登用制度には、蔭位の制など、高官の家柄を優遇する側面がなお強く、科挙による登用は門閥貴族と政治権力との結びつきの下にあった。これについては世界史の参考書等でも確認できるので、唐代の科挙制度について生徒自身に調べさせてもよいだろう。科挙知識人と門閥貴族との争いについて一通りの知識を得ておくことは、唐詩の背景を知る上でも重要である。

この文章の制作年代については、韓愈が進士に及第した後の七九五年から八〇〇年ごろとされるが、その主張がおそらく生涯変わらないものであったことは、孟郊、張籍、李賀など、不遇の年月を過ごした友人たちへの敬意からも、想像できる。余裕があれば、こうした詩人たちの略歴について、それぞれグループにわかれて調べるのも理解を深める一助となる。

（齋藤　希史）

春夜宴二桃李園一序

李白

作者

李白

七〇一年～七六二年。字は太白。号は青蓮。盛唐の詩人。自由奔放な詩風で、道教を信奉し「詩仙」と呼ばれた。大胆な発想と自由な表現で、盛唐を代表する。隴西成紀（甘粛省天水県）の人とも、山東（山東省）の人ともいわれ、また西域の出身とする説などもあるが、蜀（四川省）で生まれ育ったとするのが有力である。父は、西域との通商をしていた大商人だったと考えられている。十五歳の頃から剣術を学び、詩文も制作するようになっていた。二十歳の頃には蘇頲に認められてもいる。早くから任侠と酒と美女を愛し、各地を放浪した。二十七歳の頃、安陸（湖北省）で結婚したが、三十五歳の頃太原（山西省）に旅行、任城（山東省）に住んで新たに結婚して一男一女をもうけた。後、江南に旅立ち、会稽（浙江省）で道士の呉筠と知り合って、仙術の修行をするが、呉筠が玄宗皇帝に召されて長安にのぼると、呉筠の推薦によって、天宝元（七四二）年、李白も都に出た。玄宗に仕えて翰林院供奉となり、賀知章から「天上の謫仙人（天上から人間の世に流された仙人）」と評されたりした。天宝三（七四四）年、あまりにも豪放不羈な性格だったために長安を追放され、河南・山東の地を放浪し、杜甫や高適らと交流した。天宝十三（七五四）年、宣城（安徽省）に住んだが、翌年、安禄山の乱が起こり、玄宗の第十六皇子の永王璘の安禄山討伐軍に参加する。しかし永王の行動が兄粛宗皇帝から反乱行為と断定され誅殺されると、李白も罪を問われて夜郎（貴州省）に流された。途中、巫山（四川省）付近で赦免され、長江を下って江蘇省の辺りを転々とし、宝応元（七六二）年、当塗（安徽省）県令李陽冰の家で没した。天才的で卓越した想像力と自由奔放な表現力、大胆で豪放な構想など、全ての面で盛唐の気風を体現した詩人なので、杜甫を「詩聖」と呼ぶのに対して「詩仙」と呼ばれるのである。杜甫は、「春日憶二李白一」詩のなかで、「白也詩無レ敵、飄然思不レ群」と称えている。ことに絶句形式に才能を輝かせ、律詩を得意とした杜甫と並べて「李絶杜律」と評される。「李太白集」三十巻がある。

出典

古文真宝

「古文真宝」は、前集と後集と各十巻から成り、前集には漢代から宋代までの著名な古詩二百十七首を収め、後集には戦国末の屈原から宋代までの文人三十三名の文章六十七編を、辞・賦・説・解・序・記・箴・銘・文・頌・伝・碑・弁・表・原・論・書の十七類に分類して収録している。本書の特徴は、「文章軌範」が唐・宋の文章を中心とするのに対して、戦国時代から宋に至るまでの名文を広く収載し、しかも文体の分類があるところから表

現形態の変化を知るのに便利なところにある。

本書の編集は永陽（安徽省滁州市）の黄堅によるものとされるが、宋の末年の人と推定されるだけでその事跡などは未詳。本書の成立年代も、おおよそ宋末元初の頃で、古文尊重の気運が盛んになった時代に古文学習のために編集されたものと考えられている。中国では元・明の時代に読まれ、我が国には室町時代初期に伝えられて、五山の学僧に愛読された。また、近世から明治にかけて、教養のための必読書とされた。本文は巻三序類からとった。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　古文真宝（後集）」（星川清孝著）によった。

参考文献

❊ **教師用**

「古文真宝（後集）」（新釈漢文大系）星川清孝　明治書院　昭三十八

「古文真宝」（中国の古典）佐藤保他　学習研究社　昭五十九

「研究資料漢文学６　文」渡辺英喜・田部井文雄・吉崎一衛　明治書院　平五

「李白と杜甫の事典」向嶋成美　大修館書店　令和元

❊ **生徒用**

「漢文名作選４　文章」巨勢進・向嶋成美　大修館書店　昭五十九

「古文真宝」（新書漢文大系）星川清孝　明治書院　平十四

「漢文塾　漢字文化の魅力　上」田部井文雄　明治書院　平二十二

図版解説　**〈桃李園図屏風〉**

静嘉堂文庫美術館蔵。明治二十八（一八九五）作。六曲一双屏風。絹本著色。川端玉章（一八四二―一九一三）筆。

⇩P160

主題

人生は短くはかない。折よく集まったのは身内の親しい者たちで、いずれも作詩に優れている。それに時は陽春の好夜である。大いに飲み、大いに詩を作って楽しもうではないか。

訓読と現代語訳

①夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。②而して浮生は夢のごとし。③歓を為すこと幾何ぞ。④古人燭を秉りて夜遊ぶ、良に以有るなり。⑤況んや陽春我を召くに煙景を以てし、大塊我に仮すに文章を以てするをや。⑥桃李の芳園に会して、天倫の楽事を序す。⑦群季の俊秀は、皆恵連たり。⑧吾人の詠歌は、独り康楽に慚づ。⑨幽賞未だ已まず、高談転た清し。⑩瓊筵を開きて以て華に坐し、羽觴を飛ばして月に酔ふ。⑪佳作有らずんば、何ぞ雅懐を伸べん。⑫如し詩成らずんば、罰は金谷の酒数に依らん。

①そもそも天地というものは、万物を迎え入れる旅館のようなものであり、時間の流れというものは、永遠の旅人のようなものである。②ところがはかない人生はまるで夢のようである。③喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。④（だから）昔の人がともしびを持って夜まで遊んだのも、実にもっともなことである。⑤ましてやうららかな春がかすみたなびく春景色で自分たちを招き寄せ、万物の創造者が自分たちに文章を作る才能を貸し与えてくれるからには、なおさら（楽しく遊ばないではいられないの）である。⑥桃や李が美しく咲きほこる花園に集まって、肉親の間の楽しみを繰り広げる。⑦大勢の優れた年少者たちは、皆、昔の謝恵連のよう（に詩がうまい）。⑧（ところが）私の詩だけはまずくて、（恵連の族兄の）謝霊運には及ばないので恥ずかしくなる。⑨心静かに風景をめでる楽しみは尽きず、世俗を離れた高尚な談論はいよいよ清らかになってゆく。⑩（このような）立派な宴席を設けて花に向かって座し、すずめが羽を広げた形の杯をやり取りして、月をながめては酒に酔う。⑪（このよい気分のときに、）立派な詩ができないならば、どうして風流の思いを述べることができようか（述べることなどできない）。⑫もしも詩ができなかったならば、罰は、昔の金谷園における罰杯の故事にならって、三杯の酒を飲ませることにしよう。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶範読に従って繰り返し音読する。
❷一文ずつ解釈していく。知技⑵ウ
❸四字句・六字句を摘出させ、その布置配列を検討し、それがどのような表現効果を見せているかを考える。思表判B⑴ア・ウ・エ〔**学習のポイント**1〕
❹「浮生若」夢」と断じた李白は、その悲しみを払拭するため、どのように対処しようとするのかを考える。

❶指導者の範読、指名読みを繰り返して、読めない漢字などを確認させる。また、音読によって文章のリズムを味わわせる。四六駢儷文の流麗なリズムは、もとより中国語音のリズムによって感得されるべきものであるが、字数を整えた句や対句がもたらす均整の美は、訓読による日本語のリズムにも反映している。
❷予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。
【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。以下、全ての詩に共通。
❸四六体の修辞について、その斉整美や音調美を、他の例をあげて補説する。
【評価】四六体の文体上の特色を理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。
❹快楽として、風景の美・肉親との歓談・美酒等と共に、詩作が挙げられていることに注意させる。

まとめ

学習活動のポイント

❶松尾芭蕉『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表する。知技⑵ア・イ、思表判B⑴エ　主態〔**「言語活動」1**〕

❶「言語活動の解答例」を参照。
【評価】本文と『おくのほそ道』の冒頭部分を比較する話し合いを積極的に行っているか、発言や行動を確認する。

発問例

●一六〇ページ

問 ◉**「浮生若レ夢。」（4行目）とは、どのような意味か。**

答 はかない人間の一生は夢のようである。「天地」の広大さと「光陰」の永遠に比べて、人間の存在のはかなさをいったもの。

補 「浮生」の語の持つはかなさ・定めなさは、「語句の研究」に示した「荘子」の例が参考になるほか、「浮雲」などの語が持つニュアンスからも窺える。

問 **「為レ歓幾何。」（4～5行目）とは、どのような意味か。**

答 喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。

補 「幾何」は物の数を問う疑問詞であるが、ここでは「どれほどもない。」の反語の用法であることに注意させる。

●一六一ページ

問 **「楽事」（一行目）とはどのようなものか、まとめてみよう。**

答 美しい景色をめでる喜び（幽賞）・身内の者たちとの世俗を離れた歓談（高談）・美酒（羽觴）・花・月・詩作（佳作）

補 後半の宴会の具体的展開の部分に着目させる。

語句の研究

●一六〇ページ

序 文体の一種。物事の次第を順序立てて述べる文。「叙」と同じ。ここは参会者の作った詩を集めた詩集の序文。先例として、西晋・石崇の「金谷園詩序」や東晋・王羲之の「蘭亭集序」などがある。なお、李白の本集では、題名を「春夜宴二従弟一桃李園一序」とする。

1夫 発語の辞。そもそも。いったいに。あらたまった口調で重々しく話題を提示する際に用いる。

1天地者万物之逆旅 「者」は、主語をはっきりと提示する働きをする助字。「逆旅」は、旅館。「逆」は迎えるの意。迎える意味のときは「ゲキ」と読む。「万物」は森羅万象をいう。天地は万物が仮に宿る旅館のようなものであるの意。天地は悠久にしてかつ広大で、天地間一切のものを包容するから、このようにいったのである。これは反面、悠久の天地に対し、万物は有為転変してやまないものであることもいっている。「荘子」知北遊編に「悲夫、世人直為二物逆旅一耳。」と、類似の表現が見える。この句は修辞法では隠喩法と呼ばれる。解釈するときには「…のごとし」のように直喩法に直すことが肝要である。なお、李白の本集では「逆旅」および次句の「過客」の下に「也」の字がある。

2光陰者百代之過客 「光陰」は、時間の流れ、年月。「光」は昼、「陰」は夜。「百代」は過去から未来への永遠の時。「過客」は過ぎ去る旅人。「百代之過客」で永遠の旅人。月日は未来永劫、刻々に流れ去るもので、これを例えていえば、ちょうど過去から未来へと永遠にわたって尽きることのない長い旅を続けてゆく旅人のようなものである、の意。

4浮生若レ夢 「浮生」は、水に浮かび漂うようなはかない人の一生。はかない人間の一生は夢のようである。人生を、水に漂うような定めなきものとする考え方は、すでに「荘子」刻意編に「其生若レ浮、其死若レ休。」と見えている。

4為レ歓幾何 喜び楽しんだとしてもいったいどれほどの時間であろうか（どれほどもない）。「幾何」は物の数をはかり問う疑問詞で、ここは反語の用法。

5古人秉レ燭夜遊、良有レ以也 「秉レ燭」は、

問　**「群季俊秀、皆為二恵連一。吾人詠歌、独慚二康楽一」（1～2行目）とあるのは、どのようなことをいったものか。**

答　一族の若者たちが謝恵連のように上手に詩を作るのに対し、年長の自分は謝霊運のように優れた詩ができないので恥ずかしい、と謙遜している。

補　一族の若者と自分との関係を、六朝時代の宋の詩人謝恵連とその族兄の謝霊運の関係になぞらえている点に注意させる。また「独慚二康楽一」が謙遜の表現であることにも注意させたい。

問　**「飛二羽觴一」（3行目）とは、どのような行為をいったものか。**

答　すずめが羽を広げた形の杯をさかんにやり取りすること。

補　「羽觴」とあるので、それにちなんで、「飛」といっている点に注意させる。

問　**李白のいう楽しみ・喜びとはどのようなものか、まとめよ。**

答　美しい景色をめでる喜び（幽賞）・身内の者たちとの世俗を離れた歓談（高談）・美酒（羽觴）・花・月・詩作（佳作）

補　後半の宴会の具体的展開の部分に着目させる。

ともしびを手に取って。古人が昼だけでは足らず、燭火をつけて夜までも遊んだのは、本当に理由のあることである。古人は誰を指すか分からないが、漢以前の人である。「文選」巻二十九の「古詩十九首」其十五に、「生年不レ満レ百、常懐二千歳憂一、昼短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一、為レ楽当レ及レ時、何能待二来茲一…」とあるのを踏まえるが、「文選」巻四十二にある魏の文帝（曹丕）の「与二呉質一書」に「古人思二秉レ燭夜遊一、良有レ以也。」とあるのをそのまま用いたようである。「良有レ以也」は、まことにもっともなことだの意。「以」は「由」の借字で、理由。

7陽春　うららかな春。春は陰陽二気のうち、陽の気が盛んであるから陽春という。

7召レ我以二煙景一　「煙景」は、かすみたなびく春景色。「煙」はかすみ、もや。陽春がかすみたなびく春景色を作って、我に来て遊べと招いている。

8大塊　大地、大自然の意、転じて万物の創造者。「荘子」大宗師編に、「大塊載レ我以レ形、労レ我以レ生、佚レ我以レ老、息レ我以レ死。」とあるのに基づく。

8仮レ我以二文章一　「文章」には、①美しい模様、②礼楽・制度などの国の文化、③詩文、あるいはそれを作る才能などの意味があるが、ここでは③。「仮」は貸し与えるの意。万物の創造者が我に文章を作る才能を貸し与え、詩文を作って楽しむように勧めている。一説に「文章」を天地自然の美景そのものを指すという。

●一六一ページ

1芳園　花が多くていい香りのする園。

1序二天倫之楽事一　「天倫之楽事」は、肉親の間の楽しみ。「序」は順序をたてる、繰り広げる。また、順序だててのべる。ここは後者の意味で解してもよい。「天倫」は、もと兄弟の意。「春秋穀梁伝」の隠公元年に「兄弟天倫也。」とあり、范寧の注に、「兄先弟後、天之倫次。」とある。しかしここでは必ずしも李白の兄弟のみではない。いずれも身内の者であるから、その中の年長者・年少者をもって兄弟に例えている。句の意は、兄弟のように親しい一族の者が集まって楽しい宴を開く。

1群季俊秀　大勢の優れた年少者たち。「群季」は、大勢の年少者たちを指す。「季」は、すえの意。「伯・仲・叔・季」の季である。「俊秀」は、優れた人物。ここでは

詩文の才能の優れた者をいう。「淮南子」泰俗訓に、「智過二万人一者謂二之英一、千人者謂二之俊一、百人者謂二之豪一、十人者謂二之傑一。」とある。

2皆為二恵連一　謝恵連のように、詩がうまい。これらの若い人々は皆有名な謝恵連のように詩が上手である。なお謝霊運を持ち出し、従弟たちを恵連に、自らを霊運に関係付け、李氏の一族を謝氏の一族に比較したところにこの文の妙味がある。「恵連」は謝恵連のこと。三九七年～四三三年。六朝時代の宋の詩人で、謝霊運の族弟（族兄弟は高祖、すなわち曽祖の父を同じくする者をいう）。族兄の霊運にその文才を認められた。伝は「宋書」巻五十三、「南史」巻十九に見える。

2吾人　わたし。普通、われわれの意であるが、ここでは李白自身のことをいっている。

2詠歌　詩歌。

2慚二康楽一　謝康楽に恥ずかしい。「康楽」は、六朝時代の宋の詩人謝霊運のこと。三八五年～四三三年。東晋の車騎将軍謝玄の孫で、祖父の封爵を継いで康楽公（後、侯に降格）と称したのでこのようにいう。少より学を好み、博く群書を読み、書画に巧みで、文章においては江左（江南）第一と称せられ、とりわけ自然の美景を描く山水詩に優れていた。「謝康楽集」八巻がある。伝は「宋書」巻六十七、「南史」巻十九に見える。ここでは、その謝霊運のような優れた詩ができないので恥ずかしいと謙遜して言ったもの。

2幽賞　心静かに風景をめでる。

3高談　世俗を離れた高尚な談論。

3転清　「転」は、いよいよ、ますますの意。世俗の名利を脱した高尚な話が、ますます清らかにすすめられる。

3瓊筵　玉を編んで作ったような美しいむしろ。立派な宴席の例え。「瓊」は玉で、花に対していう。

3坐レ華　花に対して座る。花の眺めの良い所に美しい宴席を開いて座る。

3飛二羽觴一而酔レ月　「羽觴」はすずめが羽を広げた形の杯。一に爵といい、すずめに象り羽翼の形を付けた杯。「楚辞」宋玉の招魂に「実二羽觴一」とあり、朱子注に、「羽觴飲酒之器、為二生爵形一似レ有二頭尾羽翼一也。」とある。一般に杯の両側に羽形の耳を付け、取っ手としたものを羽觴と呼んでいる。「飛」は羽觴にちなんでいう。杯をさすこと。句の意は、互いに杯をやり取して月を賞しながら酔う。

4佳作　よい作品。本集には「作」を「詠」に作る。

4何伸二雅懐一　「何……」は反語形。「雅懐」は風雅な思い。世俗を忘れた高尚な心情。句意は、どうして風流な思いを述べることができようか、できないであろう。

4如　「若」と同じく仮定の意を表す。

4金谷酒数　晋の石崇が、別荘の金谷園で大宴会を開き、詩のできない者に罰杯として三杯飲ませたという故事。本集には「酒」の下に「斗」の字がある。「金谷」は園名。当時の河陽、現在の河南省洛陽市の北西にあった。石崇の本伝は「晋書」巻三十三、石苞の伝についている。

句法

為レ歓幾何。　反語形。「……幾何（ハ　ノ）」のように、「幾何」の二字が句末に置かれているときは、数量の僅少を意味する。例えば「人生幾何（ノ）」の場合は、「人の生涯は、さて何年生きられるであろうか、それはきわめて短い。」の意。

況陽春召レ我以二煙景一、大塊仮レ我以二文章一。　抑揚形。「いはンヤ……ヲヤ」と呼応して読み、「ましてや……はなおさらだ」の意。

独慚二康楽一。　限定形。「独（リ）……」の形で、「ひとリ……」と読み、「ただ……」の意。意味のうえでは「独吾人詠歌（リ　ノ　ハ）」であるが、ここでは「皆為（リ）二恵連一」と対にするために語順を変えている。

何伸二雅懐一。　反語形。「何（ノ）……（ン）」の形で、「なんゾ……ン」と読み、「どうして……だろうか、いや、……ない。」の意。

如詩不レ成　仮定形。「如（シ）……（バ）」の形で、「もシ……バ」と読み、「もし……ならば」の意。

鑑賞

天地という広大な空間、光陰という永遠の時間に対して、人間の一生はあまりにはかなく短い。しかし、李白はその人生有限の悲しみを嘆くことにのみ終始するのではなく、逆にそれをバネに人生を燃焼させるべく快楽の追求に向かう。その快楽とは、桃李の咲きにおう庭園での、親しい身内の者たちとの酒宴であった。

かくて文章の後半では、楽しい宴席のさまが述べられる。「幽賞」「高談」の尽きせぬ興趣、花と月を賞でて美酒に酔う快楽に続けて、最後に詩作の楽しみがあげられているのは、夜宴に集った人々の作品を集めた詩集の序文として書かれたものであったからにほかならない。先例として、西晋の石崇「金谷詩序」、東晋の王羲之「蘭亭序」があり、日本では元号「令和」の典拠となった「梅花歌序」（『万葉集』）も同じジャンルに属する。

この文章は、快楽を求める所以から筆を起こし、酒宴の様子を叙して最後は詩の競作の楽しみを述べて一編を結ぶ。桃李の花咲きほこる庭園での楽しい宴会の次第を、華麗な筆致で描き尽くして間然するところがない。内容と表現がみごとに一致した、四六駢儷文の名品である。

参考

Ⅰ　四六駢儷文について

四六駢儷文の特色は、およそ次の五点にまとめられる。

(1)　四字句・六字句を基調とする。

(2)　対句を多用する。

（而）浮生若夢、為歓幾何。　古人秉燭夜遊、良有以也。

（夫）天地者万物之逆旅」直対
　光陰者百代之過客」
　群季俊秀、皆為恵連」隔句対
　吾人詠歌、独慚康楽」

（況）陽春召我以煙景」直対
　大塊仮我以文章」

会桃李之芳園」直対
序天倫之楽事」直対
幽賞未已」直対
高談転清」直対
開瓊筵以坐華」直対
飛羽觴而酔月」直対
不有佳作
何伸雅懐」直対

(3) 故事・典故を多用する。
古人秉燭夜遊、良有以也。→「古詩十九首」其十五
罰依金谷酒数。→西晋・石崇の金谷園での故事。

(4) 音声の調和

(5) 修辞の美の追求
芳園・瓊筵・雅懐

Ⅱ『おくのほそ道』冒頭部分

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

表八句を庵の柱に掛け置く。

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野、谷中の花の梢、またいつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵より集ひて、舟に乗りて送る。千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後ろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

［現代語訳］

月日は永遠の旅人（のようなもの）であって、来ては去り去っては来る年もまた旅人（のようなもの）である。舟の上で一生を送ったり、馬のくつわを取って老年を迎えたりする者（船頭や馬子など）は、その日その日が旅であって、旅（そのもの）を自分の栖としている。昔の（風雅を愛した）人（の中に）もたくさん旅で死んだ人がいる。自分も、いつの年からか、ちぎれ雲が風に誘われて（漂うようにしているのを見て、旅に）出てさまよい歩きたいという気持ちがしきりに起こって、（最近も須磨・明石などの）海辺を旅し、去年の秋、隅田川のほとりのあばら家に（帰り、）蜘蛛の古巣を払いのけて（落ち着き）、そのうち年も暮れ、春になって霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えようと、そぞろ神が取りついて心を物狂おしくさせ、（また、）道祖神の招きにもあって落ち着かず、ももひきの破れを繕い、笠のひもを付け替えて、三里に灸を据える（など旅支度にかかる）とすぐに、松島の月のことが何よりも第一に気にかかって、（これまで）住んで

いた庵は人に譲り、（とりあえず）杉風の別宅に移るときに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

（この句を発句とする）表八句を草庵の柱に掛けて置いた。

三月も（押し詰まった）二十七日、明け方の空がおぼろに霞み、月は有明の月で光がもう薄くなっているものの、（遠くには）富士の峰がかすかに見えて、（近くには）上野、谷中の桜の梢（が見えるが、それ）を、またいつ（見ることができる）かと心細い。親しい人々は残らず前の晩から集まって、舟に（一緒に）乗って送ってくれる。千住という所で舟を上がると、前途三千里の（長旅への）思いに胸がいっぱいになって、夢幻のごとき（この世の中で、会うも別れも不定であるが、それでも親しい人々と別れる分かれ道となった千住の）町で、惜別の涙を流すのだった。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

この句を旅日記の初めとして（出発したのだが）、行く道はなかなか進まない。人々は途中に立ち並んで、（私の）後ろ姿の見える限りは（見送ろう）と見送っている様子である。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **この文章の文体上の特色を、字数や対句などの点からまとめてみよう。**

【答】

字数―八字句や七字句もあるが、四字句と六字句が基調となっている。

対句―合計七組の対句で構成されている。前後の二句が対となる直対のほか、一句を隔てて対を構成する隔句対も用いられている。

▼ポイント▲　本文を句読点で改行しながらノートや原稿用紙に書き写し、字数や対句の構造を概観させる（左図参照）。さらに「参考」の説明を参照しながら、四六駢儷文の特徴を説明する。

（夫）	天地者万物之逆旅	8		（況）	陽春召我以煙景	7	
	光陰者百代之過客	8			大塊假我以文章	7	
（而）	浮生若夢	4	4		会桃李之芳園	6	6
	為歓幾何	4			序天倫之楽事	6	
	古人秉燭夜遊	6					
	良有以也	4					

	群季俊秀	4	4		開瓊筵以坐華	6	6
	皆為恵連	4			飛羽觴而酔月	6	
	吾人詠歌	4	4		不有佳作	4	4
	独慚康楽	4			何伸雅懐	4	
	幽賞未已	4	4		如詩不成	4	4
	高談転清	4			罰依金谷酒数	6	

言葉と表現の解答例

1 **本文中に用いられている比喩表現を抜き出し、その効果について考えてみよう。**

【答】「天地」→「万物之逆旅」、「光陰」→「百代之過客」、「浮生」→「夢」。冒頭の比喩表現によって、文章全体の背景（無限の時空の中で得られたはかない生を楽しむ）を読者に印象づけている。

▼ポイント▲　「天地」「光陰」のように永遠の時空を連想させる語と「逆旅」（旅館）、「過客」（旅人）のように限定された存在を「万物」「百代」という無数をあらわす形容で繋いでいることに注意する。「浮生」は小さな存在に過ぎず、しかも「夢」のようにはかないが、同時に無限の時空を一時的にせよ住みかにしている。ただ生が短いことを嘆くのではなく、天地と歳月の無限を借りて、

いまこの時を楽しもうというこの文章の基調にふさわしい比喩表現と言える。

2　歴史上の人名や地名を本文中から抜き出し、それらが使われている意味について考えてみよう。

【答】（謝）恵連・（謝）康楽（霊運）・金谷（園）。過去のすぐれた文人たちの宴にならうものとして自分たちの宴を位置づけている。

▼ポイント▲　謝霊運は六朝文学を代表する詩人、謝恵連はその族弟（祖父の祖父を同じくする者を族兄弟という）。彼らの出身である陳郡の謝氏は、王導や王羲之など琅邪の王氏と並ぶ名族。金谷園は、西晋の石崇が洛陽近郊に開いた別荘。宴を開いて客人に詩を求め、詩集とした。王羲之「蘭亭集」の先蹤である。李白は、こうした文人たちの世界に憧れ、自らその列に連なることを望んだ。

言語活動の解答例

1　松尾芭蕉（ばしょう）『おくのほそ道』の冒頭部分と比較して、気づいたことを発表してみよう。

【答】李白は文章の冒頭において広大な天地と悠久の時間を提示することで、人間の生のはかなさ短さを浮かび上がらせている。それに対し芭蕉は、もっぱら時間の流れに注目することで年月を永遠の旅人と捉え、旅に生きようとする自分の生涯と重ね合わせている。

▼ポイント▲　芭蕉が時間の流れのみを取り上げている点に注目させたうえで、それが何に例えられているかに気づかせる。

《板書例》

李白：天地（空間）―光陰（時間）
⇔
浮生（はかなく短い生涯）

芭蕉：月日（時間）―行きかふ年（時間）
＝
旅人（生涯を旅に送る自身）

（齋藤　希史）

名月――八月の詩

一海 知義

作者

一海知義

昭和四（一九二九）年～平成二十七（二〇一五）年。中国文学者。神戸大学名誉教授。奈良県の生まれ。昭和二十八（一九五三）年、京都大学文学部卒。陶淵明・陸游から夏目漱石・河上肇まで研究の対象は広く、『漢詩一日一首』（平凡社）『漢詩入門』（岩波ジュニア新書）など、優れた入門書やエッセイも多い。『一海知義著作集』（全一一巻、藤原書店、平二〇～令二）がある。

出典

本文は『漢詩逍遥』（平成十八（二〇〇六）年刊、藤原書店）によった。同書は、Ⅰ漢詩逍遥、Ⅱ河上肇を語る、Ⅲ陸游を読む、Ⅳ漢字・漢語、Ⅴ帰林閑話、Ⅵ雑纂の六部からなり、本文に載録した「名月――八月の詩」は、Ⅰの「四季の詩――漢詩四方山話」中の一篇である。

なお、『源氏物語』の現代語訳は本書掲載にあたり、原文に追加した。教科書に収録するに際して、漢字・送りがな・句読点などについては教科書として統一した体裁に改めた。ほか、以下の点に関して出典との異同がある。「二千里外の故人の心」（原文P三八・1）を教科書教材に合わせて、「二千里外故人の心」（教科書P一六二・上4）に、「八月十五日の夜、禁中にて独り直し」（原文P三八・3）を教科書教材に合わせて、「八月十五日夜、禁中に独り直し」（教科書P一六二・上7）に、「猶お想う　清光　同じく見ざることを」（原文P三八・5）を教科書教材に合わせて、「猶お恐る　清光　同じくは見ざるを」（教科書P一六三・上10）に、「秋陰足し」（原文P三八・6）を教科書教材に合わせて、「秋陰足る」（教科書P一六三・上11）に、改めた。

参考文献

❊**教師用**

「白居易研究講座　第4巻　日本における受容　散文篇」　勉誠出版　平六

太田次男ほか編

「源氏物語と白楽天」　中西進　岩波書店　平九

「和漢朗詠集」（角川ソフィア文庫）三木雅博　平二十五

❊**生徒用**

「白楽天」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス中国の古典）下定雅弘　平二十二

発問例

●一六二ページ

問　光源氏は「故人心」（上13行目）の句で誰を思っているか。

補 答　宴をともにした宮中の人たち。

著者の解説では「都にのこして来た女たち」であるが、『源氏物語』全体の内容を前提として、原詩と対比的に述べたものである。なお、「故人」を都から離れた須磨にいる光源氏自身のこととして、元稹が都を思う心情に例えたのではないかとの質問もあり得るが、その前に「所々ながめたまふらむかし」とある文脈からすれば、「故人心」は都にのこしてきた人々の思いとするのが自然な理解かと思われる。ただし、この句を吟じて涙を流した源氏の心情まで含めて想像すれば、互いを思い合うどちらをも結局は指すのではないか、とする見方も成り立つことには留意したい。

語句の研究

●一六二ページ

上6元稹　七七九年～八三一年。中唐の文人・官僚。八〇三年、白居易とともに書判抜萃科に及第して同じく秘書省校書郎に就き、生涯の交わりを結んだ。八一〇年、宦官と対立して監察御史の職を解かれ、江陵（現在の湖北省荊州市）に左遷された。地方官を歴任した後に都に還り、宰相にまで至ったが、地位は安定せず、武昌軍節度使で没した。

上9『源氏物語』　物語。五十四帖。作者は紫式部。十一世紀初め頃成立。須磨の巻は、朧月夜との関係が発覚した源氏が、紫の上を都に残して須磨に退き、愁いのうちに過ごした日々を描く。

下13藤原公任　九六六年～一〇四一年。四条大納言と称される。学芸に長じ、和歌・漢詩・音楽に才能を発揮した。歌論書の『新撰髄脳』、撰集として『金玉集』『三十六人撰』がある。晩年は出家して洛北に隠棲した。

下13『和漢朗詠集』　藤原公任が漢詩文の秀句や和歌の優れたものを主題ごとに分類して編んだ詞華集。上巻は四季、下巻は天象・草木・禽獣・遊宴にわたって部立てされている。採録された漢詩句のうち、中国のものでは白居易が七割近くを占める。

●一六三ページ

上1江陵　現在の湖北省荊州市に属する長江中流北岸の都市。古くは楚の都である郢があった。その後も水陸交通の要所として発展し、六朝の梁では都が置かれたこともある。なお、『和漢朗詠集』には元稹が江陵で作った「過二襄陽楼一呈二上府主厳司空一」の句「払レ水柳花千万点、隔レ楼鴛舌両三声（水を払う柳花は千万点、楼を隔つる鴛舌は両三声）」の句が「暮春」に採られている。

解説

この文章は、日本では「仲秋の名月」と言うのに対して、中国には「名月」という語はなく「明月」と言うことから説き起こして、中国ではどのような月であれ月は月なので「名月」のように他と区別した言いかたはないのではないかと述べる。では日本ではなぜ「名月」と言うのかについて説明はないが、「名月」と言わない中国の裏返し、つまり、日本ではそれぞれの月を区別しているから、ということになるのだろう。実際、日本文学における月は、その形態によって細かく分けられ、中国にはない十三夜の行事（豆名月・栗名月）もある。また、月齢の違いとも関連して、月の見える時間についても敏感と言える。もちろん全体の傾向としてということではあるが、著者の卓見としてよいだろう。

また、日本で最も知られた十五夜の月の漢詩として白居易が元稹を思って作った詩を挙げ、『源氏物語』中で源氏がそのうちの頷聯を吟誦していた場面と比較して、男性の文学であった中国古典詩と女性の文学である『源氏物語』との違いに説き及ぶ。文学における表現がその担い手個人の心情のみならず、社会生活との関連が深いことを生徒に気づかせる契機となる。この単元で扱った送別や望郷が、中国の士大夫の社会生活において不可避の普遍的なテーマであったことを改めて説明することもできるだろう。

士大夫は、古典の知識を蓄え、高度な読み書きができる階層である。儒教的な倫理から言えば、そのリテラシーは、天下の安寧のために費やされなければならない。だがそのために、しばしば政争に巻き込まれ、左遷の憂き目に遭った。思い通りに天下の統治に参与できる方が少ないとすら言える。白居易と元稹のように生涯の友人であることを貫くのは、あるいは一途な恋を貫くのと同様、さまざまな困難を伴うのであった。

著者は最後に、二人がともに同じ月を見られたのならよいのだが、「それもかなわぬ願いなのだろうか」と結ぶ。出会いの時間は短く、別れの時間は長い。せめて月だけでもと願うが、それすらもかなわないかもしれない。なぜなら、元稹のいる江陵は、白居易のいる長安と異なり、遠く離れた長江に面して、気候も異なるからである。つまりここで中国という土地の広さ、黄河流域と長江流域では気候や風物が相違することへの認識が促される。これは、京都と須磨の違いの比ではない。そうした地理感覚や自然環境の相違もまた、日本と中国それぞれの文学の違いを生む要因となっている。

参考

参考として、「名月 ── 八月の詩」の前半の部分を掲げる。

中国の詩文に「名月」という言葉は見えないようである。漢和辞典の類は、中国での用例は挙げず、『和漢三才図会』など日本の文献だけを引く。日本には、

　名月や池をめぐりて夜もすがら

という有名な芭蕉の句があり、「仲秋の名月」という言葉もある。しかし中国では、「名月」といわず「明月」という。

名月と明月は、発音すればともにメイゲツ、中国音もミンユエと同じだが、なぜ中国には「名月」という言い方がないのか。

たぶんそれは「月」が一つしかないからだろう。中国にも「名酒」という言葉はある。考えてみると、酒の場合はさまざまな種類があり、中国だけでも、紹興酒、茅台酒、汾酒、竹葉酒、杏露酒、最近では、五糧液、酒鬼など。目を世界に転ずれば、日本酒、ビール、ウイスキー、ウオッカ、テキーラ……。それらの中の「名」のある「酒」、有名なうまい酒が、「名酒」である。

ところが、月は一つしかない。いや、月も満月、三日月、十六夜の月と、いろいろあるではないか、と言われるかも知れぬ。しかしそれらは外形のちがいであって、紹興酒とテキーラのような質的な差異ではない。

「月」はどんなに形を変えても「月」だから、中国では「名月」（「有名」な「月」）という言い方がないのではないか。

学習のポイントの解答例

1　月を見て遠く離れた人や場所を思う文学作品にはどのようなものがあるか、調べてみよう。

【答】この単元で学んだ李白「静夜思」が代表例となろう。また「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」（阿倍仲麻呂）も百人一首に採られてよく知られている。

▼ポイント▲　百人一首から月の出てくる歌を取り上げさせて、この問いに当てはまるかどうかを考えさせてもよい。漢詩や和歌などの伝統的な文学作品に限定せず、生徒に馴染みのあるラノベやアニメ、ゲーム、映画、ドラマのシーンなどを広く自由に紹介させてもよい。

また、コロナ禍の中で中国武漢に送られて救援物資の箱に記されて有名になった「山川異〻域、風月同〻天（山川　域を異にすれども、風月は天を同じうす）」という長屋王の句（出典は鑑真の伝記「唐大和上東征伝」）も、月がなぜ離れた土地や人を結ぶ媒介となるのかを示す例となろう。

2　漢詩（漢文）と和歌（古文）で、月の描かれ方や作品の背景にどのような共通点と相違点があるか、五六ページ「単元の言語活動3」も参考にして、比較してみよう。

【答】月が漢詩でも和歌でも好んで描かれることは共通するが、漢詩がおもに夜の満月を描くのに対して、和歌は満ち欠けそれぞれや明け方の月など、描写が細かいのが特徴である。また、月を見て何らかの感情を催したり涙を流したりすることも共通して見られるが、漢詩では、左遷や離郷など、中国の士大夫の生活を背景としているものが多いのに対して、和歌では、夫婦や恋人の情を背景にしたものが多い。

▼ポイント▲　「解説」でも説明したように、月に対する見方、作者の社会生活、両国の地理感覚と自然環境の違いなどに目を向ける。日本人だからこう、中国人だからこう、という感覚的な先入観から距離を取り、それぞれの文学作品が、誰によってどのように作られ、誰にどのように享受されたかということをふまえさせた上で、それぞれの表現が成立する条件を一つ一つ認識させることが重要である。また、日本でも漢詩は作られ、和と漢の二つの表現手段が選択可能であったために、漢詩文と和歌（仮名文学）では役割分担が自ずと行われたことも、余裕があれば説明しておきたい。

（齋藤　希史）

単元の言語活動４　漢詩漢文の表現の特徴をつかむ

活動のねらい

単元のねらいとした漢詩文の表現に対する理解を生徒自身の感覚と思考によって確認するための活動である。

まず、漢詩・漢文らしいと感じる表現を選択する作業を通じて、漢詩漢文らしい表現とは何だろうかという問いを意識させる。この問いは、生徒自身の言語感覚を活性化することにもつながり、グループでの議論も有効である。

さらに、それが日本語の世界とどのようにかかわるかを探究させることで、古文や現代文の学習と関連させ、言語文化という科目全体の学習意義についても確認する機会とする。

タイトル・序文の解説

日本の言語文化は、和と漢の二つの流れによって、その豊かさが育まれてきた。言語活動のこの序文は、生徒自身の言語感覚に即して漢詩文の表現の特徴をつかむにあたって、言語文化の学習における位置づけを確認するためのものである。

漢文訓読と日本語との関係については、山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』（宝文館、一九三五）以来、日本語史上の常識であるし、近代日本語文が成立するにあたって漢文訓読体が規範となったことも、広く認識されている。また、『古事記』『日本書紀』『懐風藻』『万葉集』から『源氏物語』、松尾芭蕉、漱石・鷗外にいたるまで、日本文学において漢詩文が果たした役割の大きさについても同様であろう。そうした「漢」の存在を常に意識せざるをえなかったために、それと拮抗する「和」の価値への志向が生じ、日本の伝統意識の核となった。

ここでは、そうした学術的な事実を一方的に説明するのではなく、対句や反語など、生徒にも漢文らしさを身近に感じられる例から、日本の言語文化全体への視野が得られるように工夫したい。

「課題」の解説

課題　漢詩や漢文の表現方法にはどのような特徴があるか、和歌や俳句、さらに現代日本語の文章などと比較してまとめ、発表してみよう（次の1・2・3は、1と3、2と3のように分担してもよい）。

漢詩文の表現の特徴とは何か、漢詩文らしさとは何かという問いは、それだけでは漠然としている。和歌や俳句（もちろん物語などを含めてもよい）、さらに現代日本語文まで、これまでの言語文化の学習を生かして比較対照させることで、問いの輪郭をはっきりさせ、課題に取り組みやすいようにした。

活動の解説

1 漢詩らしい表現の特徴について考えてみよう。

①この単元の漢詩から、漢詩らしいと感じられる句もしく聯を一つ選ぶ。

深く考えずに感覚的に選ばせるほうがよい。そこから、なぜそれを漢詩らしいと感じたのかという生徒自身の言語感覚への問いが生まれることを重視したい。

漢詩らしさには、もともとの漢詩の表現に由来するものと、訓読に由来するものとの両面が存在するが、区別せずに取り上げてよい。

解答には、いろいろなパターンがありえる。例えば「国破山河在」を挙げて、「山河」に雄大さを感じるのが漢詩らしいから、という答えもあるだろうし、「酔臥沙場君莫笑」を挙げて、「笑うことなかれ」が漢詩らしいから、という答えもあるだろう。

②選ばれた句（聯）について、なぜ漢詩らしいと感じられるのか、この教科書に掲載されている和歌と比較しながら発表し、話し合う。 知技⑵ア・イ・ウ

和歌との比較は、具体的な和歌の表現を取り上げて細かく対照させてもよいし、和歌全体と比較した上で、何首か例示する形式でもよい。比較する和歌を選ぶには、「春」「秋」、「花」「月」「富士山」、また「送別」「望郷」など、背景・対象・主題などを同じくするもの同士が取り組みやすいことを示唆するのも有効であろう。また、単純に和文と訓読体の文法的違い（係り結びの有無、否定形の違いなど）を指摘することもあってよい。

【評価】和歌と比較しながら、漢詩らしい表現の特徴について考えているか、発言や行動を観察する。

2 漢文特有の言い回しや比喩の特徴について考えてみよう。

①この単元の漢文から、漢文らしいと思われる言い回しや比喩を一つ選ぶ。

「雑説」の末尾の文や「春夜宴桃李園序」の冒頭の比喩などが目にとまりやすい例であろう

②選ばれた言い回しや比喩の中に現代日本語の実用文や論説文に取り込まれているものがあるか、話し合う。 知技⑵ア・イ・ウ

「雑説」の例であれば、「名馬がいないのか、それとも名馬を見る目がないのか」のような修辞的選択疑問文の例を探しつつ、「嗚呼」などの感動詞は現代日本語の論説文ではあまり使われないことに注意を向けることになるであろうし、「春夜宴桃李園序」の例であれば、比喩表現を対で用いている例を探すことになる。いずれにしても、多くの文章から適切な比較例を探すことになるので、グループで作業するほうが取組みやすい。

【評価】漢文特有の言い回しや比喩について、現代日本語に取り込まれているものがあるか考えているか、発言や行動を観察する。

3 漢詩や漢文の表現方法が日本語・日本文学にどのように生かされているか、あるいはどのように異なっているか、この教科書掲載の漢詩の和訳（一四八ページ・一五〇ページ）も参考にして、まとめて発表してみよう。 知技(1)ア、思判表(1)ウ・エ 主態

①生かされている点と異なっている点について、一つずつ例をあげる。

生かされている点の例として、主題や発想の継承を挙げるのは比較的容易かと思われる。異なっている点については、対句を崩したり、否定形を肯定形に変えたり（不須辞→ツガセテオクレ）などが気づきやすい。

②あげられた例を分類して、漢詩や漢文の表現の特徴について、図表にしてまとめ、発表する。

生徒の自由な発想に委ねてよいところだが、例えば助字や疑問詞の効果的な使用、「葡萄美酒夜光杯」のような名詞のみの句の挿入、対句表現の多用、「千里」「千山」「万径」「万金」「三五夜」「二千里」などの数量表現の効果的使用など、語法面での特徴をまとめるのが、これまでの復習としても取組みやすい。

また、内容面からは、例えば友情表現の多さを指摘することも想定されるが、そこから漢詩文の担い手が士人（男性知識人）階層であったことなどを指導者が示唆するなど（「古典に関する文章」内に示唆がある）、作者や読者がどのような社会的位置にいるかということと表現の特徴とに関連性があることの理解への導入としてもよい。

【評価】 漢詩文の表現の特徴と、それが日本語とどのようにかかわるかを理解しているか、行動を点検したり、言語活動ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

（齋藤希史）